年報

平成 27 年度

Oita University of Nursing and Health Sciences

公立大学法人大分県立看護科学大学

平成 27 年度の年報発行にあたって

大分県立看護科学大学は、平成 10 年に開学後、平成 27 年度末で丸 18 年になります。開学以来、毎年、年報をまとめ、足跡を残してきました。

平成 27 年度は、平成 26 年 6 月に「地域における医療及び介護 の総合的な確保を推進するための関係法律の整備等に関する法律」が成立し保健師助産師看護師法が改正されたことをうけて、「特定行為に係る看護師の研修制度」が創設されました。この制度創設を受けて、本学では、平成 20 年度の開設以来大事にしてきた臨床推論能力の教育を堅持しながら、特定行為を大学院修士課程の NP コースで教育できるようにカリキュラムを見直して申請し、平成 27 年 10 月に制度創設と同時に指定研修機関に指定されました。西日本で唯一です。

また、平成 27 年度には、平成 25 年度に文部科学省の「地（知）の拠点事業」として採択された「看護学生による予防的家庭訪問実習」が、本格実施となりました。大分市野津原地域と富士見が丘団地で平成 27 年度は協力者 80 名を得て、1 年生から 4 年生まで計 330 名の学生が家庭訪問を行いました。その成果は、計 14 回にわたる報告会で説明され、地域との距離がとても近くなりました。

この年報は、上記のような大きな流れの中で、教員と職員が取り組んできた 実績をまとめたものです。教育活動と研究活動（学内プロジェクト、先端・奨励研究、研究助成金獲得状況）、その成果としての業績、更に、地域貢献の状況が示されています。特に、地域貢献では、教員が専門性を生かして大分県内や全国で活動し、かつ、大分県内の病院で研究指導を行い、その病院同士の交流 会が行われていることが記されています。また、業績の項からは、上述した NP 教育やその成果が国際誌にも掲載されていることが分かります。

このような実績は、本学を大事に思い、支えてくださった方々のお蔭です。心からお礼申し上げます。本学は、これからも、大分県の看護学の拠点として、教育・研究・社会貢献を通して看護の水準の向上に努め、着実に歩みを重ねていきたいと思います。

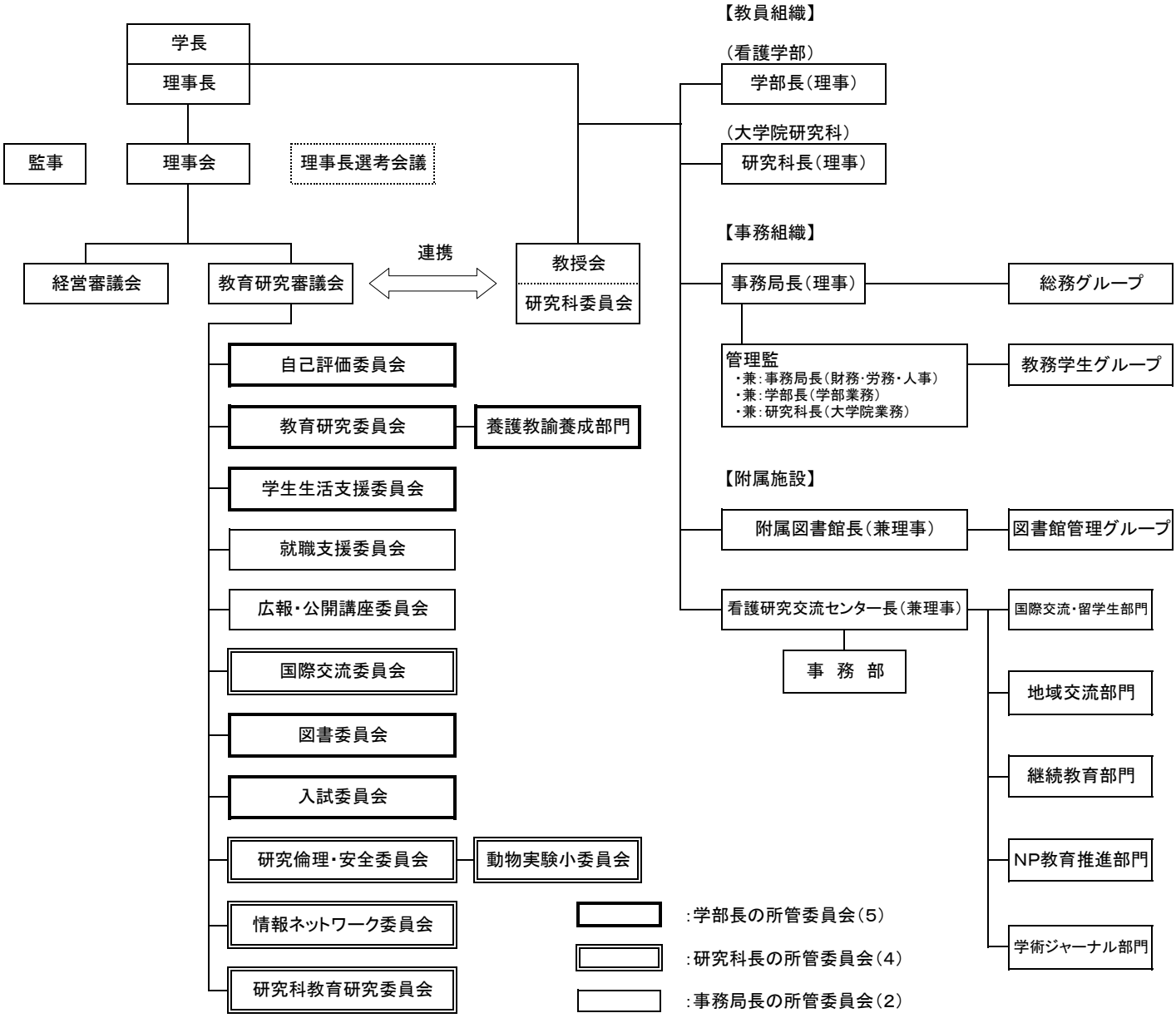
年報をお読みになって、忌憚のないご意見、また、ご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

大分県立看護科学大学
学長・理事長　村嶋 幸代

目 次

1.	委員会／ワーキンググループの活動	3
2.	学内行事の概要	31
3.	教育活動	34
4.	学内セミナー	135
5.	学内プロジェクト研究	136
6.	先端研究	139
7.	奨励研究	141
8.	インターネットジャーナル「看護科学研究」	145
9.	業績	146
10.	地域貢献	160
11.	助成研究	173
12.	各種研究・研修派遣	177
13.	学会研究者の受入	179
14.	役員及び審議会委員名簿	180
15.	教職員名簿	181

法　人　組　織　図


学長
理事長
監事
理事会
理事長選考会議
経営審議会
教育研究審議会
連携
教授会
研究科委員会
自己評価委員会
教育研究委員会
養護教諭養成部門
学生生活支援委員会
就職支援委員会
広報・公開講座委員会
国際交流委員会
図書委員会
入試委員会
研究倫理・安全委員会
動物実験小委員会
情報ネットワーク委員会
研究科教育研究委員会
【教員組織】
（看護学部）
学部長（理事）
（大学院研究科）
研究科長（理事）
【事務組織】
事務局長（理事）
総務グループ
管理監
・兼：事務局長（財務・労務・人事）
・兼：学部長（学部業務）
・兼：研究科長（大学院業務）
教務学生グループ
【附属施設】
附属図書館長（兼理事）
図書館管理グループ
看護研究交流センター長（兼理事）
事　務　部
国際交流・留学生部門
地域交流部門
継続教育部門
NP教育推進部門
学術ジャーナル部門
：学部長の所管委員会（5）
：研究科長の所管委員会（4）
：事務局長の所管委員会（2）

平成 27 年度 委員会等構成

平成27年5月1日

委員会名	委員長	副委員長	委　員									担当
自己評価	佐伯	関根	宮内	吉田	草野	緒方		(橋本(満))				藤内
教育研究	藤内	濱中	佐伯	佐藤(玉)	吉村	石田	小嶋	(堤)	(染矢)			藤内
学生生活支援	林	小嶋	関根	岩崎(香)	巻野	樋口	河野	(浜松)	(工藤(優))			藤内
就職支援	梅野	杉本	田中	足立	岡元			(堤)	(神崎)			堤
広報・公開講座	高野	安部(眞)	品川	石丸	石川	後藤		(橋本(正))	(中野)	(久保)		堤
国際交流	シャーリー	大下	濱中	崔	伊東	吉川	江藤	(石川)				影山
図書	甲斐(倫)	宮内	中釜	山田				(橋本(満))	(白川)	(姫野)	(挟間)	藤内
入試												藤内
研究倫理・安全	市瀬	平野	矢野	杉本	秦	石岡		(渋谷)				影山
情報ネットワーク	甲斐(倫)	品川	巻野	野津	石川			(岩崎)				影山
研究科教育研究	影山	小野	甲斐(倫)	梅野	赤星			(神崎)				影山
プロジェクト名	**リーダー**		**メンバー**									
NPプロジェクト	小野		村嶋 濱中 草野	甲斐(倫) 福田 甲斐(博)	高野 大下	藤内 石田	佐伯 宮内	(堤)	(橋本(満))			
COCプロジェクト	佐藤(玉)		村嶋 福田	市瀬 岩崎(り)	藤内	影山	小野	(堤) (江田)	(橋本(満))	(岩崎)	(中野)	
健康増進プロジェクト	稲垣		赤星 河野	秦 岡元	安部(眞)	巻野	田中					

部門・小委員会・ワーキンググループ名	部門長・リーダー	部門員・メンバー								
養護教諭養成運営部門	吉村	伊東	関根	赤星	草野	森田	浜松			
実習運営小委員会	石田	赤星	秦	佐藤(弥)	石岡	後藤	田中	足立	河野	江藤
動物実験小委員会	市瀬	影山	小嶋	定金	岩崎(香)	渋谷				
国家試験対策小委員会	小嶋	石岡	石丸	中釜	山田	後藤	岡元	神崎		
看護スキルアップ演習WG	伊東	矢野	佐藤(弥)	緒方	山田	足立	西部			
実習改革WG	秦	小嶋	甲斐(博)	岩崎(香)	安部(眞)	巻野	中釜	吉川	＜藤内＞	
進級試験WG	濱中	佐伯	石田	甲斐(博)	巻野					
大学案内パンフWG	安部(眞)	緒方	石川	足立	西部	森田	橋本(正)			
学外Web－WG	品川	後藤	河野							
英文Web・パンフレット－WG	シャーリー	大下	桑野	岩崎(香)	江藤	馬場	中野			
ネットワークWG	品川	甲斐	小嶋	染矢						
WindowsサポートWG	野津	佐伯	樋口	染矢						
MacサポートWG	小嶋	石川								
フェイスブックWG	野津	田中	石川(華)							
広報紙WG	堤	西部	橋本(満)	橋本(正)	久保					

看護研究交流センター

部門名	部門長	部門員				
国際交流・留学生部門	シャーリー	福田	大下	桑野	馬場	石川(華)
地域交流部門	センター長	佐藤(玉)	赤星	佐藤(弥)	岩崎(り)	
NP教育推進部門	福田	草野	甲斐(博)			
継続教育部門	伊東	樋口	後藤			
学術ジャーナル部門	平野	シャーリー	定金	安部(眞)	馬場	森田	白川

１ 委員会／小委員会／ワーキンググループの活動

１－１　理事会

理事長：村嶋 幸代
理事：藤内 美保、影山 隆之、堤 健一（以上、学内理事）
　　津村 弘、小寺 隆、高橋 靖周（以上、学外理事）
監事：神品 実子、岩尾 隆志

理事会の役割は、法人の運営に関する重要事項を審議することである。

本年度は５回の理事会を開催し、教育研究審議会報告の後、年度計画に関する事項、地方独立行政法人により知事の許可または承認を受けなければならない事項、重要な規定の制定または改正、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価などについて審議した。

なお、理事会成員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから経営審議会と同時に開催した。

１－２　経営審議会

理事長：村嶋 幸代
理事：藤内 美保、影山 隆之、堤 健一（以上、学内理事）
　　津村 弘、小寺 隆、高橋 靖周（以上、学外理事）
　　千野 博之、上子 秋生、松尾 和行、松原 啓子（以上、経営審議会委員）

本審議会の役割は、法人の経営に関する重要事項を審議することである。

本年度は５回の経営審議会を開催し、年度計画に関する事項のうち、法人の経営に関するもの、地方独立行政法人により知事の許可または承認を受けなければならない事項のうち法人の経営に関するもの、重要な規定の制定または改正に関する事項のうち法人の経営に関するもの、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価に関する事項のうち法人の経営に関するもの、組織及び運営の状況について自ら行う点検および評価などについて審議した。

なお、理事会成員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから経営審議会と同時に開催した。

１－３　教育研究審議会

構成員　村嶋 幸代（学長）、藤内 美保（学部長）、影山 隆之（研究科長）、堤 健一（事務局長）、葉玉 哲生（学外委員）、各研究室代表者、各委員長

本教育研究審議会の役割は、大学の教育研究に関する重要事項の審議を行うことである。本年度は12回（うち臨時１回を含む）の教育研究審議会を開催し、各種委員会報告を行うと共に中期目標・中期計画に関する事項、学則の改正、学生の就業、進級判定、休学、復学、退学、学位の授与に関する事項、教員の人事及び評価に関する事項、教員の自己点検・自己評価に関する事項、各種諸規定等について審議・承認した。各回の教育研究審議会の議事内容は理事会で報告された。

１－４　教授会

構成員　村嶋 幸代（学長）、藤内 美保（学部長）、各教授、准教授、講師、堤 健一（事務局長）

本教授会の役割は、大学の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、卒業、その他の在籍に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項の審議を行うことである。

本年度は４回の教授会を開催し、学部入試の合否判定、卒業判定、および学生の表彰（学長賞、卒業研究の優秀賞、学生賞）および本年度は突然の傷病にもかかわらず卒業要件を満たした学生に学長特別賞の授与に関する事項について審議・承認した。教育研究審議会で審議・承認された休学、復学、退学、進級判定についての事項は教授会で報告された。

１－５　研究科委員会

構成員　村嶋 幸代（学長）、影山 隆之（研究科長）、各教授、各准教授、各講師

研究科委員会では、大学院の教育課程における学生の入学、修了、その他在籍に関する事項及び学位の授与に関する事項の審議を行った。

１－６　自己評価委員会

構成員　佐伯 圭一郎、関根 剛、宮内 信治、吉田 成一、草野 淳子、緒方 文子、橋本 満男、渋谷 真由美（12 月～）

自己評価委員会は、その名の通り自己評価・自己点検活動および第三者評価受審に関わる活動を主たる分掌事項としている。また、自己評価に関連して年報作成等に関連する議事録整備や授業・カリキュラムアンケートの実施を担当している。

さらに、FD 活動に関わる事項およびハラスメント対策に関する各種活動も担当している。

1. FD 活動

(1) ４月１、２日に、14 名を対象として新任教員研修会を開催した。研修会後、参加者にアンケートを行い、次年度の内容等を調整した。５月異動で着任した職員については、配付資料および学長講話の録画および事務局の個別対応で研修を実施した。

(2) 研修派遣の募集と選考を行った。短期海外派遣研修２名、短期国内派遣研修１名が派遣された。

(3) ８月 26 日に科研費申請説明会を実施した。また、科研費申請に関する研修会を９月３日に影山研究科長を講師として開催し、35 名が参加した。

(4) アニュアルミーティング : ３月４日にアニュアルミーティングを開催し、23 演題が発表された。ポスター形式による発表で質疑応答も活発であったが、２群に分かれた発表時間が重なっている点など改善に関する要望が寄せられた。

(5) FD 関連・ハラスメント対策関連など各種研修会の情報をメールにて随時提供した。

(6) 助手助教の交流の場としての本年度３回開催された助助会の開催を支援した。

2. 授業評価・カリキュラムアンケート

(1) 授業アンケート : 学生による授業評価としての授業アンケートを３年間対象となっていない教員に実施を依頼し、16 名が実施した。

(2)本学の教育活動全般に関する学生からの評価資料として、２年次終了時点および４年次終了時点で本学の教育に関するアンケートを実施し、結果を学内に公開した。

3. 人権啓発・ハラスメント防止

(1) 人権研修会:３月２日に人権研修会、テーマ「思いやりのこころ　～　なぜ差別は続くのか　～」を開催した。教職員 52 名が参加した。

(2) ハラスメント対策に関して、学外相談機関を継続して委嘱するとともに、ハラスメント対策員による対応体制を維持し、ハラスメント相談に関する情報を学内に提供した。またハラスメント相談員の研修会を開催した。相談員への相談は０件であった。

4. 自己評価・大学機関別認証評価

(1) 平成 26 年度年報をとりまとめ、公開した。また平成 27 年度年報の入力依頼を例年よりは早め

るとともに 12 月に年報説明会を開催した。
⑵ 議事録の整備状況を随時確認するとともに、表記上の問題等についてチェックし、必要に応じて修正を依頼した。
⑶来年度受審の大学機関別認証評価のための説明会に自己評価委員会から４名が参加した。また、自己評価書の編集作業を開始し、３月に初稿をまとめた。

大学機関別認証評価受審の準備を進め、自己評価書を完成させる。
各種 FD 活動について、年間プランを策定し、実施に関しては他の委員会等と連携して、効率よく効果的な FD を推進することが必要である。

１－７　教育研究委員会

構成員　藤内 美保、濱中 良志、佐伯 圭一郎、佐藤 玉枝、吉村 匠平、石田 佳代子、小嶋 光明
（事務局）堤 健一、染矢 哲朗、（オブザーバー）影山 隆之、村嶋 幸代

本委員会は、学部学生の教育と教員の研究を効果的かつ円滑に行うために、教育・研究関連の活動と教育・研究予算の策定を行っている。本年度も例年通り、毎月（8 月除く）定例の委員会として 11 回、臨時の会議を 2 回開催した。
平成 27 年度カリキュラム改正により、予防的家庭訪問実習を全学年で実施したこと、養護教諭１種を新たに導入した。予防的家庭訪問実習については、１～４年次生グループを 80 チーム編成し、80 人の地域の協力者の家庭に訪問したり、事業報告会（地域交流会）で学びの共有を図った（COC プロジェクトで詳細な記載がある）。養護教諭１種は希望者へのオリエンテーションを実施し個別に対応し、スムーズな履修となるよう導き、14 名が履修登録した。
本委員会の附属組織として、今年度から変更したことは、「国家試験対策小委員会」「実習運営小委員会」とし、これまでのワーキンググループから小委員会とした。小委員会として、「国家試験対策小委員会」は運営の判断は小委員会で行い、本委員会に報告することを基本とした。「実習運営小委員会」は看護技術習得プログラムの単位認定は小委員会の委員長が単位認定者とした。ただし、総合看護学実習については県下約 40 ヶ所の施設の協力を依頼するため、従来どおり学部長が単位認定者とした。また、実習改革ワーキンググループを新たに組織し、学生が主体的に学び態度形成のための体制や臨地実習で自律的に学習できる学生を育成することを目的に活動を開始した。

1. 国家試験対策に関しては、３年次から模試を開始した。４年次生においても解剖、生理、病理等の基礎試験を９月に実施し、また統計的データをもとにし、強化すべき領域の補講も９月から実施した。国家試験対策 Web 版を本年度より導入し、効果的な活用方法について検討し実施した。
2. 看護学実習（第１段階～第６段階実習）関連では、実習代表者会議のもとで全体の実習日程調整や担当教員、専任教員配置、年間の実習指導週数などを調整し、本委員会で最終的に決定した。初期体験実習は今年度から新たな目標、方法で実施し、初期からより自律的な態度がとれるよう実習

体制を試みた。実習施設と大学の連携強化にむけて、実習指導の充実を図っている。

実習運営小委員会は、看護技術修得プログラムでファーストステップ～フォースステップまで、看護系教員全員で指導した。サードステップでは、エルゼビアの e-ラーニングを導入し演習を学生が自主的に行った。フォースステップでは大分赤十字病院の看護師 10 名による臨場感のある指導で学びが深められた。

実習改革 WG は、昨年度ヒヤリングしたことをまとめ、SWOT 分析で課題を明らかにし、対策の方向性を示した。人間科学系と看護系の有機的な連携の必要性、実習指導体制については看護系教員の実習指導指針などの作成をしている。

3. 卒業研究関連は、３月末に各研究室の卒業研究テーマを収集した。実習施設をフィールドにする場合は調整を行った。各研究室で順調に進め、２日間にわたり卒業研究発表会を講堂で行った。今年は学生の有志が座長としても参加した。卒業研究の優秀賞は、例年通り、発表会で教員全員が評価し、実験部門と調査部門の上位２割の論文を７名の審査員が論文審査を行い、２名を選考し、卒業式の日に表彰した。また、事故で負傷を負った男子学生には、本人の努力とクラスの協力によって卒論を含むすべての単位を取得したので、学長特別賞を授与した。
4. 総合人間学は４年次生および一般公開をし、県内外で活動している医療分野以外の講師の講義を８回開催した。今年度は講堂工事の関係で、講義室で開催した。今年度から導入したレポート提出は、要点がまとめられ、学びの深まりが認められた。
5. 進級試験は、今年度は大改革を行い、基本的かつ重要な知識を２年次生で習得するという本来の目的を達成できる方法に見直した。教員全員が出題することで２年次生に応じた難易度とし、プール問題を確保した。本試験での合格率は約 75%、再試験では全員が合格した。
6. 研究予算関連では、例年通り、プロジェクト研究、先端研究、奨励研究を予算化し、奨励研究以外はヒヤリングを行った。昨年度から２年間継続研究を導入し、本年度は全研究が２年間とした。今年度の新規採択は、先端研究２件、奨励研究４件である。2 年目の継続研究は、プロジェクト研究１件、先端研究２件、奨励研究３件である。
7. シラバス関連は、平成 28 年度のシラバス作成を行った。シラバスの冒頭にディプロマポリシーやカリキュラムポリシーを掲載し、学生が学部教育で目指すべき能力を認識できるよう工夫した。時間割は、担当教員との連絡調整重ねて、スムーズな授業運営ができるよう調整した。また１年次生が４月当初から５限が続かないように調整を行った。
8. 平成 27 年度の前期･後期の科目等履修生と平成 27 年度研究生の募集では､応募者はいなかった。
9. 委員会全体の教育支援として、学部学生の学習のモチベーションや学ぶべき方向が見えるよう、ディプロマポリシーを教室に掲示した。また、優秀な学生をより多く確保するためのフリーディスカッションを行い、約 30 名の教員有志が参加し、様々な提案をした。

平成 27 年度は全学学生が予防的家庭訪問実習に取り組んだ。今年度の評価を行い、課題を明らかにし改善していく。また養護教諭１種養成課程の教育は２年目となり、学生の意見・要望などを聴き取り、丁寧に対応することが必要である。

また、４年間の看護基礎教育のなかでどのような能力を身に付けていくか学生自身が自覚し、自律的に考え行動できるための教育環境の整備改善を行う。そのために現状を知ることが必要である。来

年度にむけて、現状の評価対象や評価方法を見直し、体系的・客観的評価の計画を立案し、学生の自律性を引き出す教育改革に取り組む必要性がある。また、教育について語り合うフリーディスカッションを来年度も継続し開催する。

１）　国家試験対策小委員会

構成員　小嶋 光明、石岡 洋子、石丸 智子、中釜 英俚佳、山田 貴子、後藤 成人、佐藤 愛、神崎 正太

看護師国家試験合格率 100%をめざして国家試験ガイダンスを４月に実施し、学生の学習への自覚を促した。また、10 回行なった模試の結果を分析して、学生が苦手な領域を絞り込み、12 月の卒論発表後に補講を行なった。成績不振の学生に対しては個別指導を行った。３月 25 日に発表された合格率は、全国が 89.4%であったのに対して本学は 97.4%であった。

２）　実習運営小委員会

構成員　石田 佳代子、赤星 琴美、足立 綾、石岡 洋子、江藤 由布子、河野 優子、後藤 成人、佐藤 弥生、秦 さと子、田中 佳子

実習運営小委員会（旧名：実習関連 WG）の主な活動目的と役割は、１）１年次から４年次までを通じ、学生が段階的に看護実践力を修得できるように、看護技術修得プログラム（統合科目）を企画・運営・評価すること、２）総合看護学実習の運営を行うこと、３）学生が効果的に看護実践に関する学習ができるように、研究室領域間で情報交換し、臨地実習における環境整備を行うこと、である。月１回の定例会議を開催し、上述に基づいて活動を行った。今年度、新たに行った主な活動内容は以下のとおりである。

１）看護技術修得プログラムの企画・運営・評価

第１～３段階看護技術演習（ファーストステップ、セカンドステップ、サードステップ）を実施し、単位認定を行った。第４段階看護技術演習（フォースステップ）（時期：４年次２月、単位不要の自主参加型）について、演習講師（外部講師）と参加した学生を対象にアンケートを行い、評価を行った。

来年度より、看護アセスメント学実習の時期が 12 月へ移行することに伴い、ファーストステップの時期を 12 月から１～２月へ移行した。

２）総合看護学実習の運営

今年度より、学内発表会における学生間での意見交換が活発に行えるように、グループ討議形式か

らポスター発表形式へ変更した。実習終了後に学生を対象にアンケートを行い、実習目標の到達度や実習に関する意見を集約し、評価を行った。その結果、学生のマネジメント能力の育成が課題となり、来年度の実習に向けて、教員および学生オリエンテーションでマネジメント能力を養うための実習方法をテーマに挙げて説明を行った。実習要項等の関連書類については、実習目標の表現の一部修正や実習評価基準の修正を行い、改善した。なお、教育研究委員会での審議を経て、海外施設での実習希望者に対する施設との交渉条件などを明確化した。

３）各実習施設の実習環境の整備等

各実習施設にあるパソコンや実習物品等の点検、水銀血圧計や水銀体温計の撤廃に伴う計画的な入替、新規実習施設の実習物品の準備などを進め、利用環境を改善した。

４）実習ガイドブック等の見直し

本学のディプロマポリシー、学生の保険内容、新規実習施設の概要などを加筆するなどして、記載内容を充実させた。

５）ナーシングスキル（e-learning 教材）の利用状況調査と利用推進

ログイン調査の結果、学生の利用状況では３年生の利用が少なかった。来年度は４段階実習前や実習期間中における学習への活用を促すなど、調査結果をふまえて、さらに利用できる方法を検討する。教員の利用状況では研究室によって利用頻度に差があった。来年度は、教員向けの研修会開催などを計画し、教員にも利用を推進する予定である。

６）大学を象徴する実習服の検討

大学のロゴマークを刺繍した実習服の導入について、学生と教職員を対象にアンケートを行い、結果をフィードバックした。また、日本看護系大学協議会会員校データベースにおける大学情報（実習服紹介）の掲載内容案を作成した。

７）学生による主体的な実習室利用に関する検討

学生が、実習室での自主学習において使用する消耗品などを無駄なく適切に管理しながら、主体的に運用できるような学習環境の整備について検討した。今年度は、各実習室を巡回調査して、学生が自由に利用可能な物品収納スペースについて検討した。来年度は、スペースを具体的に決めて試行する予定である。

以上の他、実習ガイドブック（2015 年度版）の作成、看護技術習得確認シートの作成および卒業前の看護技術習得状況の調査、看護学実習 Web ページの整備と管理、実習関連予算の管理、などを例年通り行った。

３）　看護スキルアップ演習ＷＧ

構成員　伊東 朋子、佐藤 弥生、矢野 美紀、緒方 文子、西部 由里奈、足立 綾、山田 貴子

基礎看護教育の総仕上げとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を有機的に統合し、適切なアセスメント能力および看護技術を提供できる能力を養うことをねらいにして、「看護スキルアップ演習 WG」が中心となり、全教職員が本演習に関わり、円滑に指導展開できるように調整・準備した。

具体的には医療・保健現場において遭遇しやすい事例（成人老年、小児、母性、精神、在宅）を通して、多角的な見方や論理的な考え方を深め、適切にアセスメントする能力を身につける。検討した事例について、根拠に基づき、対象者のニーズや状況にあわせて判断し、安全安楽な看護技術をロールプレイする。グループ発表後のディスカッションを通じて、ディスカッションの結果を踏まえて学習を深める。

グループ発表会では教職員による患者役の演示や指導助言をいただいた。４年生に年齢の近い卒後５年以内位の卒業生７名（別府医療センター : 安藤 聡美、大分赤十字病院 : 安部 悠、畔津 綾子、厚生連鶴見病院 : 光根 美保、大分医療センター : 大戸 由架、大分県立病院 : 佐藤 寛子、安東 淑真）にアドバイザーになっていただき、演習効果も上がった。病気療養中の学生もグループワークには、病院より外出届で参加した。出欠席状況は欠席１名（発熱）あったが無断欠席はなく、遅刻２名、公欠（就職活動）５人であった。全員期限内でのレポート提出があり、例年と同様の学びがあったと評価できる。

本演習の発表会２日目は金曜日で総合人間学があり、スケジュールが過密になるので、発表会１日目に４事例を発表し、発表会２日目は２事例発表に変更することを検討する。

教員の講評について、司会は質疑応答等の時間配分を考えながら依頼するようにする。

４）　実習改革ＷＧ

構成員　秦 さと子、小嶋 光明、甲斐 博美、岩崎 香子、安部 真紀、巻野 雄介、中釜 英里佳、吉川 加奈子

基幹実習施設の指導者からのヒヤリングによる評価及び本学看護系教員による実習に関する意見をもとに本学の実習における学生の特徴を抽出し、対策を明示した。対策に対し教員の実習指導指針案の作成、科学的な思考・判断力と看護実践力を高めるための教育体制（カリキュラム組替え）案の作成、実習指導施設との連携強化のための検討事項案の作成に現在取り組んでいる。

次年度は、教員の実習指導指針の活用と評価、実習指導施設との連携強化のための基礎資料の提示、カリキュラム組替え構想の具体案の提示を計画している。

５）　進級試験ＷＧ

構成員　濱中 良志、佐伯 圭一郎、石田 佳代子、甲斐 博美、巻野 雄介

例年の進級試験の２年次生の実態について、調査・検討した結果、“本試験問題を回収していたため、生徒全員で、本試験問題を書き写し試験の解答に集中していない”ということが判明した。原因として、“教員が再試験を本試験と類似性の高い問題を作成するという学生の認識があったため”という結論に達した。よって、今年度は、進級試験に集中してもらうために、本試験問題を学生から回収しないようにし、本試験の問題のやり直しは十分確保できるようにした。更に、再試験問題は、本試験と異なる問題を作成するにあたり、作成する問題数を増やす必要があったので、本学の教員全体で問題作成を行った。その結果、本試験の合格率が例年の 25%程度から 75%へと飛躍的に上昇した。

２年次生までに学んだ知識の整理と今後の病院実習の準備のために、２年次後半に進級試験が実施されている。進級試験を効果的に行うために、良質な問題をプールする方針とした。目標の 1000 問の問題が完成するまで、教員全体での問題作成を続けていく予定である。

６）　養護教諭養成部門

構成員　吉村 匠平、伊東 朋子、関根 剛、赤星 琴美、草野 淳子、森田 慶子、浜松 弘一

平成 27 年度カリキュラムより開始された養護教諭養成課程の運営を担当した。本年度の活動内容は、下記のとおり。教員の移動に伴う養護教諭関連科目の履修時期の調整、教員の移動に伴う養護教諭関連科目の担当講師の調整、在校生（２～４年次生）対象のガイダンスの実施、１年生対象のガイダンスの実施（３回）、図書（学術誌、雑誌、書籍）の整備、日本養護教諭養成大学協議会への加入及び年次大会への参加、大分市教育委員会及び大分県教育委員会との連絡調整、オープンキャンパスでの模擬授業の実施、教職概論の学外講師（４名）の調整、大分県教員採用試験過去問の収集、熊本大学養護教諭別科の過去問の収集、第 62 回学校保健学会への参加、日本看護系大学協議会主催の「看護系大学の養護教諭養成教育に関するワークショップ」への参加、県教育委員会と大学の連絡協議会への参加、パンフレットおよび広報誌への養護教諭養成課程関連情報の掲載。

その他の協議事項として、課程費は徴収しないこと、科目等履修を利用した免許取得には対応しないことを決定した。

新年度当初に、２年次生対象に履修カルテを用いた面談を実施する。また２年次の開講科目の一部が土日開講になるため、学生への負担が過重なものでないか、適宜ヒヤリングを行う。履修希望者が定員を超過した場合の対応（選考を実施するのか、するとしてその方法をどうするか等）について協

議する。平成 28 年度内に、外部講師を招聘して養護実習についての研修会を行う。

１－８　学生生活支援委員会

構成員　林 猪都子、小嶋 光明、関根 剛、岩崎 香子、巻野 雄介、樋口 幸、河野 優子、工藤 優、工藤 哲生、浜松 弘一

学生の大学生活を充実させるための環境整備をする、学生に必要とされるサポートをタイムリーに提供することを目標に下記の活動を展開した。

1. 学生関連イベントの企画・運営

全学生オリエンテーション（４月９日）、新入生オリエンテーション・のつはる少年自然の家宿泊研修（４月 10 日、11 日）、コンタクトグループ（４月９日）、全学スポーツ交流会（４月 24 日）（ドッヂビー、全学生・教職員への実況中継）、キャンパスクリーンデー（５月 13 日）、ＤＶ講演会（５月 20 日）を企画し実施した。

2. 学生相談

各学年担任を中心に学生相談業務を行った。内容は相談（ハラスメント相談窓口）、学習相談（単位取得、進級に関するもの、１年次の入学直後に既習科目・状況調査、前期前半終了時に学習状況調査を実施、１年次生に対する学習相談（７月９日）７名参加）、休退学・復学相談と面談（保護者面談を含む）、過年度、休学中の学生支援などを行った。また、平成 23 年度カリキュラムから平成 27 年度カリキュラムの移行に伴い、カリキュラム読み替え表にて変更内容を確認した。

3. 学生の自主活動への支援

サークル活動支援、若葉祭における学生支援全般、自治会活動支援などを行った。

4. 経済支援

奨学金による経済支援（日本学生支援機構の奨学金支給など）、奨学金情報の収集、周知活動などを行った。

5. 健康支援

学生の健康管理支援（集団健康診断、風疹抗体検査（３年次生一部）、個別相談）、学生の保険関係の支援（加入手続き事務、退学・休学者の返還・追加、事故・疾病による入院、退院の補償請求に関する支援など）について保健室保健師を中心に行った。保健室の学生相談件数は 508 件で、そのうちメンタルヘルスによる学生相談件数は 18 件（延べ 83 件）であり、メンタルヘルス事例に対応した学生支援が今年度から可能となり、コンサルテーションを医師からは年１件、カ

ンセラーからは年４件実施した。

6. 交痛安全推進

交通安全指導の実施（自動車講習会４月 23 日・自動二輪実技講習会５月９日）、通学許可面接（通学許可交付面接、交通事故対応の指導）、学生が被害・加害者となった場合の交痛事故対応、駐車場管理（許可シールの交付、無許可利用者・違反者への対応）などを行った。

7. 学生生活に関する調査

学生生活実態調査（質問紙作成、実施、集計、報告書の作成、公開）について実施した。

8. その他

新人教員オリエンテーション（４月２日）、九州地区公立学生部長会議（９月 18 日）、九州地区学生指導研究集会（９月３日～４日：次年度担当校のため４名参加）、学外者クレーム対応などを行った。

新入生オリエンテーションを他学年や教員との交流する機会を増やすために、次年度は大学内で実施することとした。また、保健室のメンタルヘルスへの対応件数が増加しているため、次年度から月１回は委託でカウンセラーに来学いただき、残り１回は緊急性のある場合のコンサルティングとして活用することとした。

１－９　就職支援委員会

構成員　梅野 貴恵、杉本 圭以子、田中 佳子、足立 綾、佐藤 愛、堤 健一、神崎 正太

学生の就職・進学の円滑化と県内就職率 50%を目指して、就職・進学活動を支援し年間計画に沿って活動を行った。

1. 求人数、求人件数、求人訪問対応：求人数（件数）は、全国 15,366 人（433 件）、大分県 265 人(47 件)であった。全国からの求人訪問対応は 43 件であった。
2. 学生の就職・進路状況：卒業生 78 名であり、就職決定者 55 名（看護師 55 名）、未定者４名、進学者 19 名（保健師 10 名、助産師６名、養護教諭３名）であった。学生に対しては各委員が分担して、学生への個別支援を行った。必要な学生には個々にメールで情報を提供した。
3. 就職相談室：就職相談員１名を配置し、第２、４水曜日の午後に学生の就職相談を実施した。就職相談員は３、４年次生全員に就職面接を実施し、学生の就職・進学希望に関する実態を把握し相談にのった。
4. 県内施設就職説明会：３年次生対象に県内施設就職説明会を開催した。（平成 28 年３月２日；28 施設参加）説明会の方法は午前と午後の２部に分けて学生全体へ施設概要を説明し、その後施設ブースでの個別相談を行った。個別相談は学生が座って２～３施設の話が聞けて好評であった。

5. 県内施設実習病院と卒業生・修了生との交流会：卒業生・修了生との交流会を３施設（大分県立病院、国立病院機構大分医療センター、厚生連鶴見病院）で開催した。参加者は実習施設 12 名、卒業生・修了生 40 名、教員 34 名（延べ人数）であった。卒業生の病院での活動状況、新人教育の状況、学部生の様子、学部生へのメッセージ、大学への要望など有意義な意見を得ることができた。
6. 就職・進学ガイダンス：３年次生対象に就職ガイダンスを 7 月 7 日（火）、平成 28 年２月 24 日（水）の２回開催した。
7. 病院選び・身だしなみ講座：平成 28 年２月 17 日（木）３年次生対象に、株式会社マイナビ、株式会社フタタに講師を依頼し、九州内の看護職募集の現状や自分にあった病院の探し方と身だしなみ講座を開催した。病院説明会やインターンシップ参加の動機づけの機会となり、スーツの基本的な着こなしについて学ぶことができた。
8. 面接講座：個人面接講座はマイナビに講師を依頼し、６月 17 日（火）４年次生を対象に開催した。就職試験前であったことから概ね好評であったが、一部学生の必要書類応募が終了していたこともあり、早期の開催を希望する声が聞かれた。
9. 模擬面接：模擬面接を３回開催し 46 名の学生に実施した。
10. 県内施設インターンシップ：７月と２月に県内のインターンシップの開催状況や参加の仕方について説明し、就職選択に関する支援を行った。
11. 就職推薦施設の一覧表作成：本年度就職推薦を実施している６か所の施設の詳細を、一覧表に作成して学生に提示し、募集資料到着時にメールで周知した。
12. 就職対応卒業生名簿の作成：本年度就職対応を実施した中で、11 施設に就職している卒業生を確認し、就職対応卒業生名簿を作成した。
13. 卒業生の県内施設Ｕターン支援：ホームカミングディや四つ葉会同窓会総会の際に、「大分県内求人情報」の冊子とナースセンターより提供された施設情報の冊子を設置し、卒業生に情報提供を行った。

本年度は県内出身者が 61.6%で県内就職率は 52.7%であった。進学者が全体の 24.4%と例年に比べ多かったためと考えられる。今後も県内就職率 50%を確保するための方策として、ホームカミングディに合わせて、県内施設に就業している卒業生を招聘し、在学生との交流会を予定している。また、実習基幹施設の本学卒業生との交流会の開催は、来年度は大分県立病院と大分大学医学部附属病院を予定している。平成 37 年問題による高度急性期施設の病床数削減等により、看護職員の採用に影響が出始めているため、株式会社マイナビ等から情報収集し、最新の情報を学生に提供していく。

１－10　広報・公開講座委員会

構成員　高野 政子、安部 眞佐子、品川 佳満、後藤 成人、石丸 智子、石川 純也、事務局 堤 健一、橋本 正和、中野 麻梨子、久保 紘子

1) 若葉祭教職員企画

５月 16 日、17 日の若葉祭において教員イベントの企画募集と当日運営を実施した。教員企画は健康教育等の大学学部教育の一部内容や設備の紹介など 12 企画を開催し、参加者は２日間で 895 名であった。教員イベントでは、学生にも協力者として数名ずつ参加してもらうことで、学生と地域の人々とのふれあいの場ともなっている。また、地域の方々や学生に、学部で行っている研究を知ってもらう目的で、全研究室の卒論をポスター掲示した。その他、広報活動として、研究室紹介のパネルを更新し、７月開催予定のオープンキャンパスの案内チラシ、大学案内パンフレットを研究棟入口に配置するなど、一般の方々や進学予定者にも大学の内容が伝わるように配慮した。

2) オープンキャンパス

７月 19 日（日）に開催した。当日は 350 名（高校生 255 名、保護者 83 名、その他 12 名、昨年比プラス 36 名）と多くの参加があり、本学について大いにアピールできた。講堂での全体説明会では、入試情報の提供や学生自治会による TAKIO ソーランの演舞、１年次生の合格体験発表、３年次生、４年次生からの在校生メッセージの発表などを企画した。また、模擬授業や体験イベントなど、教職員全員と学生の協力者とで取り組んだ。特に在学生が相談コーナーや体験イベントを担当したことや、実習室への誘導を行ったことは、参加者が在学生と交流する機会となり、入学後のイメージを深める一助となったと思われる。

3) 地域ふれあい祭り

11 月１日（日）に開催された「ななせの里まつり（主催者発表の参加者 5000 人）」に参加した。本イベントは大学に隣接するみどりマザーランドで開催された。大学紹介はテント 内でのパネル掲示と、大学案内パンフレットの配布や COC 地の拠点事業の紹介を行った。ブースの来場者は地元住民で、約 80 名であった。その他、イベントの駕籠かきレースには学生や学長はじめ教職員等が参加し活躍した。また、健康増進プロジェクトと協働し、血圧測定、体成分分析、握力測定などの健康指導・健康チェックを実施した。

4) 出前講義

看護系進学を希望する高校生を対象とした高校の出前講義に講師を派遣した。高校からの依頼で、助教以上の教員を派遣した。県立臼杵高校(６月 25 日)、中津南高校(７月８日)、日田高校（9 月 16 日)、鶴崎高校(10 月 15 日)、熊本八代清流高校(10 月 22 日)、三重総合高校(12 月 16 日)、私立大分高校(12 月 16 日)等であった。出前講義には大学案内パンフを持参し広報した。

5) 大学見学

オープンキャンパスに参加できなかった高校生や保護者の大学見学等の希望者、申し込みに随時対応した。高校からの大学訪問は、佐伯鶴岡・新佐伯豊南高校 PTA（12 月 4 日）20 名（教諭２名含む)が来学した。教職員で大学概要、入試や卒業後の進路についての説明、最後に施設見学等を実施した。

6) 大学オリジナルグッズの作成

大学名の入った大学オリジナルグッズを作成し、大学広報の１つとして活用できるようにした。クリアファイル（2000 枚）には大分県のメジロンが温泉に入るおんせん県おおいたキャンペーン入りを追加購入した。また、大学名入りの付箋を 1200 個新規に作成した。

7) 大学 HP およびマスメディアによる広報

今年度は大学 HP の新サイトを構築した。大学 HP では、大学アルバムで学生消防隊の発足や大学イベント、学生のボランティア活動などの社会貢献活動についても随時に公開した。また、教員の研究紹介を毎月更新し 35 件を掲載した。定期的に年 3 回、大学 HP に掲載している大学 Q&A を更新し、入試情報等を新たな記事にして公開した。また、広報広聴課の広報番組である TOS テレビの「ほっとハート大分」ではオープンキャンパスの開催の広報をした。その他に 7 月 13 日（月）OBS の「おおいた捕物帳」５分番組で健康増進プロジェクトの活動が放送された。大分県広報広聴課の新聞、テレビ、ラジオ等に情報提供や取材依頼を行い、記者及び取材班の対応を担当した。大学イベントの開催については、定期的に県政記者クラブに情報提供を行い、情報発信を行った。大分合同新聞での学長の連載記事や、教員の紹介などが掲載された。教員の研究紹介は計画的に年度はじめに毎月１名の割当てを依頼して掲載した。また、学会奨励賞を受けた研究 1 題を追加して、合計 13 演題を掲載した。

8) 大学案内パンフレット

５名の教員と委員会委員とで WG を運営した。2017 年度版として次年度４月に納品予定とし、４月から開始する入試委員会の活動にて活用した。

9) 公開講座

平成 27 年度は２回の有料公開講座を開催した。第１回は「最近の感染症と予防 - 看護職の役割 - 」と題して９月５日に、大分駅前のホルトホール大分で開催した。講師は、大分県福祉保健部参事監兼健康対策課長の藤内 修二氏、大分県立病院看護師長感染管理認定看護師の大津 佐知氏と、本学成人老年看護学研究室の小野 美喜教授の３名で、参加者は 102 名であった。第 2 回は「PM2.5 と黄砂における健康への影響」とし、生体反応学研究室の市瀬 孝道教授が講師となり、日田市で開催した。参加者は 15 名であった。２回の合計で 117 名が公開講座を受講した。パンフレットを作成し県下の病院や施設、保健所への配布、市報など地域広報に加え、マスコミ（大分合同新聞・月間ぷらざ・シティ情報おおいた）や行政機関等、講座内容に関連のある看護協会、病院等に参加を呼びかけた。

・優秀な学生の入学を促すための高等学校や保護者への広報活動を行う。
・大学の機能としての地域貢献のアピールする。
・大学内の教職員、学生の活動を集約するような働きかけを行う。
・新聞や TV の取材を PR する。

１）　大学案内パンフレットＷＧ

構成員　安部 眞佐子、緒方 文子、足立 綾、石川 純也、西部 由里奈、森田 慶子、橋本 正和

2017 年版大学案内は、昨年にひきつづき、「未来創造」をコンセプトとして作成した。本年度は、大学院ページの充実と、昨年にひきつづき実習演習とキャリアパスに重点をおいた。大学院ページでは、実践者コースの広域看護学、助産学、NP のページを見開きとし、実習の写真を増やした。また、実習演習のページでは、各段階に写真と説明文を配置し分かり易くするように努めた。キャリアパスは見直し、学部卒業後病院に就職してからも大学院へ進学できることと、大学院の各コースからの主な職域を表示した。また、本年度から教育が始まった養護教諭（一種免許）のコース説明も加えた。主に高校生が手にとるパンフレットであるが、本学の良さを伝えるために大学院もおりこんだものとした。また、各学年の学生のインタビュー動画が視聴できるように QR コードがつけられている。

本年度のパンフレットは説明を充分にするために実写版シラバスという趣のあるものとなった。今後は高校生にとってユーザーフレンドリーなパンフレットの在り方を追求してほしい。

２）　広報紙ＷＧ

構成員　堤 健一、西部 由里奈、橋本 満男、橋本 正和、神﨑 正太、久保 紘子

平成 24 年度に後援会との協働で創刊した大学広報紙「風のひろば」の第６号及び第７号をそれぞれ８月、３月に発行した。本学の現在の取組や地域との協働事業、トピックス、研究紹介などを掲載し、在学生の保護者や卒業生を始め、関係機関に配付、広く情報発信を行った。

３）　学外 Web WG

構成員　品川 佳満、後藤 成人、河野 優子

学外 Web サイトのページ更新・掲載（大学案内、入試・入学案内、イベント案内・報告など）お

よびシステムの管理・運営を行った。今年度は、リニューアル作業（コンテンツマネージメントシステムの更新、デザイン、サイト構成の見直し等）を行った。新サイトでは、編集権限を詳細に設定しできるシステムにし、関係部署や委員会、研究室が情報を容易に掲載できるシステムとした。また、Web サーバについては安定稼働が求められるため、データセンター利用とした。リニューアルした新サイトは、10 月 20 日に公開した。

１－11　国際交流委員会

構成員　Gerald T. Shirley、大下 敏子、濱中 良志、崔 明愛、伊東 朋子、吉川 加奈子、江藤 由布子、石川 華子

国際交流委員会が平成 27 年度に行った活動は以下のとおりである。

1）ソウル国立大学校派遣学生受け入れと交流

ソウル大学から大学院交流派遣学生として大学院生２名、学部交流派遣として学部生４名を同行教員１名と共に７月 20 日から７月 25 日までの６日間受入れ、本学に滞在する予定であったが、中東呼吸器症候群（MERS）の流行状況及び対応を両校で協議し、今年度は中止とした。

2）本学の学部生および大学院生の派遣

本学から大学院交流派遣学生として大学院生２名、学部交流派遣として学部生 5 名を同行教員１名と共に８月 17 日から８月 22 日までの６日間、ソウル大学に派遣する予定であったが、中東呼吸器症候群（MERS）の流行状況及び対応を両校で協議し、今年度の派遣事業は中止とした。

3）第 17 回看護国際フォーラムの開催

大分県看護協会と共催である看護国際フォーラムを本年は「看護職を惹きつける魅力ある病院づくり」をテーマに、平成 27 年 10 月 31 日（土）に別府ビーコンプラザ国際会議場で開催した。米国から１名と国内から１名の講師を招聘した。参加者は 278 名と盛況であった。

平成 27 年度の計画を踏襲した活動を行う予定である。基本的には、学生の国際的視野の育成と教員の研究資質向上のために、国際交流の機会と内容とを十分に検討する。また、看護国際フォーラム後に参加者アンケートを実施し、看護職のニーズに沿ったテーマを選定し、地域貢献にもつなげる。

１－12　図書委員会

構成員　甲斐 倫明、宮内 信治、中釜 英里佳、山田 貴子、橋本 満男、堤 健一（１月～）、白川 裕子、姫野 由美、挾間 由布子

１）図書費の見直しを行い、限られて予算内で教育研究に必要な学術雑誌や視聴覚資料を含む図書の購入を効果的に行うための対策を策定した。
２）図書システムの更新を行い、これまでの継続性を維持しながら利用のしやすさを向上させた。
３）図書館吊り天井耐震工事による図書館の利用制限を行った。
４）選書基準の策定を行い、平成 28 年度から実施する。
５）図書館の利用拡大に必要な室内環境と入り口の改善について検討を行った。

１）電子図書を含めた図書の電子化をさらに推進していく。
２）図書館の利用拡大に向けた統計情報の整備を進め、利用拡大の対策を明確化する。
３）図書のセキュリティ対策の検討を進める。

１－13　入試委員会

構成員　構成員は非公開としている。

本委員会は、平成 27 年度に実施した学部入学試験、大学院博士課程について審議し、入学試験全般を統括した。このため、今年度は委員会を 28 回開催した。

大学入試センター主催の入試担当者連絡協議会（２回、８月 31 日、12 月３日）および試験場設定大学連絡協議会（７月８日）の他、全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（５月 27 日-29 日）、大学入学者選抜・教務関係事項連絡協議会（６月 15 日）、に入試委員会委員が参加した。

広報委員会と協力して、入学試験に関する広報活動を行った。業者・県看護協会等主催の進学説明会の参加は 20 箇所、高校教諭に対する進学説明会（６月５日）の来場者は 35 名（前年度より３名増、9.3%増）であった。この他、若葉祭及びオープンキャンパス会場に、進学相談コーナーを開設した（５月 16 日-17 日、７月 19 日）。これらの合計として、317 名（前年度より５名増）の高校生や保護者ほかの相談を受けた。

大学院入学試験は例年通り８月に実施した（８月 29 日）。大学院博士課程（前期）入試は、筆記試験と面接試験を行った。受験者数は博士課程（前期）50 名（前年度より 19 名増、61.3%増）、博士課程（後期）５名（前年度より５名増）であった。これに加え、今年度は学部の前期日程と同日に、大学院博士課程（前期）NP コース地域枠の入試（定員５名）を実施した。入試内容は筆記試験と面接試験で、受験生は５名であった。

学部の特別入試（11 月 21 日）の志願者数は県内 82 名（前年度比 15%減）、県外 20 名（前年度比 20%減）、社会人１名（前年度比 50%減）で、合計では前年度より 19 名減少した。学部の一般入試

（前期２月 25 日、後期３月 12 日）の志願者数は前期 168 名（前年度より 23 名増、15.9%増）、後期 141 名（前年度より 13 名減、9.1%減）、合計では 309 名（前年度より 10 名増、3.3%増）であった。

一方、「学部入試のあり方検討会」の答申を受け、平成 30 年度入学試験から特別入試の募集人数を 35 名から 30 名に減らし、県外推薦枠を廃止し、さらに教科評定平均値 4.0 以上の基準を加えること、また、一般入試（前期）の募集人員を 35 名から 40 名に増やすことが決まった。

大学入試センター試験では、監督者説明会の開催回数を増やし、また、実施上の変更点の解説を充分にする等して、実施要領等の周知徹底を図った。

今年度は試験問題にミス等はなかったが、引き続き再発防止方法について検討する必要がある。入試の広報と運営方法の両面について、引き続き改善のための検討を重ねながら、年度計画に沿って活動を行っていく予定である。

１－14　研究倫理・安全委員会

構成員　市瀬 孝道、平野 亙、矢野 美紀、秦 さと子、杉本 圭以子、石岡 洋子、外部委員：二宮 高富（大分大学名誉教授）、西 英久（大分大学医学部教授）
事務局：渋谷 真由美

研究倫理・安全委員会は今年度 11 回開催し、平成 28 年 1 月を除いた各月ごとに教員から申請された研究計画の審査を行った。今年度は 111 件の審査を来ない、88 件を承認した。審査結果について、承認された研究計画には新たに学長の承認通知を出すことを決定した。また、前年度改正された大学の研究倫理・安全に関する指針、動物実験規定に関して、更に見直しを行い改正した。

今後の課題として、動物実験の「自己点検・自己評価」の体制を整えるとともに、人を対象とした研究に関しても自己点検・自己評価ができるように体制を整える。

１）　動物実験小委員会

構成員　市瀬 孝道、影山隆之、定金 香里、小嶋 光明、岩崎 香子
事務局：渋谷 真由美

動物小委員会は今年度５回開催した。動物実験研究計画書５件を審査すると共に、小委員会では倫理・安全に関する指針、動物実験規定に合わせて、「実験動物施設利用の手引き」を改正した。また動物実験の「自己点検・自己評価」について検討し、今年度より導入することを決定した。動物慰霊祭を 6 月 17 日に挙行した。前年度の使用動物匹数はマウス 1,890 匹、ラットが 104 匹であった。

動物施設の湿度管理や糞尿保管場所を外部に設置するなどの改善を行う。

１－15　情報ネットワーク委員会

構成員　甲斐 倫明、品川 佳満、巻野 雄介、野津 昭文、石川 純也、岩崎 瑞穂

１）学内の情報ネットワーク関係の運営管理の実務を行うと共に、関連する整備計画を立てる役割を果たした。
２）情報ネットワークでは、SINET５への移行を実施した。
３）サーバのリプレイスでは、ファイルサーバと DHCP サーバの更新を行った。また、図書館システムのリプレイスについても支援を行った。
４）倫理委員会申請､院生教務および学内 Web のサイボウズへ移行するための計画と準備を進めた。
５）教務システムおよび nekobus の更新に向けた選定と準備を進めた。

１）学生の情報アクセスを向上を推進するための LAN の整備を進める。
２）サーバなどの保守維持費を低減化するための対策を推進する。

１）　ネットワークシステムＷＧ

構成員　品川 佳満、甲斐 倫明、小嶋 光明、染矢 哲朗

サーバ群（WWW、メール、グループウエア、ファイル、計算機など）およびネットワーク全般（インターネット・イントラネット）の管理・運営を行った。今年度は、ファイルサーバおよび DHCP サーバの更新作業を行った。また、SINET4 の終了により SINET5 に接続するための新たな回線調達および移行作業を行った。

２）　Windows ユーザーサポートＷＧ

構成員　野津 昭文、佐伯 圭一郎、樋口 幸、染矢 哲朗

学内（教職員、情報処理教室、メディアセンター・教材作成室、看護研究交流センター、CALL 用ノート PC)の管理およびユーザーサポートを行った。

３）　Mac ユーザーサポートＷＧ

構成員　小嶋 光明、石川 純也

教職員用および学内に設置している Mac PC の管理（トラブル対応、システムやソフトウェアの更新）を行った。

１－16　研究科教育研究委員会

構成員　影山 隆之、小野 美喜、梅野 貴恵、赤星 琴美、甲斐 倫明、神崎 正太、村嶋 幸代（オブザーバー)

大学院研究科の運営および計画に関する次の事項について審議・実施した。

1) オリエンテーション(４月８日)、奨学金推薦者、シラバスの改訂、及び定例学事について審議・実施した。９月２日の研究計画報告会では 19 名が発表、９月３日の研究中間報告会では 17 名が発表した。３月７日の研究成果報告会では 15 名が発表、３月９日の研究計画報告会・論文レビュー報告会では 11 名が発表した。修士論文４編と博士論文４編の審査手続きを進めた。
2) 入学試験及び進学審査について一部を見直し、面接委員の選定方法、筆記試験の出題内容について案をまとめ、入試委員会に検討を求めた。
3) NP コースを拡充して地域枠５名を増設し、同コースの定員を 10 名とした。リカレントコースを次年度より看護管理・リカレントコースと改称することを決定した。
4) 大学院広報の強化策として大学院説明会（６月 27 日、参加者 61 名）及び「大学院生と語る会」(12 月 17 日、参加者 15 名）を本学で開催した。
5) NP 実習室を新たに整備した。学生の増加に備え、大学院生室の改装を行い、デスクやロッカーを増設した。メディアセンターの利用法を改定し、大学院生のカードキーで 22 時まで使用できるようにした。
6) 学位規則を実態に即して改定し、審査委員の決定機関を研究科委員会から教育研究審議会へ変更した、大学院生研究費の取扱要領を改定し、物品購入後の書類手続きについて明記した。
7) ゼミの制度について検討し、博士課程(前期)のうち研究者養成コースと健康科学専攻、及び博士課程(後期)の学生については、次年度から月 1 回程度のゼミへの参加を必修とすることを決定した。

1) 助産学コースや NP コースを中心に、いっそうの受験生を確保する必要がある。
2) 新入生オリエンテーションの時間が不足しており、指導教員の決め方についていっそう詳しいガイダンスが必要である。
3) 新たに必修化されるゼミを研究室（指導教員）が運営するのを、サポートする必要がある。

１－17　看護研究交流センター

構成員　影山 隆之、Gerald T. Shirley、福田 広美、大下 敏子、桑野 紀子、馬場 奈穂、石川 華子、佐藤 玉枝、赤星 琴美、佐藤 弥生、岩崎 りほ、草野 淳子、甲斐 博美、伊東 朋子、樋口 幸、後藤 成人、平野 亙、定金 香里、安部 真紀、森田 慶子、白川 裕子

1) 国際交流部門

大学英語パンフレットを作成した（４月）。韓国カトリック大学校看護大学教授の研修（６月 15 日～17 日、教授１名）、韓国 Chodang 大学看護学部の研修（11 月４日、教員２名、学生 40 名）、Ulsan（蔚山）大学看護学部の研修（２月 22 日、23 日、教員２名、学生５名）を受け入れた。在日ネパール大使の訪問を迎えた（７月 27 日）。英語ウェブサイトのトップページに最新情報を掲載した。米国コロラド大学校看護大学 Kathy Magilvy 博士を招聘した（９月５日～12 日)。

2) 地域交流部門

(1) COC 関係事業として、以下の通り実施した。

予防的家庭訪問実習に係る会議の開催、実習の運営、事業報告会（地域交流会）の地域別開催、事業評価（比較対照群調査開催・Kathy Magilvy 博士のコンサルテーション）及び学術発表、日本文理大学との共同記者会見（４月 28 日）、日本文理大学との合同シンポジウム開催（２月 11 日)、同実習に関する若葉祭や地域行事を通しての広報活動とマスコミによる取材への対応。

(2) 県の委託で、在宅医療推進地域診断ツールの開発事業を行った。

(3) 協会けんぽ大分支部と、連携協力に関する包括協定を締結した。

(4) 国保連合会との連携について協議した。

(5) 統計・情報処理相談は１件の申込があった。

(6) 大分県看護協会平成 28 年度研修計画への講師派遣調整を行った。

(7) ８施設に対して看護研究支援を行い、支援機関と合同の平成 27 年度看護研究交流会を本学で開催した（３月 22 日、参加者 21 名)。

3) 継続教育部門

若葉祭の会期中にホームカミングディを開催した（５月 16 日、参加者 77 名)。卒業生修了生の名簿整備作業を進めた。６施設で働く卒業生修了生と交流会を開催した（大分県立病院、大分赤十字病院、大分大学医学部附属病院、アルメイダ病院、 湯布院病院、別府医療センター)。

4) NP 推進部門

(1)日本 NP 教育大学院協議会理事会社員総会を開催し（５月 30 日)、「特定行為に係る看護師の研修制度」について国立病院機構本部桐野高明理事長、「長寿社会における看護職への期待」について東京大学高齢社会総合研究機構秋山弘子教授が講演した。総会では NP 資格認定試験更新制度に関する合意を得た。

(2)平成 27 年度国立長寿医療研究センター診療看護師（NP）研修で、10 名が高齢者診療や認知症診療に関する研修を受けた。

(3)日本 NP 教育大学院協議会平成 27 年度 NP 資格認定試験評価会議を開催し（10 月 5 日）、平成 27 年度 NP 資格認定試験の実施について検討を行った。

(4)日本 NP 学会第 1 回学術集会を本学で開催し（11 月 14 日）、県知事をはじめ 200 名以上が参加した。

(5)平成 28 年度診療報酬改定に伴うパブリックコメントとして、急性期や在宅医療において特定行為を行う看護師に診療報酬を設定するよう日本 NP 教育大学院協議会を通じ意見を提出した。

(6)平成 27 年度日本 NP 教育大学院協議会 NP 資格認定試験実施した（3 月 6 日）。

(7)平成 27 年度日本 NP 教育大学院協議会ハワイ NP 研修実施した（3 月）。

5) 学術ジャーナル部門

「看護科学研究」13 巻 2 号と 14 巻 1 号を発刊した。論文の受付、査読、編集等発刊に関する実務を行った。編集委員会を開催し、編集委員の交代と拡充の方針、広報の方法、プライマリーレビューの実施等について決定した。看護国際フォーラム等での広報、J-Stage への登載手続きを行った。

5 部門を 6 チームに再編するので、各チームで以下の課題に取り組む必要がある。

1) 国際交流・留学生チーム

海外からの研修生受入れや研修プログラムの企画・運営、本学で学ぶ留学生のサポートなど、いっそうの国際貢献を進める必要がある。英語 Website に関してトップページの最新情報を掲載し、また留学生のための情報ページを作成・掲載する必要がある。

2) 地域交流チーム

予防的家庭訪問実習プロジェクトと連携して、同実習の実務上の課題を解決する必要がある。

3) NP 事業推進チーム

診療看護師（NP）の大学院教育の広報と普及と、診療看護師（NP）に診療報酬が認められるためのエビデンスの蓄積、及び社会への情報発信をいっそう進める必要がある。

4) 継続教育推進チーム

同窓会の支援に加え、看護研究支援と情報・統計処理相談を分掌するので、メンバーの役割分担と会議の持ち方を再定義する必要がある。

5) 産学官連携推進チーム

学外からの問い合わせやオファーが増える傾向にあるので、メンバーの役割と連携体制を整備する必要がある。新設チームをウェブサイト上で標記する必要がある。

6) 学術ジャーナルチーム

有効な広報活動は今後も重要な課題である。また投稿論文数の増加に伴い、査読とその事務手続きの効率化が課題となってきており、査読委員の創設やプライマリーレビューの導入等の解決策の効果を確認する必要がある。

１）　英文大学案内パンフレットＷＧ

構成員　Gerald T. Shirley、大下 敏子、桑野 紀子、岩崎 香子、江藤 由布子、馬場 奈穂、中野 麻梨子

本学の特徴と教育内容・活動を英文でまとめ、対象が主として海外の教育・研究関係者であることを考慮した“University Bulletin”を 3 年に 1 回の計画で改訂する。平成 27 年度に新しい大学英語パンフレットを作成・納品した。

２）　英文 Web ＷＧ

構成員　Gerald T. Shirley、大下 敏子、桑野 紀子、岩崎 香子、江藤 由布子、馬場 奈穂、中野 麻梨子

海外の利用者を重視した内容とし、学内行事等の報告掲載を随時行うことで、常に最新の情報を分かりやすく閲覧できるようにしている。英語 Website のトップページの最新情報を掲載した。英語 Website に関して平成 28 年度にトップページの最新情報を掲載すると共に留学生のための情報ページを作成・掲載する。

３）　大学公式 facebook ＷＧ

構成員　野津 昭文、田中 佳子、石川 華子

本学公式 Facebook の管理・運営を行った。本学の行事や大学生活についての情報を Facebook を通して発信した。

１－18　衛生委員会

構成員　堤　健一（１号委員）、角 匡幸（２号委員）、赤星 琴美（３号委員）
佐伯圭一郎、橋本満男（以上、４号委員）、工藤 優（オブザーバー）
石川華子（事務局）

５回の衛生委員会を開催し、苦情相談および健康相談等について再確認するとともに、定期健康診断結果の概要、夏季休暇の取得状況の報告や職場巡視等を行った。

昨年度に引き続き、教職員の健康管理への意識向上を図るため『健康増進活動支援事業』を実施し、教職員 49 名が参加した。

学内の廊下・階段等の共有スペースを夜間に巡視した結果、交流棟が暗いうえに、電灯スイッチの位置もわかりにくいことが判明したので、夜間の安全確保のため、人感センサーを２８年度早々に設置することとした。また、食堂の手洗い場の清潔が確保されていなかったが、感染症の予防には手洗いが重要なことから、手洗い場の環境整備を行い、ハンドソープ及びペーパータオルを設置し、積極的な利用を呼びかけた。

労働安全衛生法に基づくストレスチェック制度の導入及び実施方法等について検討し、２８年４月から実施できるように、ストレスチェック要領案を策定した。

１－19　評価委員会

構成員　藤内 美保、影山 隆之、堤 健一、甲斐 倫明

「教員評価の実施に関する基本的な方針」の評価方法に従って評価を実施した。評価対象は平成 27 年度の教員活動としたが、研究成果については暦年で 2015 年の成果を評価対象とした。学長指名の教員評価委員には甲斐教授が指名された。２月 10 日を評価書の提出期限とし、教員評価結果を学長に報告した。その後３月８日付で、学長より各教員へ教員評価通知書が配付された。

１－20　NP プロジェクト

構成員　村嶋 幸代、藤内 美保、堤 健一、石田 佳代子、大下 敏子、小野 美喜、甲斐 倫明、佐伯 圭一郎、草野 淳子、高野 政子、濱中 良二、福田 広美、宮内 信治、甲斐 博美、後藤 朋子（８月より）

NP プロジェクトは本年度の年度計画推進のため、昨年度と同様に１）カリキュラム部会、２）修了生フォローアップ部会、３）研究・広報部会の３部会を設定し運営した。

平成 26 年６月 18 日に「地域における医療及び介護の総合的な確保を推進するための関係法律の整備等に関する法律（医療介護総合確保推進法）」が成立し、保健師助産師看護師法（保助看法）も改正され、平成 27 年 10 月１日から「特定行為に係る看護師の研修制度」が施行された。本学 NP コースは５月に指定教育機関として申請し８月５日付で指定認可通知を受け、10 月１日より指定研修機関となった。これにより指定研修機関に必要な特定行為研修管理委員会を設置し、外部委員として葉玉哲生大分大学名誉教授、三倉剛大分県医師会常任理事、安東哲也大分県薬剤師会長、松原啓子大分県看護協会長、学内委員として藤内学部長、影山研究科長、福田教授、小野教授の８名で構成した。管理委員会は 10 月、３月の２回開催をし、特定行為研修のカリキュラムの確認、すでに NP コースを修了した 31 名の研修免除の審査を行った。その結果、NP コース修了生 31 名の研修免除が承

認され、厚生労働省に修了生 31 名の研修免除の手続きを行った。

また、中期計画を変更し大学院 NP コース５名定員を 10 名に増員した。増員には大分県の支援を受け地域枠５名を追加することとした。さらに大分県の基金とともに、厚生労働省の補助金を受け大学院生増員に伴う実習室の整備、大学院生の整備、NP 教育体制を整備し、地域枠５名の追加募集に伴うリクルート活動と新たな実習施設の開拓などを行った。２月の地域枠の入学試験には５名が受験し来年度の入学生は10名となった。新たな実習施設として大分県立病院をはじめアルメイダ病院、大分中村病院、天心堂へつぎ病院の施設協力を得ることができた。

１）カリキュラム部会：

（１）厚生労働省への特定行為研修機関の指定申請のため、従来の NP 教育の方針に基づいてカリキュラムに 38 特定行為の全てを網羅した教育内容に含んだシラバスを作成し提出した。８月５日指定通知を受け、厚労省より指導があった評価や授業時間数の確保などを各担当教員に周知依頼した。今後、質を担保した特定行為研修を含む NP 教育を展開していくことに留意する。

（２）実習関連：修士１年次生は５名、修士２年次生は５名で、修士１年次生１名が体調不良のため休学となった。修士１年次生は修了生が活動する施設で NP Early Exposure 実習を１週間実施した。年度末に進級試験を実施した。２年次生は、実習前試験、14 週間の実習、課題研究、修了試験を終了し全員が修了認定され、一般社団法人日本 NP 教育大学院協議会の NP 資格認定試験を受験し全員が合格した。

（３）老年 NP の実習施設の指導者との合同会議を４月（実習前）と２月（実習終了後）に２回実施した。

（４）就職支援は、４名の学生のうち２名の学生が所属する施設で勤務しながらの修学であり、１名がすでに修了生が勤務する県外施設への就職、１名が県外の離島施設への就職が決まった。離島施設への就職にあたっては、関係者と教員とで協議をすすめ、NP としての研修と実務ができる環境整備を依頼した。今年度は１名が県内施設、３名が県外施設での就職となった。

（５）修了生のフォローアップ会議を３回開催した（７月、11 月、２月）。定期的に開催し、県外からの修了生の参加もあった。11 月の会議では日本 NP 学会第１回学術集会の開催前日であり草間学会長ほか他大学の教員、ハワイの NP も参加し、活発な意見交換と交流ができた。アンケート結果、研修生にとって情報交換の貴重な場となっていることがわかった。

２）NP 推進部門

（１）日本 NP 学会を創設し、日本 NP 学会第１回学術集会は平成 27 年 11 月 14 日に本学で開催した。200 名を超える参加があり、研究エビデンスや NP 活動について、多くの知見を情報発信できた。

（２）日本 NP 教育大学院協議会の企画研修として、ハワイで活動する NP を視察した。本学から２名の教員が参加した。他大学の教員や修了生も参加し、NP の理解と交流が図られた。

３）研究・広報部会

（１）看護系雑誌「看護研究」7 月号に「ＮＰ教育の成果を探る」をテーマに特集が組まれ本学の修了生および教員の研究知見が公表された。

（２）平成 27 年度版看護白書にて本学の「特定行為研修制度の取組」を公表、また同白書に修了生

の活動事例も取り上げられた。

（３）コロラド大学で開催された NP 学会（６月）へ村嶋学長、藤内教授、宮内准教授が参加し、世界で初めて NP の誕生に係るロレッタ・フォード氏との対面と交流が実現した。

（４）ICCHNR 学術集会（ソウル：６月開催）にて藤内教授、福田教授、宮内准教授が研究発表をした。

（５）平成 27 年度看護のネットワークサミットで 300 名ほどの県内看護管理者を対象に大学院 NP 教育について小野教授が講演を行った（１月 30 日）。

平成 28 年度は、厚生労働省に特定行為研修機関の指定機関としての教育の質を担保したカリキュラム展開を行う。また、大学院定員数を増加に伴い、教育方法や教育体制を見直しながら授業を行っていく。

優秀な修了生を全国に輩出し、なおかつ大分県に人材を残していくことも公立大学の使命である。実習施設と連携を深めながら特定行為研修の遂行とより NP の実践につながる教育を展開していく。

１－21　健康増進プロジェクト

構成員　稲垣 敦、佐藤 玉枝、赤星 琴美、緒方 文子、佐藤 愛、秦 さと子、巻野 雄介、田中 佳子、河野 優子、安部 真紀

1. 事業・研究協力

・Smart Life Project（厚生労働省）
・健康・体力・人づくり推進事業（大分県教育委員会）
・大分県介護予防二次予防事業（大分県福祉保健部、大分県運動機能向上専門部会ほか）
・大分空港施設改善プロジェクト（県産学官連携推進会議、県総合交通対策課、㈱大分空港ターミナル、日本文理大学、芸術文化短期大学、大分県産業科学技術センターほか）
・姫島村健康づくり事業（姫島村健康推進課、姫島村診療所）
・スポーツ救護ナースおよびスポーツ救護士の育成事業（大分県スポーツ学会、大分県看護協会、大分県理学療法士会、大分県作業療法協会、大分県柔道整復師会、大分岡病院、西別府病院ほか）
・温泉と運動プログラム研究会（大分県、別府市、別府市医師会、別府大学、別府リハビリテーションセンター、畑病院、別府中央病院、黒木記念病院ほか）
・大分市野津原地区第 30 回ななせの里まつり（みどりの王国：11 月 1 日）
・大分川ダムウォーキング大会（野津原地区、国土交通省：11 月 29 日）
・森林セラピートレイルランニング大会（大分市、野津原商工会：３月 15 日）
・第 15 回豊かな国の森づくり大会（大分県、大分市：11 月 21 日）
・体験しよう！未来の君のお仕事（大分キャピタルロータリークラブ：11 月８日）
・高齢者用の機能食品の研究開発（ヤクルトヘルスフーズ株式会社：４月１日～）
・NPO 法人 N スポーツクラブ

2. 研究

・離島住民の運動実施と健康寿命（第 74 回日本公衆衛生学会、長崎：11 月 5 日）。

・「アーチェリーにおける口腔装具の効果」（石本記念デサントスポーツ科学振興財団学術研究：11 月 9 日）。

・「遅発性筋痛および筋力低下と生活活動における身体活動の関係」（石本記念デサントスポーツ科学振興財団学術研究：11 月 9 日）。

・「対戦型スポーツのパフォーマンス構造分析」（日本体育測定評価学会第 14 回大会、金沢：2 月 28 日）

・体育・スポーツ科学で生まれた数理モデルや解析法（3）因子分析（日本体育学会第 66 回大会，東京：8 月 27 日）

・３軸加速度計を用いた歩行の個性の評価と歩行年齢の設定

・温泉入浴におけるストレス低減要因

・登山の心理的効果

3. 人材育成、啓蒙・啓発

・健康増進プロジェクト学生部会を開設（4 月 16 日）。

・第 6 回スポーツ救護講習会（県看護研修会館：4 月 12 日、120 名）、姫島村健康づくり事業研修会（姫島村離島センター第 1 回：9 月 10 日、30 名、第 2 回：3 月 23 日、20 名）

・健康・体力チェック：本学若葉祭（本学 5 月 16 日、17 日、256 名）、大分トリニータホームゲーム（大銀ドーム：6 月 21 日、537 名）、おおいたスポーツ広場 2015（コンパルホール：10 月 12 日、557 名）、第 32 回緑が丘体育祭（横瀬小学校：10 月 18 日 206 名）、第 41 回富士見が丘体育祭（横瀬小学校：10 月 25 日、326 名）、大分市野津原地区第 30 回ななせの里まつり（みどりの王国：11 月 1 日、505 名）、大分川ダムウォーキング大会（野津原西部小学校：11 月 29 日、428 名）、TOKIWA わさだタウン（3 月 5 日、1004 名）、森林セラピートレイルランニング大会（のつはる少年自然の家：3 月 13 日、10 名）、森林探検ウォーキング（富士見が丘中央公園：3 月 26 日、151 名）。

4. 広報、マスコミ等

・活動紹介パネル展示（本学若葉祭：5 月 16 日、17 日、オープンキャンパス：7 月 19 日）。

・「なぜ姫島村は健康寿命が長いのか？」（本学ホームページ「研究紹介」：7 月 1 日）

・「なぜ姫島村は健康寿命が長いのか？」（医療法人白川病院広報誌「すえひろ便り」：5 月 11 日）

・本学 2016 パンフレット p.17、本学ホームページで活動を紹介。

・森林浴および大分県森のセラピー水辺の森コースについて（OBS イブニングニュース：9 月 4 日）。

・姫島村健康づくり事業研修会（姫島村 CTV）

・姫島村健康づくり事業（大分県国民健康保険団体連合会広報誌「大分の国保」2015-10 秋号）。

・平成 22 年度厚生労働省老人保健健康増進等事業（合同新聞：9 月 15 日）。

・姫島村健康づくり事業研修会（合同新聞：3 月 23 日）。

・めじろん元気アップ体操＆同ビッグ 4 パンフレット PDF 版（大分県庁 HP）

・めじろん元気アップ体操動画「完全収録編」、「体操のみ編」（TouTube、大分県庁 HP）

・研究成果の公表
・学生部会の充実

１－22　看護系全体会議

構成員　村嶋 幸代（学長）、藤内 美保（学部長）、影山 隆之（研究科長）、看護系教員全員

４月、７月、12 月の年に３回、定例会議を開催した。毎回、学部と大学院の各実習における計画・進捗状況・結果の報告、予防的家庭訪問実習の計画・進捗状況・結果の報告、実習運営小委員会や実習改革 WG による活動報告などを行い、学生の実習状況や目標の達成状況などを共有した。また、以下のテーマについて意見交換を行った。

１）第１回（４月）
実習室で使用する消耗品の使い方や印刷物の使い方など、学生が消耗品等の管理方法について意識できるような方法を検討していく必要性を確認した。

２）第２回（７月）
実習先で本学の学生であることがわかるような実習服について検討する提案があり、協議の結果、実習運営小委員会で検討することになった。また、学生にとって使用しやすい実習室になるように、実習改革 WG で検討することになった。

３）第３回（12 月）
学生の自律性を養うための支援方法について意見交換を行った。実習においては、大学教員と施設指導者が連携し、実習目標を理解したうえで各学年に応じた関わり方をすることの重要性を確認した。

本会議では報告事項が大半を占めるので、教育上の課題などについて話し合い、共有できる時間を確保できるようにすることが、運営上の課題である。

２　学内行事の概要
２－１　学年暦

前期

4 月

8	入学式
9	全学オリエンテーション
9,15	健康診断
10～11	新入生オリエンテーション
10	2～4年次生授業開始
10～17	前期履修登録
13	1年次生授業開始
14	予防的家庭訪問実習オリエンテーション
23	交通安全実技講習会（自動車）
24	全学スポーツ交流会

5 月

8～6/18	地域看護学実習， 在宅看護学実習（4年次生）
9	交通安全実技講習会（自動二輪）
13	キャンパスクリーンデー
16,17	若葉祭
16	ホームカミングディ
25～29	老年看護学実習（3年次生）

6 月

19	開学記念日（休講）
22～7/10	総合看護学実習（4年次生）
30	学生大会

7 月

13～17	初期体験実習（1年次生）
19	オープンキャンパス
20～25	学生交流プログラム（ソウル大学より）
21	夏期休業開始
21～8/5	小児看護（保育所）実習（3年次生）

8 月

29	大学院入学試験

9 月

4～	成人急性期，成人・老年慢性期，小児， 母性，精神看護学実習（3年次生）
5	夏期休業終了
30	前期授業終了

後期

10 月

1	後期授業開始
1～9	後期履修登録
31	看護国際フォーラム

11 月

21	特別選抜試験（推薦・社会人）
～ 27	成人急性期，成人・老年慢性期，小児， 母性，精神看護学実習（3年次生）

12 月

3	卒業研究要旨提出締切（4年次生）
8	卒業研究論文提出締切（4年次生）
10,11	卒業研究発表会
24	冬期休業開始

1 月

7	冬期休業終了
8～25	基礎看護学実習（1年次生）
15	大学入試センター試験準備 （2,3,4年次生休講）
16,17	大学入試センター試験
29～2/15	看護ｱｾｽﾒﾝﾄ学実習（2年次生）

2 月

14	看護師国家試験
16	保健師国家試験
17	助産師国家試験
25	一般選抜試験（前期）および 大学院2次試験（休講）
26	進級試験（2年次生）
29	後期授業終了

3 月

1	春期休業開始
12	一般選抜試験（後期）
18	卒業式

２－２　オープンキャンパス

平成 27 年度は夏休み中の 7 月 19 日（日）に開催した。当日は 350 名（高校生 255 名、保護者 83 名、その他 12 名、昨年比プラス 36 名）と多くの参加があり、本学について大いにアピールできた。講堂での全体説明会では、入試情報の提供や学生自治会による TAKIO ソーランの演舞、1 年次生の合格体験発表、3 年次生、4 年次生からの在校生メッセージの発表などを企画した。また、模擬授業や体験イベントなど、教職員全員と学生の協力者とで取り組んだ。特に在学生が相談コーナーや体験イベントを担当したことや、実習室への誘導を行ったことは、参加者が在学生と交流する機会となり、入学後のイメージを深める一助となったと思われる。

２－３　公開講座

平成27年度は２回の有料公開講座を開催した。第１回は「最近の感染症と予防 - 看護職の役割 - 」と題して９月５日に、大分駅前のホルトホール大分で開催した。講師は、大分県福祉保健部参事監兼健康対策課長の藤内修二氏、大分県立病院看護師長感染管理認定看護師の大津佐知氏と、本学成人老年看護学研究室の小野美喜教授の３名で、参加者は 102 名であった。第２回は「PM2.5 と黄砂における健康への影響」とし、生体反応学研究室の市瀬孝道教授が講師となり、日田市で開催した。参加者は 15 名であった。２回の合計で 117 名が公開講座を受講した。パンフレットを作成し県下の病院や施設、保健所への配布、市報など地域広報に加え、マスコミ（大分合同新聞・月間ぷらざ・シティ情報おおいた）や行政機関等、講座内容に関連のある看護協会、病院等に参加を呼びかけた。

２－４　第 17 回看護国際フォーラム

大分県看護協会と共催である看護国際フォーラムを本年は「看護職を惹きつける魅力ある病院づくり」をテーマに、平成 27 年 10 月 31 日（土）に別府ビーコンプラザ国際会議場で開催した。米国から１名と国内から１名の講師を招聘した。参加者は 278 名と盛況であった。

２－５　姉妹校学生交流

ソウル国立大学校派遣学生受け入れと交流：ソウル大学から大学院交流派遣学生として大学院生２名、学部交流派遣として学部生４名を同行教員１名と共に７月 20 日から７月 25 日までの６日間受入れ、本学に滞在する予定であったが、中東呼吸器症候群（MERS）の流行状況及び対応を両校で協議し、今年度は中止とした。

本学の学部生および大学院生の派遣：本学から大学院交流派遣学生として大学院生２名、学部交流派遣として学部生５名を同行教員１名と共に８月 17 日から８月 22 日までの６日間、ソウル大学に派遣する予定であったが、中東呼吸器症候群（MERS）の流行状況及び対応を両校で協議し、今年度の派遣事業は中止とした。

２－６　若葉祭（大学祭）

５月 16 日、17 日の若葉祭において教員イベントの企画募集と当日運営を実施した。教員企画は健康教育等の大学学部教育の一部内容や設備の紹介など 12 企画を開催し、参加者は２日間で 895 名であった。教員イベントでは、学生にも協力者として数名ずつ参加してもらうことで、学生と地域の人々とのふれあいの場ともなっている。また、地域の方々や学生に、学部で行っている研究を知ってもらう目的で、全研究室の卒論をポスター掲示した。その他、広報活動として、研究室紹介のパネルを更新し、７月開催予定のオープンキャンパスの案内チラシ、大学案内パンフレットを研究棟入口に配置するなど、一般の方々や進学予定者にも大学の内容が伝わるように配慮した。

２－７　地域ふれあい祭

平成 27 年度の地域ふれあい祭りは、11 月１日（日）に開催された「ななせの里まつり（主催者発表の参加者 5000 人）」に参加した。本イベントは大学に隣接するみどりマザーランドで開催された。大学紹介はテント 内でのパネル掲示と、大学案内パンフレットの配布や COC 地の拠点事業の紹介を行った。ブースの来場者は地元住民で、約 80 名であった。その他、イベントの駕籠かきレースには学生や学長はじめ教職員等が参加し活躍した。また、健康増進プロジェクトと協働し、血圧測定、体成分分析、握力測定などの健康指導・健康チェックを実施した。

２－８　アニュアル・ミーティング

本年度のアニュアル・ミーティングは３月４日（金）に開催した。教員間で研究活動を発表し、共有する機会を提供する目的でポスター発表形式で行った。発表件数は 23 件であった（学内研究費取得演題 12 件、一般演題 11 件）。

３　教育活動

３－１　平成２８年度入学者選抜状況

１）概　要

選抜の区分及び募集人員、入学者選抜試験の概略は次表のとおりである。

選抜の区分及び募集人員

学部	学科	入学定員	募集人員					
			一般入試		特別入試			
			前期日程	後期日程	推薦		社会人	私費外国人留学生
					県内	県外		
看護学部	看護学科	80 名	35 名	10 名	35 名	注 1) 5 名以内	注 1) 若干名	注 2) 若干名

注 1）推薦県外の「5 名以内」及び社会人の募集人員「5 名以内」は推薦の（県内）35 名に含める。

注 2）私費外国人留学生の募集人員「若干名」は前期日程の 35 名に含める。

入学者選抜試験の概略

（単位：人、倍、%）

区分			志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
							計	県内（率）	男（率）
特別	推薦	県内	81	81	31	2.6	31	31(100.0)	0(0.0)
		県外	20	20	5	4.0	5	0(0.0)	0(0.0)
	社会人		1	1	0	0.0	0	0(0.0)	0(0.0)
	計		102	102	36	2.8	36	31(86.1)	0(0.0)
一般	前期		168	155	44	3.5	40	18(45.0)	5(12.5)
	後期		141	62	10	6.2	10	4(40.0)	0(0.0)
	計		309	217	54	4.0	50	22(44.0)	5(10.0)
合計			411	319	90	3.5	86	53(61.6)	5(5.8)

試験教科等

区分		教科	試験期日	出願期間
特別	推薦	総合問題、面接	平成 27 年 11 月 21 日（土）	平成 27 年 11 月 2 日（月）～11 月 9 日（月）
	社会人			
一般	前期	総合問題、面接	平成 28 年 2 月 25 日（木）	平成 28 年 1 月 25 日（月）～2 月 3 日（水）
	後期	総合問題、面接	平成 28 年 3 月 12 日（土）	

２）特別入学試験

①推薦入試

大分県内外の高等学校卒業見込者の中から、各高等学校長が推薦した生徒を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。

②社会人入試

社会人としての実体験から看護学への強いモチベーションを持った学生を確保することにより、教育・研究への活性化を図るため、また、生涯学習の要請に対応するため、社会人入試を実施した。

年齢が満 24 歳以上で､社会人の経験を３年以上有し､大学入学資格を有する者を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。

３）一般入学試験

平成 28 年度大学入試センター試験で本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、分離分割方式（前期日程、後期日程）により試験を実施した。

なお、本学で実施する試験は、前期日程、後期日程ともに「総合問題」と「面接」により実施した。

<table>
<tr><th>日　程</th><th>教科名</th><th colspan="2">科　　目　　名</th><th>教科・科目数</th></tr>
<tr><td rowspan="4">前期日程</td><td>国　語</td><td colspan="2">『国語』(近代以降の文章)</td><td rowspan="4">４教科６科目</td></tr>
<tr><td>数　学</td><td colspan="2">『数学Ⅰ・数学Ａ』と『数学Ⅱ・数学Ｂ』
または
『旧数学Ⅰ・旧数学Ａ』と『旧数学Ⅱ・旧数学Ｂ』</td></tr>
<tr><td>理　科</td><td colspan="2">「物理」、「化学」、「生物」、「地学」から２科目を選択
または
「物理Ⅰ」、「化学Ⅰ」、「生物Ⅰ」、「地学Ⅰ」から２科目を選択</td></tr>
<tr><td>外国語</td><td colspan="2">『英語』(リスニングを含む)</td></tr>
<tr><td rowspan="5">後期日程</td><td>国　語</td><td>『国語』(近代以降の文章)</td><td rowspan="4">３教科
３科目
または
３教科
４科目
を選択</td><td rowspan="5">４教科４科目
又は
４教科５科目</td></tr>
<tr><td>地理歴史
公　　民</td><td>「世界史Ａ」、「世界史Ｂ」、「日本史Ａ」、
「日本史Ｂ」、「地理Ａ」、「地理Ｂ」、
「現代社会」、「倫理」、「政治・経済」『倫理、政治・経済』から１科目を選択</td></tr>
<tr><td>数　学</td><td>『数学Ⅰ・数学Ａ』、「数学Ⅱ」、
『数学Ⅱ・数学Ｂ』、『旧数学Ⅰ・旧数学Ａ』、
『旧数学Ⅱ・旧数学Ｂ』から１科目を選択</td></tr>
<tr><td>理　科</td><td>「物理基礎」、「化学基礎」、「生物基礎」、「地学基礎」から２科目を選択
または
「物理」、「化学」、「生物」、「地学」、「物理Ⅰ」、
「化学Ⅰ」、「生物Ⅰ」、「地学Ⅰ」から１科目を選択</td></tr>
<tr><td>外国語</td><td colspan="2">『英語』(リスニングを含む)</td></tr>
</table>

注１）「国語」については、「近代以降の文章」の得点のみを合否判定に用います。

注２）「地理歴史・公民」、「数学」及び「理科」において、複数科目を受験した場合は、高得点の科目をその教科

の得点とし、合否判定に用います。なお、後期日程については、「国語」、「地理歴史・公民」、「数学」及び、「理科」の全ての教科を受験した場合には、高得点の上位３教科を合否判定に用います。

注３）前年度大学入試センター試験の結果は利用できません。

注４）上の指定科目をすべて受験していなければ、本学が実施する個別試験を受けられません。

３－２　平成２８年度大学院看護学研究科博士課程（前期）入学試験状況

１）看護学専攻

概　要

看護職の指導的役割を担う人材を育成し、地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、大学卒業者等を対象に、「総合問題」、「専門問題」（実践者養成のみ）及び「面接」により実施した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程（前期）	看護学専攻	研究者養成		３名
			実践者養成	ＮＰコース	10名（うち５名は地域枠）
				広域看護学コース	５名
				助産学コース	10名
				リカレントコース	２名

試験の概略

（単位：人、倍、%）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入　学　者		
					計	県　内（率）	男（率）
修士課程	53	53	33	1.6	30	25(83.3)	4(13.3)

試験科目等

試験科目	試　験　期　日	出　願　期　間
総合問題 専門問題 面　　接	平成27年 ８月29日（土）	平成27年 ８月３日（金）～８月７日（金）
	ＮＰコース（地域枠） 平成28年 ２月25日（木）	平成28年 １月25日（月）～２月３日（水）

２）健康科学専攻

概　要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を充分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、大学卒業者等を対象に募集した。

募集人員

研究科名	課　程　名	専　攻　名	募 集 人 員
看護学研究科	博士課程（前期）	健康科学専攻	２名

試験の概略

（単位：人、倍、%）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入　　学　　者		
					計	県　内（率）	男（率）
修士課程	2	2	1	2.0	1	1(100.0)	1(100.0)

試験科目等

試 験 科 目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
総合問題 面　　接	平成 27 年 8 月 29 日（土）	平成 27 年 8 月 3 日（金）～8 月 7 日（金）

３－３　平成２８年度大学院看護学研究科博士課程（後期）入学試験状況

１）看護学専攻

概　要

より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に募集をした。

募集人員

研究科名	課　程　名	専　攻　名	募 集 人 員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	２名

試験の概略

（単位：人、倍、%）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入　　学　　者		
					計	県　内（率）	男（率）
博士課程	4	3	3	1.0	3	1(33.3)	0(0.0)

試験科目等

試 験 科 目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
総合問題 面　　接	平成 27 年 8 月 29 日（土）	平成 27 年 8 月 3 日（月）～8 月 7 日（金）

２）健康科学専攻

概　要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を充分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に募集した。

募集人員

研究科名	課　程　名	専攻名	募 集 人 員
看護学研究科	博士課程（後期）	健康科学専攻	2 名

試験の概略

（単位：人、倍、%）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入　　学　　者		
					計	県　内（率）	男（率）
博士課程	1	1	1	1.0	1	1(100.0)	0(0.0)

試験科目等

試 験 科 目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
総合問題 口頭試問	平成 27 年 8 月 29 日（土）	平成 27 年 8 月 1 日（月）～8 月 7 日（金）

３－４　平成 27 年度大学院看護学研究科博士課程（後期）進学審査状況

１）看護学専攻

概　要

より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会におけ

る健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、本学大学院博士課程（前期）を平成２８年３月修了見込みの者を対象に、特別研究に関する発表、面接及び出願書類を総合的に評価して選抜した。

募集人員

研究科名	課　程　名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	若干名

審査の概略

（単位：人、倍、%）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入　　学　　者		
					計	県　内（率）	男（率）
博士課程	1	1	1	1.0	1	1(　100.0)	0(0.0)

審査科目等

試験科目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
特別研究 面　　接	平成 27 年 8 月 24 日（月）	平成 27 年 7 月 16 日（木）～7 月 24 日（金）

２）健康科学専攻

概　要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を充分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的とする。

募集人員

研究科名	課　程　名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	健康科学専攻	若干名

審査の概略

（単位：人、倍、%）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入　　学　　者		
					計	県　内（率）	男（率）
博士課程	1	1	1	1.0	1	1(　100.0)	1(100.0)

審査科目等

試験科目	試験期日	出願期間
特別研究 面　　接	平成 27 年 8 月 24 日（月）	平成 27 年 7 月 16 日（木）～7 月 24 日（金）

３－５　進学相談

概　要

本学に進学を希望する高校生等に本学の入試情報や受験についてＰＲするため、看護協会や業者主催の進学相談会に参加し、県内 17 カ所に教員及び職員を派遣した。全体の来場者は、7,997 人であり、本学の説明を受けた学生及び保護者は、290 人であった。

また、高大連携の観点から、県内外の高校等の進路指導担当教員を招いて学内で進学説明会を開催した。来場者は 24 人であった。

この他、若葉祭、オープンキャンパス等の会場に進学相談コーナーを開設した。

３－６　在学生の状況（平成 27 年４月１日現在）

学生総数　394 名（学部生 333 名、院生 61 名）

（単位：人）

	学生数				
	計	県内	県外	男	女
１年次生	88	53	35	11	77
２年次生	86	52	34	4	82
３年次生	81	51	30	9	72
４年次生	78	49	29	10	68
	333				
	100.0				
大学院博士前期（1年次生）	25	15	10	1	24
大学院博士前期（2年次生）	18	11	7	5	13
大学院博士後期（1年次生）	2	2	0	1	1
大学院博士後期（2年次生）	5	4	1	3	2
大学院博士後期（3年次生）	11	7	4	2	9
	61				
	394				

３－７　各研究室の教育活動

３－７－１　生体科学研究室

１　教育方針

本学の教育理念の一つである「看護に関する専門知識・技術の習得とともに、科学的根拠に基づく問題解決能力などを養う」に沿って、人体の仕組みを解剖学的・生理学的・生化学的に理解し、その破たん状態（病気）の本質を十分理解する看護師を育成する。

２　教育活動の現状と課題

現状においては、学部１年次生に対する生体科学（解剖学・生理学・生化学）は新しい専門用語に戸惑いながらも、ある程度のレベルに到達できていると思われる。他方、大学院教育での生体科学は、ある程度の専門知識を有している学生がほとんどであるため、専門知識の理解は深まっている。課題としては、学部１年次生において生体科学を単純暗記ではなく、深く理解させることに重点をおくことが必要である。

３　科目の教育活動

１）　生体構造論

１年次前期
濱中 良志、岩崎 香子
現状においては、人体の構造（解剖学）について、１年次生は意味づけをしないで丸暗記する傾向にあり、短期記憶にとどまっていた。人体の構造（解剖学）と機能（生理学）や疾患に関連させたり専門用語を身近なことに例えたりして、１年次生に人体の構造を論理的に教授した。

２）　生体機能論

１年次前期
濱中 良志、岩崎 香子
現状においては、人体の機能（生理学）について、１年次生は、莫大な量を処理すると感じていたため、理解するべきところを単純暗記に切り替えて学習する傾向にあった。そのため、生物学・医学的に重要性の高い基本的な概念から優先順位をつけて、オーバーフローしないように人体の

機能（生理学）を１年次生に教授した。

３）　生体代謝論

１年次後期
安部 眞佐子
　生化学と栄養学の教科書を用いて講義した。基本的な生体分子の種類、性質、機能について講義した。生体での反応がイメージできるように、低分子から高分子へと話しを進め、酵素、ビタミン、ミネラル、生理活性物質について解説を加えた。エネルギー代謝を生化学と個体レベルのマクロな視点から栄養学で講義した。栄養の中では、対象者に対して食事指導ができるように、食事バランスガイドや食品についての内容も加えており、食事摂取基準の設定根拠にふれるように努力している。評価方法として講義ノートの点数化を加味した。

４）　応用生体機能反応論

４年次前期後半、後期前半
濱中 良志、市瀬 孝道、吉田 成一
　現状において、４年次生は、１年次に学習した生体構造論（解剖学）・生体機能論（生理学）を２年次以降に学習した疾患へのアセスメン等の教科とは独立した教科ととらえていた。そのため、生体構造・機能論がどのように代表的疾患の病態生理へ関与しているのか説明しながら、４年次生に生体構造・機能論を教授した。主に、消化器系・循環器系・呼吸器系・神経系に焦点を当てた。
　今年度は６症例について、病理解剖時の所見とともに死に至る迄の経過や病気の病態像（マクロとミクロ病理）をパワーポイントで説明し疾病の病態をより深く理解させた。また今年度は 10 月 20 日に「B 型肝炎の歴史と教訓」について２コマを取り、外部講師と患者さんによって講義が行われた。

５）　健康科学実験　II　組織学実習

濱中 良志
　現状において、２年次生は、１年次に学習した生体構造・機能論の知識が不足していた。そのため、最初に人体の代表的な臓器（肺・胃・肝臓・膵臓・腎臓・甲状腺・精巣・卵巣）の構造と機能について説明した。次に、それぞれの臓器の組織切片をヘマトキシリン・エオジン染色したプレパラートを顕微鏡で観察させ、低倍率で全体像をスケッチさせ、高倍率でその組織の特徴的な構造をスケッチさせた。スケッチの際に、その構造にどのような意味があるのかを考えさせながら、顕微鏡をとおして、２年次生に、生体構造と機能の相互関係を教授した。

６）　健康科学実験　X　心電図と心拍変動

岩崎 香子

心臓の構造と電気生理の復習と心電図が意味する生体情報について解説を行った。合わせて正常波形の読解、異常波形との差異について講義した。学生全員が個人の 12 誘導心電図を測定し、心拍数読み取りや電気軸の測定を行った。

７）　健康科学実験　XI　食物栄養学実習

安部 眞佐子

健康を維持増進させるために有効な食事について実習した。特に、生活習慣病予防として減塩を考慮した食事の摂り方を、塩分計を用いた食品の分析と自分の食事中の塩分量計算、並びに、尿中のナトリウム濃度の測定による一日の塩分摂取量の把握をとおして理解するように務めた。また、嚥下困難者のための食品のとろみを簡易測定し、とろみの程度をとらえられるようにした。

４　卒業研究

・β-セクレターゼ（BACE）が発育に与える影響
・β-セクレターゼの乳腺に与える影響
・乳幼児の卵アレルギー発症からみた卵接種時期の検討
・妊娠期における貧血の発症時期別検討
・アンジオテンシン II の骨細胞障害に関する検討
・骨細胞におけるアンジオテンシン II の影響

３－７－２　生体反応学研究室

１　教育方針

生体反応学研究室では病理学、薬理学、免疫微生物学といった看護の専門基礎分野の科目の教育を行っている。外的・内的要因に対する生体反応、これによって発症する様々な疾病、その発生メカニズム、薬の薬理作用や病原微生物による生体反応と感染症を科理解することによって、体の変調や病気の成り立ち、回復過程を科学的に捉え、これらから得た知識が看護実習や将来の看護実践に結びつけられるように看護の基盤教育行っている。

２　教育活動の現状と課題

昨年に引き続き平成 27 年度は平成 23 年度カリキュラム（生体薬物反応論 I：２年次生、生体薬物反応論 II：３年次生、病態特論：４次生）と平成 27 年度カリキュラム（生体反応学概論、生体反応学各論、微生物免疫論：１年次生）の中で講義を進めた。平成 27 年度カリキュラムはそれぞれの科目で５コマ少なくなったため、基本となる重要な部分を理解しやくす教授した。看護実践を行ううえで、解剖や生理学と共に疾病・病態論や薬理作用を十分に理解しておくことの重要性を認識させ、より看護の視点からこれらの科目を理解できるように講義を進めることが重要である。しかしながら、今年度の学生はこれらの授業への出席率が低く、基礎科目を学ぶことの重要性を認識していない。講義の進め方の工夫と欠席者への対処が必要と考える。また平成 23 年度カリキュラムの講義（生体薬物反応論）では未だに高学年になっても単位が取得できない学生がいる。試験では点数が基準に達する迄、できるだけ再試験を行ように行っている。

３　科目の教育活動

１）　生体反応学概論

１年次後期前半
市瀬 孝道

本科目は病理学の教科書の病理学総論を講義している。病気の本体や成り立ち、修復過程が理解できるように、以下に示す病気の基本となる病変について具体的な疾患名や臨床症状等を挙げながら講義を進めた。学生が各種疾病の成り立ちや病態を理解し易い内容の易しい教科書を選択し、更に教科書を分かりやすく整理したプリントを配布してパワーポイントも使って講義を進めた。講義内容は以下に示すとおりである。退行性病変、進行性病変、代謝障害、循環障害、炎症、免疫、感染症、腫瘍、先天異常、小児・老人性疾患。

２）　生体反応学各論

１年次後期後半
市瀬 孝道

本科目は病理学の教科書の病理学各論を講義している。生体反応学各論とし、系統別に発生する疾病（病理学各論）についての講義を行った。病理学総論から各論へと疾病の基本から系統別疾患の病態を十分に理解させるのに努めた。講義内容は以下に示すとおりである。消化器疾患、循環器疾患、呼吸器疾患、泌尿器疾患、生殖器疾患、内分泌疾患、血液疾患、脳・神経疾患、運動器、感覚器。

３）　微生物免疫論

１年次後期

吉田 成一、西園 晃

微生物と生体、環境との関わり、特に微生物感染症について、および病原微生物に対する生体の防御反応について、理解させることを主要な目標とした。また、今年度より、講義回数が減少したため、内容を整理して、以下の項目について講義した。微生物の特徴、消毒・滅菌法、感染症、各種感染症とその原因、免疫学。講義プリントを配布することで学生の学習がしやすくなるよう努めた。

講義内容が減少したため、理解度が高い学生が増えた反面、理解度が著しく低い学生も認められた。さらに、過年度単位未拾得者で本年度、本講義を再履修科目として履修した学生に関しては、昨年度より、講義内容が減少したにもかかわらず、学習習得状況に改善が認められなかった。一方、再受験科目として履修した学生に関しては、学習習得状況の改善が認められる、全員が単位を取得できた。本科目は 2 年次から 3 年次への進級必須科目であることを十分理解し、理解度が低い学生には、試験前に、自身の学習取得状況を理解させる必要を検討するなど、今後より一層、学習効果を高める方策が必要となる。

４）　生体薬物反応論 I

２年次前期前半

吉田 成一

生体薬物反応論 I は薬理学総論、末梢神経系に作用する医薬品に関する講義を行う科目である。学習範囲が絞られているため、理解度が高い学生が多い状況であった。しかし、総論分野（特に薬物動態に関する内容）や解剖生理学の理解が前提となる交感神経系に関する医薬品について、理解度が低い学生が散見された。これらの理解度が低い場合、３年次で行う生体薬物反応論 II の理解の妨げになるため、今後、薬物動態や交感神経系に関する内容についてより充実させていきたい。

５）　生体薬物反応論 II

３年次前期

吉田 成一

疾病の薬物治療に用いる医薬品の作用原理に主眼を置き、薬物を投与した際の生体反応（主作用及び副作用）を中心に講義した。生活習慣病で使用する医薬品、中枢神経系疾患で使用する医薬品、免疫系疾患に使用する医薬品、救命救急時に使用する医薬品など多岐にわたり臨床上使用する医薬品全般について講義した。

２年次後期により臨床的な実習を行い、本講義で取り扱う医薬品に関し、その重要性を理解しているため、積極的に学習するという意欲が高く、理解度は全般的に高かった。そのため、再試験に該当する学生はいたものの、最終的にほとんどの学生が単位を種痘できる学習状況となった。本年度の状況を考慮すると、今後、より専門的な講義内容を含んだ講義を行い、学生の医薬品分野における理解度のさらなる向上を目指したい。

６）　健康科学実験　III 血液検査

定金 香里

貧血・感染症に関わる検査のうち、ヘマトクリット値の測定、CRP 検査、赤・白血球数測定、末梢血血球・組織球の形態観察を、ラット静脈血を用いて行った。検査方法はヒトの血液検査に準じて行い、それぞれミクロヘマトクリット法、CRP 定性測定法、血球計算盤を用いた視算法、ディフクイック染色を実施した。いずれの検査も、標本の作製や診断を教員の指導の下、学生自身が行った。また診断基準に関する考察や演習も行った。

７）　健康科学実験　IV　基礎微生物学実験

吉田 成一

環境中に細菌が存在することを確認させる目的でヒトの表皮、日用品に常在する細菌を培養し、観察した。さらに手洗いによる指先に付着している細菌数の変化を測定した。また、温度によって細菌の増殖に差があることを視覚的に認識した。細菌が抗生物質により発育が阻止されることを認識させる目的で薬剤感受性試験を行った。各種病原微生物の抗生物質に対する感受性を測定し、臨床使用時での使い分けについて考察した。

８）　健康科学実験　V　ラットの解剖

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

ヒトの構造を知る一手段としてラットの解剖を行った。例年と同様にラットを開胸、開腹後、系統立てて臓器・器官を観察し、臓器の相対的位置や相互の関連性について理解させた。また、各臓器を摘出して、色、大きさ、重さ等を測定、スケッチすると共に生きた臓器を実際に触れてその形状や感触を理解させた。スムーズに解剖が進行する工夫として、先にデモンストレーションを行いながら十分に方法や内容を説明した。また、心脈管系の図を白板に詳しく描き、実物と比較しながら理解させた。

４　卒業研究

・PM2.5 のアレルギー喘息増悪作用における活性酸素の役割
・黄砂のアレルギー喘息増悪作用における活性酸素の役割
・微生物由来成分 LPS とβ-glucan 及び黄砂の複合曝露によるアレルギー性気道炎症増悪作用
・妊娠期における微小粒子 PM2.5 の曝露が出生仔の免疫系に及ぼす影響

３－７－３　健康運動学研究室

１　教育方針

①　体を動かすことの楽しさを体感する
②　健康・体力を増進するための運動量、運動強度を確保する
③　個人、社会、人類にとって運動が重要であることを理解する
④　自分に合った運動を見つける
⑤　運動習慣を身につける
⑥　科学的なものの見方や考え方などを知る
⑦　ボランティアを通して様々なことに気づき、考え、今後の人生に活かす

２　教育活動の現状と課題

授業では、看護系の授業や実習を視野に入れ、学生のレディネスにも配慮しながら、授業を構成している。特に、自己から他者へ、過去から未来へ、体験から指導へ、経験から理論へ、個から集団へ、基礎から専門へという流れを考慮して、体験と科学的知見に基づいた教育を進めることを意識している。

１年次は健康運動ボランティア演習から始まる。この科目は、人、社会、自然と直接かかわる体験を通して、地域や社会のために何かをすることで喜びを感じ、人間としてごく自然な暖かい感情を育むことを目指している。また、地域や社会の構成員としての自覚を確認し、相互に支え合うという意識を醸成する。そして、学習意欲を高め、就職を含め将来の人生設計に役立てようとするものである。

大学に入学すると身体活動量は低下し、特に、一人暮らしになると、食事や休養等がおろそかになりがちである。これにより、体力の低下、体脂肪率の増加、ストレス、自律神経活動の低下やアンバランス等も懸念される。このような点を考慮して、授業にはできるだけ実習を入れて体を動かす機会を増やし、１年次生の健康運動では運動強度と運動量の確保のために、行動変容理論等を活用している。また、この点を考慮して、来年度からは２年次の「身体運動科学」が講義と実技を含む「健康運動学演習」に変更される。

他の研究室が３名以上で実施していると同等かそれ以上の授業数を教員１名で行なっているため、教材作成、指導、設営等に関する負担が多い。

３　科目の教育活動

１）　健康運動ボランティア演習

１年次
稲垣 敦
教員から学生に相応しいボランティアイベントを募集した後、学生に 21 のイベントを提示して希望調査を行って調整し、各学生が 3 つのボランティアを体験し、ボランティア参加毎にレポートを作成した。

２）　健康運動

１年次後期
稲垣 敦、甲斐 倫明、濱中 良志
運動の楽しさや健康の素晴らしさを体感するため、多くのレクリエーション、ニュースポーツ、バドミントン、テニス（甲斐、濱中）を行なった。運動量や運動強度の確保にも配慮した。

３）　身体運動科学

２年次前期
稲垣 敦
はじめに科学についての授業を行い、人間固有ともいえる二足歩行について考えた。また、生物の進化に伴う形態や機能の変化、加齢や不活動による体力の低下などに関する科学的根拠に基づいて、体力や運動の重要性や健康との関連性を講義した。さらに、ボディメカニクスの講義を行い、重心、バランス、姿勢、重心動揺、骨密度、身体部位別の体脂肪率・筋量の測定実習も行った。

４）　健康運動学

２年次後期
稲垣 敦
生物の進化に伴う形態や機能の変化、加齢や不活動による体力の低下などに関する科学的根拠

に基づいて、体力や運動の重要性や健康との関連性を講義し、トレーニング理論と具体的な運動の仕方についても解説した。これらに加え、運動療法について講義した。また、厚生労働省「健康づくりのための身体活動量基準 2013」等に準拠したエネルギー消費量の計算や身体活動量の測定実習も行なった。

５）　スポーツ救護

全学年前期
稲垣 敦

大分県看護研修センターで開催された大分県スポーツ学会主催の第６期スポーツ救護講習会（４月 12 日、５月 31 日、６月 14 日）に大学院生２名、学部生 11 名が受講し、このうち 12 名が認定試験を受験して合格し、スポーツ救護士及びスポーツ救護ナースのライセンスを取得した。学部生は看護師免許を取得後、自動的にスポーツ救護ナースのライセンスに変更される。

６）　健康科学実験　IX　呼吸循環器系持久力の測定

稲垣 敦

自転車エルゴメーターを用いた最大下運動負荷時に心拍数と運動負荷を測定して、心拍数と仕事率の関係、自転車の機械的効率、仕事量と酸素摂取量の関係から最大酸素摂取量を推定し、呼吸循環器系持久力を評価した。実習ではペアを組み、被検者と検者の両方を経験できるようにし、実験中は全ての学生に対し個別に指導した。また、テキストに加えて、測定および計算の仕方を説明したレポート用紙を準備した。説明では、患者や高齢者の運動指導を想定し、安全性や倫理に関して注意すべき点を含めた。実験にあたっては、性別、年齢、運動習慣、運動歴、現病歴や既往歴、当日の体調に配慮した。計算方法のわからない学生には、個別に指導した。

４　卒業研究

・温泉入浴におけるストレス低減要因
・登山の心理的効果

３－７－４　人間関係学研究室

１　教育方針

自他の独自性を尊重し、人と喜びや苦しみを分かち合うことのできる人間性を養うため、人と係わる際の基本的な知識やスキル、人間の行動や発達についての理解・洞察を深めるために必要な知識、精神看護学の基礎となる知識の習得を目的としたカリキュラムを編成している。各科目の具体的な教育目標は以下の通り。

1. 人間関係を作り育む方法についての体験的理解（「コミュニケーション論」）、2. カウンセリングの基礎理論の理解とコミュニケーションスキルの習得（「カウンセリング論」）、3. 環境を認識し、働きかける存在としての人の機能についての基本的知識の理解（「人のこころの仕組み」）、4. 人間を状況論的に理解する視点及び対人援助に関する基本的な知識の習得（「人間関係学」）、5. 対人援助技術の習得（「行動療法と発達心理」「カウンセリング論」、6. 発達心理学の知見をベースとした発達障害の理解（「行動療法と発達心理」）、7. 看護と関わる心理学的知識についての理解（「人間関係学」「発達心理と行動療法」「カウンセリング論」）。

授業に際しては、個々の心理現象を看護実践や各自の日常生活での体験と関連づけ、援助スキルや心理検査などを体験に基づいて理解できるようにするため、授業時間内に演習を行ったり、学生同士が話し合い交流する時間を確保している。授業終了毎に学生に感想・コメントの記述を求め、学生の授業理解程度や授業評価の一助としている。併せて、長期休暇中や時間外課題を提出し、学生の学習環境を整備することを心掛けている。

２　教育活動の現状と課題

基本となる教育目標は、人間の行動の法則性に関する基本的な知識の習得、集団レベル・個人レベルでの人間関係の理解、対人援助技術の体験および理解である。学生の理解が表面的なものに留まることを防ぐために、時間外レポート作成、食堂などのオープンスペースを活用したカウンセリングスキル実践、ペアワークやグループワークなど、アクティブラーニングの機会を積極的に取り入れた教育実践を展開している。授業評価アンケートやレポートに記載されたコメントから得られたデータに関しては、備品整備・教室変更・演習時のボランティアの活用など、教育活動の改善に結びつけている。研究室での教育実践は、平成 23 年より継続して大学教育研究フォーラムで発表している。

３　科目の教育活動

１）　人のこころの仕組み

１年次前期

吉村 匠平

カリキュラムの改訂に伴い、今年度より 10 コマでの開講となり、1 クラス編成で講義を行った。人間の外界及び自己を認識する機能の特徴、２年次前期「行動療法と発達心理」の理解に必要な学習心理学の基本的な知識について、小実験＋ペア活動＋意見交流をベースとして授業を行った。毎時抽選による座席指定を行い、講義時間中にペアで行うグループワークを取り入れ、教室全体での交流を行った。学生の発言時にはクーポンを付与し、発言を強化した。積極的に話し合い活動を行っているペアにもクーポンを付与した。時間外学習の機会として、ショートレポート及びコメントの作成を求めた。また、ネコバス（学内学習用 SNS）上に講義内容の理解を促進するための自己学習課題を提示し、提出者には平常点を付与した。評価については、平常の学習の積み重ねのみで行った。

２） コミュニケーション論

１年次前期

関根 剛

コミュニケーションについて、情報の受信－理解－発信の側面から、知識、体験、スキルの講義を行った。まず、プレゼンテーションの重要性をグループエクササイズを通じて大家的に理解させた。さらに、受信として行動観察、理解として文化、発信としてプレゼンテーション、手話、受信－理解－発信の流れとしてプロセス・レコードの講義、今後のグループワーク等の為のリーダーシップの解説などを行った。入学直後の講義であり、看護の基礎スキルとなるコミュニケーションについて、体験的に理解させるために、知識に偏らない、演習やエクササイズを取り入れたものとすることを重視して展開した。小レポートおよび試験によって評価を行った。

３） 人間関係学

１年次後期

吉村 匠平

自他の「人格、性格」理解について、実体論的理解（類型論、特性論）と状況論的理解の双方の視点から考える機会を提供した。自他を状況論的に理解するための態度としてカウンセリングマインドについて取り上げた。授業は２クラス編成で進めた。教室の机をコの字型に配列し、学生相互がお互いの発言を対面状況で確認できる環境を構成した。毎時抽選による座席指定を行い、ペアワークを行った上で全体への発言を求めた。発言ペアだけではなく、授業中のペアワークの態度が優れているペアに対してもクーポンを付与した。授業時間外の学習機会として、ショートレポートの作成に加え、ネコバス（学内学習用 SNS）上に提示された自由課題への投稿を求めている。学生にペア活動の評価を求め、学習活動のアセスメントを行った。

４）　カウンセリング論

１年次後期
関根 剛

看護に必要なカウンセリング技術とカウンセリング理論等について解説およびロールプレイを行った。コミュニケーションスキルの解説３回、ロールプレイ３回と、実務に必要となるスキル習得を中心に構成している。ロールプレイは、学生４人グループに分けて、相談事例を用いての聞き役、話し役、観察者となることを通じて、実際のコミュニケーションスキルの基本を獲得させた。また、カウンセリング理論は、認知行動療法、精神分析、来談者中心療法、PTSD 等の危機介入などについて解説している。評価は、ロールプレイのレポートおよび試験による。

５）　行動療法と発達心理

２年次前期
関根 剛、吉村 匠平

行動分析、認知行動療法の基礎について解説し、学生自身の日常の健康行動改善に関する目標設定、行動改善プログラムを作成させた。夏期休暇中に行動改善プログラムを実施して、プログラムの評価、改善点等をレポートさせて、具体的・体験的に行動療法によるアプローチを理解させた。行動改善レポートおよび試験で評価した（行動療法）。

進化発達心理学の知見に基づき、言語発達、運動発達、アタッチメントについて、受講者がお互いに意見を交流しながら講義を進めた。加えて、ICF モデルによる発達障害の理解をベースとして、発達障害をスペクトラムという視点でとらえることの重要性、サポートの視座などについて理解させた（発達心理）。

４　卒業研究

・髪色による印象形成と性差の関連
・看護学生の生涯スポーツの種目選択と個人特性の関連について
・SD 法による「マインドフルネス」の言語イメージ調査
・恋愛依存尺度再検討の試み
・看護学生の主観的幸福感について　－ポジティブ心理学的介入－

３－７－５　環境保健学研究室

１　教育方針

環境保健学研究室では、環境保健学が直接カバーする知識や問題以外に、物理、化学、生物、統計学に関係する基礎的事項から社会的な問題まで広くカバーすることで、学問の奥深さを学ぶ機会を提供している。学部教育では環境保健学概論に加えて、環境保健学詳論がスタートし、基礎的な項目と社会的な問題との関連を意識しながら、学問に対するモチベーションを育成する講義となるようにしている。健康と環境は、看護の基礎にある科学的な見方として不可欠であること、健康がどんな要因と関係しているのか、そのことを知るためにどんなアプローチがとられていて、また、どんな考え方で健康に対処しようとしているのかを環境保健の講義から学ぶように指導している。一方で、放射線は医療において不可欠な存在であることから、放射線の基礎知識から健康影響、医学利用まで保健医療に携わる者が身につけるべき知識を教授している。大学院教育では、広域看護学コースの環境保健学特論（必修）、NP コースの放射線・超音波診断演習の支援を中心に、健康科学専攻の院生の研究指導を行っている。

２　教育活動の現状と課題

１年次から２年次に進学すると、他の科目の負担が大きくなるために、国家試験との関係が比較的薄い内容であるためか、環境保健に対する関心が低下することは従来からの課題である。２年次の環境保健学詳論では、参加型の授業を取り入れ、環境と健康の関係を自ら調べ考えるよう指導した。４年次の選択科目である「環境倫理学」は選択する学生が年々少なくなっているため、平成 23 年度入学生からは、「環境リスク論」と統合して、演習方式で環境保健全体に関係する課題へのアプローチについて基礎力をアップする「環境疫学・生物学演習」に衣替えしている。

３　科目の教育活動

１）　環境保健学概論

１年次前期

甲斐 倫明、小嶋 光明、石川 純也

環境保健全般をカバーすることではなく、基本的な考え方や健康との関係を理解するための方法を中心に講義をしている。講義内容は次の通りである。1)環境と健康に関する社会問題、2)環境保健の基礎概念（曝露、量反応関係）、3)健康影響の考え方、4)がんの生物学、5)人の発がん、6)がん以外の健康影響、7)安全性試験とリスク評価、8)環境疫学、9)環境リスク論とリスク心理学、10)環境リスクの諸問題とまとめ

２） 環境保健学詳論

２年次前期後半

小嶋 光明、甲斐 倫明

環境と健康との関係を方法論と事例を通して学ぶために、学生に参加型の授業を導入し理解を促す配慮をした。講義内容は次の通りである。

1) オリエンテーション、2) 健康影響の原因、3) MRI 検査でなぜ金属物を持ち込めないのか、4-1) 低周波音問題が通常の騒音問題とは同じに扱えないのはなぜ、4-2) ミクロショックでは微量な電流でもなぜ致死的なのか、5) 鳥インフルエンザはなぜ世界が注目して警戒するのか、6) BSE はなぜ全頭検査をしてもリスクがあるのか、7-1) 食中毒はなぜへらないのか、7-2) 熱中症対策に塩分はなぜ必要か、8) PM2.5 の健康影響をどう考えればよいか？その対策は、9) 化学物質中毒死の中で最も多い原因が一酸化炭素中毒であるのはなぜ、10) 社会的な喫煙対策が進まないのはなぜか、11-1) 給食でのアレルギー死亡事故はなぜ起きるのか、11-2) 食生活が健康に大きく影響するのはなぜか、12-1) 遺伝子検査・染色体検査の陽性結果をどう伝えるか、12-2) アスベストは規制してもなぜ将来への影響が危惧されるのか、13-1) 健康診断のマイナス面は何か、それはなぜ生じるのか、13-2) 予防ワクチンの集団の効果も期待し、個人の副作用リスクを避けるにはどうするか、14) 多くの健康食品の効果はプラシーボ効果で説明できるか

３） 放射線健康科学

２年次後期前半

甲斐 倫明、小嶋 光明、石川 純也

放射線と健康との関係を理解するために、放射線の物理、生物、医学、リスクまでの広範囲の知識をコンパクトにして講義を行っている。その際、物理や生物は同時期に実施している健康科学実験と合わせて理解できるように配慮している。また、医療における放射線利用に対する基礎知識を持たせる。昨年度に引き続き、県の関係機関からの専門職が受講した。講義内容は次の通りである。

1)放射線影響と放射線防護の歴史、2)放射線とは何か、3)放射性同位元素と放射能、4)身近な放射線・放射線源、5)放射線と物質との相互作用、6)被ばくの様式と放射線の線量、7)放射線の生体応答（DNA 損傷と突然変異）、8)放射線の生体応答（染色体異常と細胞死）、9)放射線の健康影響（確率的影響）、10)放射線の健康影響（確定的影響）、11)放射線リスクの評価（がんと遺伝）、12)医療における放射線利用、13)医療における放射線防護、14)安全の考え方と放射線防護

４）　環境疫学・生物学演習

３年次後期後半

甲斐 倫明、小嶋 光明、石川 純也

健康と環境（生活習慣を含む）との関係は疫学的な統計によって明らかになってくる知見、分子細胞レベルの生物的な仕組みを通して明らかになってくる知見とがある。基礎的事項の演習と事例を通して、健康と環境との関係についての知見が生まれてくる仕組みの基礎を論じた。講義内容は次の通りである。1）データのバラツキとヒストグラム（血圧データより）、2）正規確率紙の利用と正規分布からのズレ、3）全がん標準化死亡比、4）生命表と平均余命、5）バイオインフォマティクスとゲノム科学、6）遺伝性疾患と遺伝子診断、7）バイオテクノロジー

５）　健康科学実験　VI　放射線

石川 純也

本実験では、実験前に身近な放射線の種類、自然放射線または人工放射線による被ばく線量の概略、放射線測定方法及び測定機器の概略などについて講義し、実験では実際に屋内外の自然放射線量、人体を構成する物質の放射線量、臨床で想定されるベッドサイドでの放射線量を測定させた。これらの実験より、普段、人々が生活している空間における年間被ばく線量、人体を構成する物質からの年間被ばく線量などを算出させ、その量を具体的に把握させた。また、ベッドサイドの実験では、臨床の現場で日常的に使用される放射線による被ばく線量を具体的に把握させ、放射線防護の観点から非験者以外の患者や医療従事者に対して講じるべき措置について科学的に把握させた。

６）　健康科学実験　VII　測定誤差と変動

甲斐 倫明

医療では様々な測定が行われ、その測定値をもって判断が行われる。測定値は、測定の原理や測定条件、あるいは測定器の特性などから同じ対象を測定しても同じ数値を得るとは限らない。本実験を通して、測定値のもつ誤差および影響を与える因子よる変動を区別して理解し、測定データの読み方を学ぶ。実験内容は次の通りである。1)血圧測定の誤差と変動、2)体温測定の誤差と変動

７）　健康科学実験　VIII　染色体異常

小嶋 光明

染色体の実体と染色体異常の発生機序について理解を深めるために、正常染色体および放射線によって誘発した異常染色体の標本を、学生一人一人に検鏡させた。また、染色体異常が疾患の原

因となり得る例としてダウン症候群と慢性骨髄性白血病を取り上げ、核型分析等を通して異常染色体を同定させた後、疾患との関係について簡単な解説を加えた。

4　卒業研究

・小児 CT 検査に施設間の違いをもたらす要因分析
・放射線の繰り返し照射がヒト正常線維芽細胞の動態に与える影響
・X線照射した C3H マウスの造血幹細胞に与えるカロリー制限の影響
・健康リスクの物差し：がんの累積死亡確率と障害調整生存年の比較
・放射線を繰り返し照射した C3H マウスの骨髄細胞における染色体異常の累積性
・甲状腺がんの発症数理モデルによる年齢別罹患率の解析

３－７－６　健康情報科学研究室

1　教育方針

科学的根拠に基づいた看護実践と基盤となる、情報収集と分析および発信のための知識と技術の修得をめざして教育を行っている。また、学習と業務における情報処理の能力を早期に高めることができるよう配慮し、実践的な教育内容を展開している。

特に、単なるデータの取り扱い技術や数的処理の知識として学ぶのではなく、看護職として、また一人の社会人として適切に判断・行動ができる能力を養うため、具体的な事例において自ら考えて学習することを推進している。

2　教育活動の現状と課題

学生の情報収集能力、情報処理能力は見かけ上は変化が少ないが、情報の質を見極め、分析し、判断するスキルに関しては低下傾向にあると感じている。

すでに学部教育において本研究室が教授する、疫学・保健統計学、統計学、情報処理・情報リテラシーの知識と技術は、保健師養成ではなく EBM の基礎として再構成が進み、これらの基盤となる共通科目の自然科学の基礎や、まとめと研究への応用となる統合科目の看護科学研究とは内容の連続性を考えた構成を組み立てることができた。また、平成 27 年度カリキュラムで 10 コマに減少した講義科目については、健康情報処理演習との組合せによって、教育水準と成果を維持することができたと評価する。

しかし、看護職を目指して入学した学部 1 年次の早期の段階で、本研究室の担当するこれら科目が臨床の看護にどう必要とされるのかを実感させることが不十分であることは解決していない課題で

あり、今後は看護領域の教育内容とのより一層の連携を検討する必要もあると考える。

また、大学院教育においては、多くの学生が修士課程で履修する保健情報学特論は EBN の基本としての生物統計学と情報利活用の基礎と若干の応用を含め、継続的に内容と教授法を改善しつつ教育効果をあげているが、学習前のレディネスのばらつきへの対処が課題と考える。また、広域看護学コースの専門科目については、履修者の増加する来年度に向けて授業の進め方を検討する必要があろう。

３　科目の教育活動

１）　健康情報学

１年次前期

佐伯 圭一郎

保健統計・疫学領域の内容から、看護師としての基礎知識の定着、EBN の導入として、様々な保健統計の意味と現状、EBN のための基礎的な疫学の諸理論を教授した。また、平成 27 年度カリキュラムより講義時間数が減少したことに対応し、健康情報処理演習との連携を向上し、演習テーマとして、保健統計の現状について自ら情報収集と分析、疫学データの基本的な解析を設定し、知識の定着と応用能力の向上を図った。

２）　生物統計学

１年次後期

野津 昭文、佐伯 圭一郎

看護学研究を遂行する上で必要とされる記述統計学、推測統計学の基礎的知識を身につけることを目標に講義を行った。特に統計的仮説検定を一般原理から解説することで、応用できる知識を伝えることに努めた。

またレポートで練習問題を課すことで知識の定着に努めた。

３）　健康情報処理演習

１年次

品川 佳満、野津 昭文、佐伯 圭一郎

パーソナルコンピュータを学習や保健医療の場における情報の管理および利活用のための道具として扱えるように看護職に必要な技術について演習形式で教授した。主な演習内容は、ネットワークの利用、データ管理、ワードプロセッサ、表計算、プレゼンテーション、Web 技術、画像

処理、データベースの利用、保健統計・疫学・統計データの分析である。また、技術的な面だけでなく、ネットワーク、情報セキュリティ、情報モラル、個人情報の保護、病院情報システム（オーダリング、電子カルテシステム等）など医療職者として情報を扱う上で重要となる知識について講義形式で教授した。毎時間練習問題や演習課題を提示することで、技術や知識の定着を図った。

４　卒業研究

・不慮の事故による乳幼児死亡の分析と予防対策の評価
・医療分野における個人情報漏えい事故パターンの特徴　―業種間比較による分析―
・精神病床における平均在院日数の地域差に関連する要因の分析
・数理モデルを用いたインフルエンザの感染過程の解析
・在宅ターミナルケアの現状と課題に関する文献的研究
・介護サービス施設・事業所調査結果からみた診療・介護報酬改定の影響

３－７－７　言語学研究室

１　教育方針

言語活動の四技能である Speaking, Listening, Reading, Writing をバランスよく伸ばすことを念頭に、将来の専門分野で役に立つ英語が身に付くよう、実用的で易しい英語コミュニケーション（Speaking, Listening）に取り組ませている。また、人間としての感性を養うという観点を含め、英語処理能力を高めるために、易しい英語で書かれた様々な分野、ジャンルの英語読本を積極的かつ多量に読ませる「多読」を導入、実施している。更に、教室内での活動を課外でも維持継続できるよう、CALL（Computer Assisted Language Learning:コンピューターを用いたウェブ学習システム）による TOEIC 対策英語学習プログラムを実施している。

２　教育活動の現状と課題

ネイティブ・スピーカー教員の授業では、自作の教材を毎回配布し、学生はパートナー同士、または、小さなグループで英語コミュニケーション（Speaking, Listening）を練習する。１年次生の講義内容は、一般的な日常生活の話題（Food, Shopping, Home, その他）、２年次生の講義内容は、看護英語である。各話題について３～４週間かけてじっくり練習を行い、同じ学生が毎回同じグループに含まれないように配慮することで、新鮮な気持ちで楽しく学習できるよう工夫している。応用可能な文法・語法の講義をもとにして、学生同士で授業ごとの討論課題について英語で意見交換などの言語活動を行う。また、１年次生前期の授業では、CALL 学習を必修授業として取り入れている。授業

を二部構成とし、上記の自作教材を用いたグループでの英語コミュニケーションの練習と、CALL 学習を行なう。1クラスを2グループに別け、グループ毎に交互に講義を行っている。両者をバランスよく組み合わせ、学生の英語運用能力の維持、向上を目指す。

日本人教員の授業では、授業を二部構成とする。前半では、英文テキストの日本語訳を最初に配布し読ませることで、テキストの内容を理解、把握させ、それをもとに、課題となるテキスト部分についての語彙、文法、発音についての講義を行う。こうした基本的な理解を基盤として、ネイティブ・スピーカーの発話を音声 CD で確認し、実際に発声の反復練習を行う。講義で取り扱った課題テキスト部分は次週までに暗唱できるようにしてくることが課題となり、次週には実際に暗唱（含む筆記）できるかの確認を行う。後半では、易しい英語で書かれた書物を、辞書を用いることなく読み、総読書語数 100 万語を目指す多読を実施する。「辞書は使わない・分からない部分は飛ばす・つまらない本は途中でやめる」を原則に、学生自らが読む本を自由に選択することで学習動機を維持しつつ、英語運用能力の維持、定着、向上を目指す。

言語能力の向上には継続学習が不可欠である。しかし時間的な制約もあり、教室内での活動は限定的にならざるを得ない。そこで、年間を通し、全ての学生（1～4年次生、大学院生）が自ら自由に英語学習に取り組めるよう授業外での多読教材の貸し出しや、CALL システムによる TOEIC 対策のための英語学習、学習期間前後の TOEIC IP 試験を実施している（前期：1年次生必修。後期：全ての学生を対象に希望制にて実施）。受講した学生は、真剣に取り組み、結果として学習効果の向上がみられた。

CALL システムについては、授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうため、7月 19 日（日）のオープンキャンパスにて、模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際に CALL システムを体験してもらい、授業への理解を深めてもらった。

学生の英語学習に対する意欲の維持や学習活動の継続を図るべく、日々学習環境の整備を模索している。さらに魅力的な教室内活動の実現と自主的な学習へのきっかけ作りをいかに構築していくかが今後も継続課題である。

3　科目の教育活動

1）　英語Ⅰ－A１

１年次前期

宮内 信治

英語の音声については、母音を中心に発音記号と発声法について確認と練習を行い、その定着を図った。講読では、デイル・カーネギー、アン・リンドバーグ、ミッチ・アルボム、バートランド・ラッセルなど 20 世紀のエッセイや文学、哲学を題材にした英語名文集を教科書として用いた。テキストに併記されている日本語訳を参考に、その解釈に至る基本的な文法の理解を深め、添付の音源 CD を活用してスムーズな音読を習得すべく、発声練習を試みた。学んだ英文を帳面に書写し、次の講義までに暗唱音読ができるようにすることを課題とした。現代においてもなお規範となる

英文テキストの一部を暗唱することにより、英語の世界の教養の一端を体得できたと思う。

２）　英語Ｉ－Ａ２

１年次後期

宮内 信治

英語の音声については、子音を中心に発音記号と発声法について確認と練習を行い、その定着を図った。講読では、前期と同じ教科書を用いて、リチャード・ファインマン、アインシュタインのエッセイに触れて理解を深めると同時に、シェークスピアのソネットにも触れた。また、国際的に著名な日本人が英語で著した規範的名文として、新渡戸稲造『武士道』、鈴木大拙『禅と日本文化』を読むことで、日本人とはいかなるものか、という問いに答える英語を、書写と音読、暗唱で体得した。

３）　英語Ｉ－Ｂ１

１年次前期

Gerald T. Shirley, Naho Baba

This class had two components: an eight-week-long Computer Assisted Language Learning (CALL) session, and speaking and listening activities in the classroom. The CALL session focused on listening, reading, and grammar problems. Students took the TOEIC test before and after the CALL session. In classroom work, a topical syllabus was used. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities were used to maximize student interaction. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students had to participate actively in every class.

４）　英語Ｉ－Ｂ２

１年次後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

５）　英語 II－Ａ１

２年次前期

宮内 信治

原書 Word Power Made Easy を用いて、英語語彙の増強を図った。ギリシャ語、ラテン語起源の語源についての知識を習得しつつ、性格を描写する語彙、医療職者を表す語彙を学び、さらにそこから派生する様々な語彙についての習得に努めさせた。学習した次の週に単語小テストを課し、学習の確認と評価とした。期間中に３回、教科書本文の中から教員が指示した原文について、音読暗唱の課題を与え、評価した。１年次に引き続き、多読活動にも取り組ませた。

６）　英語 II－Ａ２

２年次後期

宮内 信治

前期に引き続き、原書 Word Power Made Easy を用いて、英語語彙の増強を図った。医療職者を含めた実践者（practitioners）と、科学者についての語彙を学習し、さらにそこから派生する様々な語彙についての習得に努めさせた。学習した次の週に単語小テストを課し、学習の確認と評価とした。期間中に３回、教科書本文の中から教員が指示した原文について、音読暗唱の課題を与え、評価した。多読活動も実施させた。

７）　英語 II－Ｂ１

２年次前期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

８）　英語 II－B２

２年次後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

９）　英語 III

３年次後期後半

Gerald T. Shirley、宮内 信治

講読担当　語源学の知見を基に医療や看護に関連する語彙を習得させた。また、論文構成を確認したうえで、実際に発表された英語の原著論文を読解させた。双方ともに、看護・医療に関連する新しい語彙と知見に触れさせることができた。

４　卒業研究

・看護学生が実習で患者から受けた感謝の言葉についての調査と分析
・文献にみる１型糖尿病の児童・生徒に対する学校生活の支援の現状と課題
・ナースプラクティショナーに関する英語文献の検討：Long-term care に着目して
・訪問看護師による緊急時対応の現状と課題：O 市のターミナルケアに焦点をあてて

３－７－８　基礎看護学研究室

１　教育方針

すでにカリキュラムが改正され、また１単位の講義コマ数が 15 コマから 10 コマに変更になり、基礎看護学研究室の教育方針として、看護師という専門職について理解させ、将来の進路に対して、より具体的なイメージや方向づけができるように教材の準備や精選に努め、一方的な講義形式ではなく、できるだけ学生を参加させ、興味・関心を引き出すような教材の精選と提示を目指した。具体的には看護学の導入部分として看護の歴史やその発展及び看護理論を理解させるとともに看護とは

何か、看護の本質と機能および看護専門職の役割と活動を理解させる(「看護学は概論」)、日常生活の援助技術および医療に伴う看護技術の基礎を理解させる(「生活援助論・医療技術論」)、看護を学ぶ初学者が実践と理論は表裏一体の関係であることを知る(「看護理論入門」)、早い時期に学外に出て看護の現場を体験することで、看護の仲間入りを実感できるという期待を込めた（「初期体験実習 Early Exposure」)、入院患者に接しながら、看護の対象の生活環境や心身の状態をふまえ、専門職としての看護師の役割を理解する(「基礎看護学実習」)などがあり、講義を行うにあっては上記の科目の学習進度にそってさまざまな看護実践と関連づけたり、実際に体験させたりしながら、双方向の教育をめざし、看護の基盤としての理解が進むように配慮している。

２　教育活動の現状と課題

できるだけ学生を参加させ、興味・関心を引き出すような教材の精選と提示を検討したが、講義時間の減少で、割愛した項目もあり、次年度は割愛項目の補いも何らかの手立てが必要である。また講義・演習・実習が有機的に結合されるように具体的な教育目標の実施に当たっては特に配慮をした。専門職である看護師について理解させ、将来の進路に対しても方向づけできるように学生同士の討議やグループワークも取り入れて行った。演習での視聴覚教材の活用や講義、実習前後のレポート指導なども強化して行った。e-learning システムの充実に取り組み、学生が大学だけでなく、自宅でも e-learning システムが有効に活用できるように、関係部署への働きかけや情報収集も行った。今後、少ない講義時間や演習時間を補う効果的な指導の検討や講義等では時間制約の中で不足しがちな自らがやってみる、考えてみる活動を増やすことを目標に取り組むことが必要である。また今年度より新たに、初期体験実習が基礎看護学研究室の担当科目となり、今年度の成果と次年度への課題を十分に協議し、次年度の計画修正も課題である。

３　科目の教育活動

１）　看護学概論

１年次前期

伊東 朋子

看護学の導入として看護とは何か、看護の本質と機能および看護専門職の役割と活動について理解させ、看護に対する興味関心を高揚させることができるような教材を精選した。講義回数が 10 回になり、学生が調べたものなどを発表する機会を設けたかったが、今年度は割愛せざるを得なかった。講義回数の減少を補うための課題や自己学習の強化などが今後、必要である。

２）　看護理論入門

１年次後期
伊東 朋子
　看護活動に必要な看護理論に焦点を当てて、看護理論とは何か、看護理論の必要性などについて理解させた。主な理論家について事前学習させて、学習内容を発表させながら、それを中心に展開した。２段階(基礎看護学)実習への橋渡しとして、生活援助論で学んだ具体例などを取り上げ、実際の臨床現場における看護理論の考え方について指導した。

３）　生活援助論

１年次前期
伊東 朋子、秦 さと子、石丸 智子、巻野 雄介、麻生 優恵
　看護援助を行う意義や人体の構造・機能を看護援助と結び付けること、看護技術の原理原則を対象者にどのように応用していくのかという点を主軸に演習構成をした。実技を通して、対象の安全、安楽の視点で常に自分の援助を振り返るように指導を行うと共に、単に手順を覚えるのではなく原理原則を実感できるように客観的データを測定で得るなど科学的な側面も取り入れた。特に技術の習得には模範者のデモンストレーションが重要で、見よう見まねしながら技術を習得していくため、繰り返しデモンストレーションが見られるよう e-learning を活用した。学生は試行錯誤しながら演習を進めていくため、担当教員が巡回しながら個別の指導に当たった。一貫した指導ができるよう演習構成に関して事前の打ち合わせを行い、対象学生のレディネスに応じた授業展開に努めた。課外での自主学習においても、研究室内でサポート体制を構築した。

４）　医療技術論

２年次前期
秦 さと子、伊東 朋子、巻野 雄介、石丸 智子、麻生 優恵
　診療に伴う治療・処置・検査等における基本技術に関して講義と組み合わせて演習を行った。医学的検査や治療の際に付随して発生する対象の苦痛や不安をできるだけ軽減し、検査の目的や治療の効果が最大限に達成されるように援助する方法について、自ら想起し、判断できる力を育てるために、解剖生理学などで得た知識との統合や生理的機能を活かした看護手法について考える構成とした。さらに、看護技術の原理を科学的に体験することで技術の背景にある法則性や科学性に基づいた技術の習得につなげられるように工夫した。

５）　初期体験実習

１年次前期後半

伊東 朋子、秦 さと子、河野 優子、巻野 雄介、吉川 加奈子、江藤 由布子、西部 由里奈、松吉 晃子、川野 明子、田中 佳子、石丸 智子、麻生 優恵、後藤 成人、足立 綾、桑野 紀子、中釜 英里佳

初期体験実習 Early Exposure は早い時期に学外に出て看護の現場を体験することで、看護の仲間入りを実感できるという期待が込められている。約１週間の実習であるが、学生が臨床現場での看護体験によって看護のイメージを具現化させ、学習の動機づけを行うとともに、看護職が活躍する場が広く存在することを知り、キャリアパスを視野に入れた自分の将来像に多様性をもたせることをねらいとした。体調の悪い学生が１名あったが、補習の実習を行わせた。

６）　基礎看護学実習

１年次後期後半

藤内 美保、伊東 朋子、石田 佳代子、秦 さと子、河野 優子、巻野 雄介、吉川 加奈子、江藤 由布子、西部 由里奈、山田 貴子、川野 明子、田中 佳子、松本 初美、石丸 智子、麻生 優恵、緒方 文子、樋口 幸、安部 真紀

既習科目の学習内容と実践が統合できるように実習前・実習後指導を入念に行った。患者１名を受け持つ本格的な実習としては初めての学習であるため、実習施設の看護部長による講話を依頼し、実習に対する動機づけをオリエンテーションで実施した。また３つの実習施設(17 病棟)での実習が望ましい形で展開できるように担当教員や学生の構成メンバーを十分に検討し、実習施設での備品・消耗品等の整備にも努めた。冬季という実習時期の問題もあったが、インフルエンザ罹患や風邪等による欠席はなかった。患者とのコミュニケーションの問題等で遅刻、欠席をして100％出席の病棟実習ができなかった学生が２名いた。

４　卒業研究

・嚥下反射機能に対する運動効果と血中 NO の関係
・看護師が実施する末梢静脈カテーテル留置の成功と不成功に関わる要因
・筋萎縮性側索硬化症患者の音楽による睡眠導入の効果−催眠レベル測定器(BIS)を用いた検討−
・ケール搾汁粉末溶解液の嚥下反射機能への影響
・筋萎縮性側索硬化症患者における光照射が睡眠に及ぼす影響の検討
・救急医療体制の地域特性の分析
　～救急救命センター充実段階評価と地理情報システム(GIS)を使用して～

３－７－９　看護アセスメント学研究室

１　教育方針

看護アセスメント学は、基礎看護科学講座に位置づけられ、人の健康問題を根拠に基づきアセスメントできる能力を養うことを目的としたカリキュラムを実施している。看護の基盤となる人間科学講座で教授された内容との融合を図りつつ、身体的、心理的、社会的側面から看護学の視点でアセスメントできることがねらいである。現在教授している具体的な科目は、「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」「ヘルスアセスメント」「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」「看護アセスメント学実習」である。「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」では、主要な疾病の理解や病態の理解、さらに「ヘルスアセスメント」においては、看護師の五感を活用し頭部からつま先まで身体の観察ができる能力を身につけ、身体的なアセスメントができる知識・技術に加え、これらを踏まえて健康障害をもつ患者の看護過程の展開ができる基礎的能力を身につける。「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」は、看護過程の展開ができることを目的とし、講義および演習を組みわせて、知識の習得を段階的に行っていく。ペーパーペイシェントを通して個人およびグループワークでの看護過程の展開できる基礎的能力を養う。２週間の「看護アセスメント学実習」では、受け持ち患者と関わり、看護過程の展開を行い、専門看護学領域の基盤とする。

２　教育活動の現状と課題

看護アセスメント学研究室の担当科目は、１年次、２年次の履修科目が多い。基礎的な理論や科学的な見方、クリティカルシンキングなど、エビデンスを追及する姿勢とともに、看護への関心、喜びなど感性を高め、専門領域に繋げるという教育的役割があると考えている。平成 27 年度カリキュラム改正により、毎年、学生の学びの達成度を評価しつつ、授業の目標、授業構成、授業方法などの見直し改善を行っている。「看護疾病病態論」や「ヘルスアセスメント」などフィジカルに関する科目に引き続き、「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」など、人間の見方を身体以外の心理、社会面まで統合して人を包括的に捉えることの重要性を教授している。また「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」「看護アセスメント学実習」では、看護過程の理論を活用し、患者を理解し、よりよい看護実践ができることを目標としているが、看護過程の展開自体が主眼とならないよう指導が必要な場面もある。ヒトの構造や機能、病態との融合を図りつつ、人間を包括的に観る視点と分析的に観る視点をもち、エビデンスに基づく判断能力を身につけ、豊かな感性をもち患者をケアする実践能力を身につけるために、今後も改善を重ねながら取り組んでいく。

３　科目の教育活動

１）　看護疾病病態論Ⅰ

１年次後期前半
藤内 美保、石田 佳代子、田中 佳子
　平成 27 年度カリキュラムから講義２単位 20 コマで実施するため、内容の精選を行い、ポイントを絞った。主な疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療などを中心に講義形式で行う。感覚器系の眼・耳・鼻・皮膚、消化器、呼吸器、感染症、腎疾患を行った。各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。教科書は系統看護学講座シリーズを使用するとともに、進級試験の範囲である病気の地図帳、健康の地図帳を活用し、配布資料も提供して教授した。専門的内容が多いため、中間試験を実施して、知識の獲得ができるよう配慮した。

２）　看護疾病病態論Ⅱ

１年次後期後半
２年次前期前半
藤内 美保、石田 佳代子、田中 佳子
　主な疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療などを中心に講義形式で行う。脳・神経系、代謝・内分泌系、生殖器系、血液・造血器系、感覚器系の眼・耳・鼻・皮膚を行った。各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。教科書は系統看護学講座シリーズを使用するとともに、進級試験の範囲である病気の地図帳、健康の地図帳を活用し、配布資料も提供して教授した。専門的内容が多いため、中間試験を実施して、知識の獲得ができるよう配慮した。後期後半の途中に基礎看護学実習が行われるため、学生は疾患をしっかり学ぶ必要性を認識するようである。

３）　ヘルスアセスメント

２年次前期前半
藤内 美保、石田 佳代子、田中 佳子、松吉 晃子
　ヘルスアセスメントでは、身体的側面からの観察に主眼を置き、ヘルスアセスメントの意義、基本技術、健康歴聴取、消化器系、呼吸器系、循環器系、脳・神経系、運動器系のアセスメントについて、講義・演習を行った。講義と学内実習は、連続の時限ではなく間隔を設けて実施し、学内実習前に講義の復習をして臨むようにした。試験は、筆記試験と実技試験を実施した。実技試験は、呼吸器系、循環器系、消化器系、神経系の基本技術が確実に身に着くように事前課題を提示した。また、ヘルスアセスメントの最後に、既習の知識・技術を活用し、地域の高齢者のボランティアグループに協力を得て、フィジカルアセスメントの機会を設けた。高齢者とコミュニケーションをと

りながら、聴診器で肺音、心音、腸蠕動音を聴取、関節可動域の測定、瞳孔の観察などをして、正しい技術でフィジカルアセスメントし、正常・異常の判断など効果的に学んだ。

４）　看護アセスメント概論

２年次前期後半
藤内 美保、石田 佳代子
　看護過程の展開の基礎的能力を身につけるため、看護過程の概要、看護過程と基礎理論、アセスメント、看護診断、計画、実施、評価について、講義およびペーパーペイシェントによる個人ワークを行いながら、理解を確実にするよう努力した。個人ワークのペーパーペイシェントはイメージしやすい糖尿病事例を用い、身体面、心理面、身体面からのアセスメントが必要な事例で看護過程を展開させた。個人ワークでは必要な看護過程の展開となる記録シートを提出させ、一連の流れを学生１人でできるよう基本的な思考プロセスを学べるようにした。疾患の学習をしたうえで取り組む形式としている。

５）　看護アセスメント演習

２年次後期前半
藤内 美保、石田 佳代子、田中 佳子
　看護過程の基本的知識を活用するために、１グループに５名～６名でペーパーペイシェントによる看護過程を展開させた。事例は、乳がん、肝硬変、白血病の３事例とし、病名や発達段階、性別、それぞれ異なる看護診断が導けるような事例を作成した。学生は既に個人ワークで看護過程の展開を行った上で、グループワークで検討させ、グループメンバーとディスカッションすることで視野が広がり、理解が深まるようにした。中間発表会と全体発表会を３グループに分けて、前半は、前述の３事例のうち同事例でディスカッションする形式とし、後半は異なる事例でのディスカッション形式とした。患者の全体像やアセスメントの深まりは確認できたが、病態を踏まえた考え方が課題であった。看護アセスメント学実習で担当教員となる教員への発表会に参加を促したり、記録物を配布するなどして、学生のレディネスを把握することで、実習指導の際の参考になるように配慮した。

６）　看護アセスメント学実習

２年次後期後半
藤内 美保、石田 佳代子、伊東 朋子、秦 さと子、麻生 優恵、足立 綾、石丸 智子、江藤由布子、川野 明子、後藤 成人、佐藤 愛、田中 佳子、中釜 英里佳、西部 由里奈、巻野 雄介、松本 初美、

山田 貴子、吉川 加奈子

１名の受け持ち患者を持ち、看護過程を展開する基礎的能力を身につけることを目的にした。県立病院８病棟、大分赤十字病院７病棟、アルメイダ病院４病棟の計 19 病棟に６～７名の学生を配置した。１年次の基礎看護学実習で配置された同じ病院で異なる病棟に配置をした。個人差やグループ差は見られたが、全員が実習目標を到達した。病態の理解やアセスメントでは、さらに努力が必要であるが、看護実践や実習態度は、評価が高かった。実習中はインフルエンザの罹患者はなかったが、病院で流行があり、当該病棟の実習学生はタミフルを予防的に服用して実習を継続した。

４　卒業研究

・避難所における透析患者のアセスメント
　－看護師が重要視することと保健師に期待すること－
・プライマリケア領域の診療看護師（NP）の活動の効果に関する文献検討
・在宅看護における診療看護師（NP）の褥瘡のアセスメントと対応
　―2 症例の質的分析から―
・Ａ看護系大学生における問題解決能力
　－学年間の比較とその影響要因の検討－
・東日本大震災で被災した子どもに対するこころのケアの内容とその意義に関する文献検討

３－７－10　成人・老年看護学研究室

１　教育方針

成人・老年看護学は、成人期・老年期の対象への看護実践に必要な専門知識・判断能力・援助技術を習得することを目標としている。そのため、成人看護学概論、老年看護学概論、成人看護援助論・老年看護援助論、成人・老年看護学演習、成人・老年看護学実習の各教科を設定している。概論では成人老年領域の発達段階や保健に関すること、理論について学び、援助論では専門的知識を習得するとともに、実践する力を養うために、担当教員以外に臨床で働く様々な医療職者を学外講師として招き、援助方法を学ぶことができるようにしている。さらに成人・老年看護学演習において、健康段階の特徴をとらえられるように、急性期・慢性期・終末期の模擬事例へのケアについて考え学びを深め、ロールプレイを通して関連の看護技術習得する機会を取り入れている。最終的に、成人・老年看護学実習では、医療機関や老人施設において、知識・技術・態度を統合した看護の実践を学べるように組み立てている。

２　教育活動の現状と課題

成人・老年看護学は青年期から老年期までの長いライフスパンにある対象者への看護の学びであり、学習範囲は非常に広範囲にわたっている。そのため限られた時間数の中での学習内容と方法を吟味しながら展開している。成人・老年看護学概論では基礎となる対象者の理解と看護について学生が考えることが必要であり、対象者を理解するための理論を主体的に学習し思考を深められるようにしている。また、成人・老年看護援助論や成人・老年看護学演習では、幅広い年齢層の対象理解や多様な疾病とその治療方法や援助方法の理解を助けるために、具体的な事例、機械器具を提示し臨床経験のない学生の関心と学習意欲を高め印象に残る講義をするようにしている。講義や試験などの質問対応、解答等の時間確保が例年と同様の課題であり、学生との通信ネットワークを用いた対応などフィードバックを強化することに今後も取り組んでいく。

３　科目の教育活動

１）　成人看護学概論

２年次前期前半
小野 美喜

成人期に生じる多様な健康問題と対象へ看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける成人期の位置づけと特徴を発達課題・行動、健康の側面から総合的に理解し、看護を実践していく上で基盤となる知識を教授した。特に中範囲理論を学習し、成人の理解と看護アプローチの学びを深めた。

２）　老年看護学概論

２年次前期前半
大下 敏子

老年期に生じる健康問題と看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける老年期の特徴、健康問題をもつ高齢者の身体的、心理的、社会的問題を理解し、慢性疾患や機能障害を持ちながら日常生活を送る対象への看護援助に必要な知識を教授した。学生が高齢者体験セットの装具を着け、老年期の身体的変化や不自由さの体験を授業に取り入れた。また、医療・看護・介護・福祉など幅広い分野における情報を学ぶため、新聞・雑誌などから「スクラップブック」を作成する課題を設けた。学生は熱心に取り組み、医療保健政策の変遷、医療・看護・介護の実態や新情報を学ぶことができ、好評であった。老年期と死は切り離せないものである。学生のうちから自分なりの死生観を持つことは看護を目指す者として必要であるため、死生観に関するレポートを課題とした。死生観はこれまでに考えることがほとんどなかった学生が多くいたが、この課題により学習

効果もあがった。死生観とスクラップは今後も実施すとよいと思われる。

３）　成人看護援助論

２年次前期後半

小野 美喜、大下 敏子、松本 初美、甲斐 博美、中釜 英里佳、河野 優子、西部 由里奈、川野 明子

成人期にある対象者の特性をふまえ、特徴的な健康障害時の急性期、慢性期、回復期、終末期の各期における看護援助方法を学ぶことを目的とし、これまで学んだ障害や疾病の知識を土台に科学的な看護実践のために必要な知識と技術を身につけられるよう講義を行った。内分泌系・代謝異常のある患者の看護援助では学内実習を行い、血糖測定・インスリン注射の実際を学ぶ機会を設けた。成人への指導（術後隊員指導・食事指導）に関しては、事例を検討し指導の実際を個人とグループ学習を用いて学んだ。

４）　老年看護援助論

２年次後期

小野 美喜、大下　敏子、松本 初美、甲斐　博美、中釜 英里佳、河野 優子、西部 由里奈、川野 明子

老年期にある対象者の特性をふまえ、特徴的な健康障害時の急性期、慢性期、回復期、終末期の各期における看護援助方法を学ぶことを目的とし、これまで学んだ障害や疾病の知識を土台に科学的な看護実践のために必要な知識と技術を身につけられるよう講義を行った。ADL 障害のある高齢者への看護援助では学外講師として理学療法士・職業訓練士を、地域包括ケアアプローチと看護に関しては、保健師や介護老人保健施設で働く診療看護師を招いた。緩和ケアに関してはホスピスに働く看護師を招いた。学生は実際の現場で働く医療・看護・多職種の専門家より授業を受け良い学びへとつながった。事例検討としては、認知症・独居高齢者・ADL 低下・感染症予防について、個人・グループワークによる学びの共有を図った。

５）　成人・老年看護学演習

３年次前期

小野 美喜、大下 敏子、甲斐 博美、中釜 英里佳、河野 優子、西部 由里奈、川野 明子

学生の臨床実践能力の向上を図るため、成人期および老年期の人々を対象に、健康問題に応じた看護過程の展開と看護の方法を学ぶことを目的とした演習を行った。成人期、老年期の特徴を踏まえ、臨床の場で様々な健康問題を持つ、急性期、慢性期、終末期の対象者に必要な援助を計画し、

看護過程の展開の中で援助技術を練習できるように演習を行った。成人看護学演習では、周手術期のペーパーペイシャントを用いて看護過程を展開し、模擬患者への健康問題の査定や個別性のあるケアプランの立案、および実践、評価についても学生が自ら主体的に取り組むことができるように演習を行った。老年看護学演習では、高齢の認知症のペーパーペイシャントを用いて、アセスメントや必要な看護について学び、グループによるロールプレイなどを通し学生間の学びの共有を図った。

６）　成人看護急性期実習

３年次前期後半・後期前半

小野 美喜、大下 敏子、松本 初美、中釜 英里佳、河野 優子、西部 由里奈、巻野 雄介、田中 佳子、石丸 智子、川野 明子、麻生 優恵、山田 貴子

成人看護急性期実習は、急性期・回復期にある患者の看護の特性や看護実践を学ぶために総合病院で実習を行った。今年度より大分日赤病院が新たに実習病院となり、従来の大分県立病院および大分市医師会立アルメイダ病院と合わせて３施設での実習となった。これにより、１病棟当たりの学生配置は３～４名となり、担当教員の指導が行き届きやすくなった。実習期間は６週間の実習であった。教員の指導体制を原則常駐型とし、学生が看護スタッフとの連携を自らとるなど自律的な実践できることを目指した。実習指導者の理解も得られ、周手術期に関する実習指導が充実した。今後もチーム医療の中で学生が主体的に行動できるような指導方法を継続していく。

７）　成人・老年看護学慢性期実習

３年次後期

小野 美喜、大下 敏子、松本 初美、中釜 英里佳、河野 優子、西部 由里奈、巻野 雄介、田中 佳子、石丸 智子、川野 明子、麻生 優恵、山田 貴子

成人・老年看護学慢性期実習は、慢性期や終末期にある患者の看護の特性や看護実践を学ぶために総合病院で実習を行った。今年度より大分日赤病院が新たに実習病院となり、従来の大分県立病院および大分市医師会立アルメイダ病院と合わせて３施設での実習となった。77 名の学生が１部署４から５名体制で実習した。教員の指導体制を原則常駐型とし、学生が看護スタッフとの連携を自らとるなど自律的な実践できることを目指した。実習指導者の理解も得られ、学生に対する指導が充実した。本実習においては継続看護に興味をもつ学生も多く、今後もチーム医療の中で学生が主体的に行動できるような指導方法を継続していく。

８）　老年看護学実習

３年次前期前半

小野 美喜、大下 敏子、甲斐 博美、中釜 英里佳、河野 優子、西部 由里奈、巻野 雄介、田中 佳子、川野 明子、石丸 智子、後藤 成人、麻生 優恵、松吉 晃子

施設に入所している高齢者および通所している高齢者の生活の支援を通して、対象を理解し、保健・医療・福祉分野における看護職の役割と課題を学ぶ目的で、大分市内および由布市内にある介護老人保健施設５施設、介護老人福祉施設６施設の合計 11 施設において１週間の実習を行った。今年度より予防的家庭訪問実習（COC)がカリキュラムに導入されたため、老年看護学実習が１週間と短縮した。実習内容としては、重要度や優先度を考慮し、実習期間短縮により学生の学習効果が損なわれないよう指導した。各担当教員が巡回しながら指導にあたり、学生は臨地指導者との連携の下で実習を行った。高齢者の生活の質をとらえたリクリエーションの企画や実施などができた。実習最終日には学内でグループカンファレンスを行い、各施設での実践や学びを学生で共有する機会を設けた。

４　卒業研究

・看護系大学生が臨地実習において実施した患者教育と達成感
・外来化学療法を受ける患者のセルフケア支援の実際　～感染予防に着目して～
・看護学生が認知症高齢者を理解するために必要な実習場での経験・関わりについての文献研究
　～実習を通した看護学生の学びから～
・術後の高齢者の離床に対する意欲向上につながったと学生が感じた援助
・特養老人ホームで働く看護師の終末期における家族との関わり
・医療機関における身体抑制に対する看護学生の認識

３－７－11　小児看護学研究室

１　教育方針

小児看護学の講義と演習、実習を通して、発達過程にある小児の保健と小児看護の特殊性を理解することをねらいとしている。そのため、小児看護学では対象である小児の成長と発達について発達理論を学び、小児の健康の維持増進・健康障害の現象に対する家族を包含する小児看護の特殊性について理解を深め、小児看護の看護過程の展開とそれに必要な援助技術を学ぶことが目的である。

小児看護学では、基礎看護科学講座で看護理論や看護技術を学んだ学生に対して、小児とその家族への関わりにおいて、小児看護の倫理を思考し小児看護の実践ができるよう成長することを期待して教育を行っている。学生が健康・不健康に関わらず小児とその家族への援助者としての態度を身に

つけ、肯定的な子ども観を構築できるよう配慮している。

2　教育活動の現状と課題

小児看護学の講義は、２年次前期に 15 コマ１単位で行う小児看護学概論と、３年次前期に２単位 30 コマの小児看護援助論と 20 コマの小児看護学演習を行った。概論では小児を取り巻く保健、福祉、看護などの課題を学ぶ。学生が自分自身の「子ども観」をレポートし、自己の子ども観を認識するように工夫している。3 年次前期はより小児看護の専門的な講義と学内演習を通して、学生は多くの小児に関する学びを深める。後期は、それまで学んだ専門的知識を臨地実習で実践し、看護場面に知識を応用する。初めて学生は対象である小児とその家族と出会い、小児看護とは何かを悩みつつ、看護職あるいは大人としての役割を意識し、看護活動ができるように成長するようにカリキュラムを構成している。

最近は兄弟姉妹との経験や周囲に子どもがいない、また子どもに接したことがないという学生が少なくない。講義では視聴覚教材を多用して、動的な子どものイメージを持つことができるように配慮している。毎回の講義終了後に、講義内容に対する質問や意見を求め、次の講義時間に質問に答え、学生の疑問を残さないようにしている。学生は欠席も少なく意欲的に受講していた。終了時の評価は小児看護学の学習内容の定着のために小テストを行い工夫した。また、再試験を行いフォローした。

3　科目の教育活動

１）　小児看護学概論

２年次前期前半

高野 政子、草野 淳子

本科目では、小児看護の特質と概要、および小児の成長と発達を理解することを目的としている。基本的概念として小児の特徴を発達的にとらえ、小児と小児を取り巻く環境を考え、小児保健、小児医療の動向を述べ、教育や福祉の視点からも小児看護の役割と重要性について教授した。具体的な内容は次の通りである。1)小児看護学の変遷と小児看護の特殊性、2)世界の子どもの健康と医療、3)子ども観の変遷と子どもの権利、4)日本の母子保健・行政と母子福祉、家族と親子関係、5)小児の成長と発達総論、6)小児の形態・機能的発達、7)心理的・社会的・言語的発達である。８回～14 回までは、乳児から学童・思春期までの成長・発達について理論等を展開した。最終回は、学生のフィールドワークの親と子の観察レポートを発表して意見交換することで、子どもを意識的に観察するように動機づけを行った。

２）　小児看護援助論

３年次前期前半

高野 政子、草野 淳子、足立 綾

小児の発達過程の特質を理解するための主要理論に基づき、小児の行動を多面的に捉え、発達過程の応じた日常生活の援助方法と各期の保育と保健を講義し、援助技術の演習を行った。また、健康障害のある小児とその家族への援助方法を教授した。主な講義項目は、1)小児期の主要な発達理論、2)小児各期の発達アセスメント、3)乳児期、幼児期の保育理論と技術、4)学童期、思春期の保健と看護、5)病気の子どもと家族、6)小児の健康障害と看護、7)障害のある子どもと療養生活の援助、8)親子関係に問題のある場合の看護ほか。一方、看護過程の展開は、全員で発表会を開催し、グループワークで展開を完成した事例を２グループずつ発表し意見交換を行った。最後に筆記試験を行い評価した。

３）　小児看護学演習

３年次前期後半

高野 政子、草野 淳子、足立 綾

演習は２つの課題を設定した。前半は小児領域の主要な病態と疾患について講義形式で解説を行い、学生のグループワークによる主要な疾患と看護について調べ学習の作業とその発表という形式で実施した。また、後半は臨地実習でよく出会う事例を５事例提供し、グループワークで紙上での看護過程の展開について検討し、まとめてレポートして発表した。２つの課題を実施したが、学生は積極的な参加を求められる学生個々に事例展開を求め、グループワークを通して他のグループの発表に疑問を討論する方法で行った。真面目な取り組みが見られた。一部の学生が個人ワークを軽視する傾向もあり、グループワークに全員が取り組んでいるか、適宜グループワークに入り指導した。小児看護技術の演習は、大分県立病院小児病棟看護師４名を講師として招き、教員と共に援助技術として高機能シミュレータを用いてバイタルサイン測定の実施と技術小テスト、静脈点滴の固定、服薬介助や離乳食の実際などを指導した。指導の方法や内容は指導者間で統一して、20 名ずつの４グループに分けてローテーションする方法で指導した。学生と臨床看護師との相互関係が構築されるようにした。

４）　小児看護学実習

３年次後期前半

高野 政子、草野 淳子、足立 綾、佐藤 愛（6W）、緒方文子（6W）

小児看護学実習は、大分県立病院に１グループ学生８～９人で６グループ（合計 53 人）、別府発達医療センターに学生４～５人で６グループ（合計 25 人）配置とし、専任教員と担当教員と臨

床実習指導者の連携により指導を行った。学生１人に対象児１人の受け持つことを目指したが、在院日数の短縮化に伴い、実習期間中に２人の受け持ちする可能性を避けた。１人の子どもを継続できた場合は、学生が遊びの工夫などもみられたが、複数の子どもを受け持つことで看護実践まで到達した学生も少なくない。３日間の保育所実習は、７月末から８月第１週までに実施した。子どもの理解やコミュニケーションができるようになること、病児と家族への関わりがスムーズとなるので健康な子どもの保育は今後も必要と考える。実習の時期は夏季休暇最初に行うことが冬の感染の予防の視点からもよいと考える。

７日間のうち外来実習を半日行った。外来診療の場面に立会い子どもや家族の様子、外来看護師の指導のもと、子どもの発達に合わせた看護技術について学ぶことができた。実習では、受け持ち患児のバイタルサイン測定は全員が経験することができた。実習終了後、実習施設の実習指導者と専任、担当教員で実習反省会を持ち、意見交換を行った。学生の実習到達度や記録に差があると報告された。実習担当教員は実習中には学生を積極的に動機づけして実習を行うような指導を心がけて行えている。

４　卒業研究

・小児 NP の導入期２年間における臨床実践の適応プロセス
・小児 NP の活動に対する看護師・スタッフの満足度とその効果
・小児がん患児が入院中に原籍校とインターネット会議で交流したことによる復学後の効果
・小児の訪問看護に対する知識・技術の不足の認識－訪問看護師の調査から－

３－７－12　母性看護学研究室

１　教育方針

母性看護学では、女性のライフサイクルおよびマタニティサイクルにある妊娠・分娩・産褥・新生児の生理・病態と母子およびその家族への援助の理論と方法について学ぶことを目的としている。科目は母性看護学概論、母性看護援助論、母性看護学演習、母性看護学実習で構成している。特に母性看護学実習は周産期に重点をおいて実習を展開している。

２　教育活動の現状と課題

母性看護学では、学内で学んだ理論と技術を実習で実践し、理論と実践を結びつけることを目標としている。母性看護学実習においては、男子学生の増加によりグループ編成が困難になってきたこと、対象受け持ち患者が少なくなっておりペアーで１例の事例を受け持つことが多くなってきたた

め、平成 24 年度から施設を増加して 3 カ所とした。受け持ち患者の症例は正常褥婦だけでなく、帝王切開術後の褥婦や入院中の妊婦も受け持ち対象者としている。実習施設を３カ所にしたことで１施設の学生数が４～５名となり充実した実習となっている。実習期間中の分娩数は施設によって異なり、施設によって分娩見学ができない学生もいるので、分娩件数の少ない施設での実習の工夫が課題である。

３　科目の教育活動

１）　母性看護学概論

２年次前期

林 猪都子、矢野 美紀、梅野 貴恵

母性看護学の基本概念および意義を理解し、人間の性と生殖の側面から、女性の生涯を通じた健康生活の促進と健康問題への援助活動を学び、母性各期における母性看護の役割と重要性について認識を深めることをねらいとして、母性看護とは、セクシュアリティ、リプロダクティブヘルス／ライツ、母性看護の変遷、母子保健統計の動向、母性看護に関する法律、母性看護の対象理解、ライフサイクル各期の健康と看護、リプロダクティブヘルスケアなどについて教授した。リプロダクティブヘルスケアはグループワークを取り入れて、自主学習を進め、学んだ学習の中から課題を抽出し発表した。来年は講義回数が減少するので講義内容を検討して講義の充実に努めていきたい。

２）　母性看護援助論

２年次後期

林 猪都子、矢野 美紀、江藤 由布子

妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期の母子の生理的変化とその家族への看護について学ぶことをねらいとした。妊娠期では妊娠の生理・経過、妊婦の健康診査、母体と胎児の管理、妊婦への看護、妊娠の異常と看護、分娩期では分娩の生理・経過、産婦と家族への看護、分娩の異常と看護について教授した。TBL の学習法やグループワークを取り入れて、学生が自ら学習に取り組むようにした。

産褥期では、褥婦の定義や退行性変化や進行性変化などの生理的経過、産褥期の心理社会的特徴、母子相互作用などを示し、家族やソーシャルサポートを取り入れながら、経日的な看護について講義した。新生児期は、新生児の定義に始まり、新生児の子宮外適応過程の特徴、新生児という存在の特徴、母子関係などについて展開した。生命の尊さなども大切にし、母性看護学実習では大きな柱となるため、そこを視野に実習に即した事例など用いたり、視聴覚教材を活用したりして理解を高める工夫を行った。国師対策も自己学習として提示し、強化を図った。

３）　母性看護学演習

３年次前期

林 猪都子、矢野 美紀、江藤 由布子、樋口 幸、安部 真紀

母性看護の実践に必要な看護技術を理解し基本的技術を習得することを科目のねらいとした。講義回数は､看護技術演習５回とウェルネス看護診断に基づいた母性看護過程の展開 10 回の全 15 回であった。看護技術演習では、モデル人形を用いた妊婦腹部触診・計測、胎児心拍数陣痛図モニター装着、新生児計測や沐浴など母性看護を行う上で必要な看護技術の演習を実施した。母性看護過程の展開では、正常３事例、異常３事例をグループワークでまとめ、発表し学習内容の共有を図り、さらに、グループワークで担当しなかった事例について個別で看護過程を展開した。学生の取り組みは熱心であったが、基礎的な解剖生理学の知識が身に着いていなかったため、母性領域の事例についてアセスメントすることが難しい学生が多く見られた。

４）　母性看護学実習

３年次後期

林 猪都子、矢野 美紀、江藤 由布子、石岡 洋子、安部 真紀

母性看護学実習施設は３施設であり、実習期間は１グループ２週間（延べ 12 週間）であった。学生および教員の配置人数は、堀永産婦人科医院は学生４～５名配置（合計 27 名）、大分県立病院は学生５名配置（男子学生３名）（合計 30 名）、アルメイダ病院は学生３～４名配置（男子学生５名）（合計 23 名）、担当教員は各施設１名配置した。実習は学生１名につき妊婦または褥婦を１名受け持ち、妊産褥婦、新生児の看護について学び、母性各期の特性とニーズに応じた看護過程の展開を学習した。すべての学生に生命の誕生の場面を通して自己を振り返る実習を期待し、母性各期の保健指導をそれぞれ工夫して取り組むように努力した。本年度は１週間に１回帰学日を設けて、帰学日は記録のまとめや看護技術の見直し、最終カンファレンスの準備を行った。今年度は臨地実習時間を 15 時までに変更して学生の記録整理の時間を確保した。

４　卒業研究

・産後１か月と３、４か月における母親の身体・心理状態と産後ケアニーズの相違
・高校生におけるインターネット利用と性意識に関する研究
・女子看護大学生における冷え性と身体状況および生活習慣との関連
・高校生の子育て観と地域特性との関連
　－合計特殊出生率 2.0 以上の地域と 2.0 以下の地域を比較して－

３－７－13　助産学研究室

１　教育方針

大学院助産学コースは、助産師が専門職として社会に対して果たすべき役割について理解し、高度な周産期母子医療に対応するためにハイリスク妊産褥婦を含めた助産診断能力及び助産技術やリプロダクティブ・ヘルスを推進するために女性の性と生殖に関わる健康問題に対応できる能力を修得し、他職種との連携や協働、社会資源の活用を図ることができる助産師を育成することを目的としている。特に、高度な周産期母子医療、ハイリスク妊産褥婦への助産診断能力及び助産技術を身につけさせるために、体験型の演習や技術試験を取り入れている。また、本年度から臨地実習における多重課題へのアセスメント力・実践力を強化するために、特論科目にも段階的 OSCE を取り入れた教育を実施している。さらに、大学院修了の専門職業人として旺盛な探究心や豊かな人間性を身につけることを目指している。

２　教育活動の現状と課題

大学院助産学コースは、昼間に助産学専門科目、夜間に共通科目を履修することにしている。１年次の前期・前半は、昼間も夜間も講義・演習があり課題レポートが重なるなど、体力的にモチベーションを維持することが困難な場面もみられたが、学生同士で励ましあい工夫して学修している。後期は、実習場での学びを学内で振り返り、対象に応じた助産ケアを教員の指導を受けながら思考することができている。本年度から取り入れた段階的 OSCE により、臨地での多重課題に混乱する場面はみられず助産過程を展開できた。２年次生は、５月から７月にハイリスク妊産婦ケア実習と分娩介助実習を履修している。今年度の１学生の分娩介助例数は、12 例であった。本年度は４週目に帰学週を設け、休養と前半の実習の振り返りを行うことができ、助産過程の展開は、無理なく終了することができた。９月以降は、地域で生活する母子の支援や助産所助産師の自律した助産ケアの実際を経験し、修了後の助産師活動をイメージすることができた。課題研究は調査の実施が９月以降となり、データの解析、論文作成の期間が短かったにもかかわらず全員提出し、３月に報告した。７月の国際学会で発表する予定である。今後は、大学院生としての思考力、自己学習力を養い人間関係スキルを向上させるための方略を検討しながらカリキュラム全体を見直していく。

３　卒業研究

・日本人女性の更年期症状に対するホルモン補充療法と漢方療法の文献検討
　―1990 年代と 2000 年代の比較―
・生後１か月までの予防的スキンケアが皮膚バリア機能に与える影響
・ベビーオイルの脂質過酸化と保存条件及び UV 照射の関連
・助産師が行うやせ妊婦への保健指導の実態
・父性意識の形成・発達に関する文献研究―妊娠期における父性意識に着目して―

３－７－14　精神看護学研究室

１　教育方針

学部教育では、1)精神科領域での看護だけでなく他のさまざまな場で心に焦点を当てた看護を行うこと、2)看護の対象者の症状や疾病だけでなく、社会参加・自己実現や生きにくさに焦点を宛てた看護を行うこと、3)対象者だけでなく看護者自身の心や治療的人間関係に目を向けること、および 4)医療のみならず保健・福祉サービスとの連携を意識することを強調している。講義・演習・実習は、上記の目標に必要な視点、知識、技術、態度を獲得するための、一連の流れとして構成している。また卒業研究に関しては、できるだけ各学生の関心に沿ったテーマで研究を進められるよう配慮している。

２　教育活動の現状と課題

講義では、心の健康と疾患、精神医療・精神看護の歴史と現状、治療的環境と看護の役割、社会と精神看護の関係などについて、具体的な事例や視聴覚教材を紹介しながら学生にイメージを把握させるよう努めている。演習は、紙上事例演習、グループワーク、体験的学習、実習施設や家族会・NPO のスタッフによる活動紹介などで構成し、続く実習への準備性を高めることを狙っている。実習では、学生が自らの不安も含めて自己を振り返ることや、相手について、互いの関係性について振り返ることを奨励・支援している。精神科病棟での実習期間を短縮し、代わりに福祉サービス事業所での実習を導入して三年目となった。地域で生活する精神障がい者について理解を深め、およびこれとの比較で入院患者の退院後の生活について想像力を働かせるという目標はある程度達成できているが、不足している部分を補うには新たな実習施設の開拓も必要である。卒業研究に関しては、学生の希望と計画の実現性をすり合わせながら進めることができており、学生の満足度も高いが、課題を一人で探索しようとして行き詰まってしまう傾向にあったので、課題探索の支援を強化する必要がある。

３　科目の教育活動

１）　精神看護学概論

２年次後期
影山 隆之
　精神健康の概念、精神疾患と病態、治療の構造と方法、精神医療・精神看護の歴史と法制を中心に、印刷配布資料と映像教材を多用して講義を行った。次年度から時間数が少なくなるのに備え、濃密な授業展開とし、資料の末尾に復習すべき重要箇所を明示した。出席確認を兼ねた授業中の小レポートに加え、無記名で提出できる感想・質問カードを用いたが、授業展開が早いためか応答が少なかったので、学生コメントの収集に工夫が必要である。

２）　精神看護援助論

３年次前期前半
杉本 圭以子
　学生にとってイメージしにくい精神看護の目標と役割を考えることを科目を通して心がけ、視聴覚教材、実例を多用し講義した。精神科看護における安全管理、権利擁護をはじめ、精神看護におけるアセスメント、援助技法、各精神疾患に対する看護、地域での生活を支える援助を中心に学んだ。
　毎時、学生が記入できるワークシートを使用したことと、授業の振り返りを記入した内容をまとめ、次回の授業の開始時に配布し全員で読み返し感想を述べることで授業への参加を求めた。全体を通して授業内容への関心を高めるよう工夫した。

３）　精神看護学演習

３年次前期後半
影山 隆之、杉本 圭以子、後藤 成人
　紙上事例について精神看護アセスメントを行い、事例の理解や看護計画について討論する演習を行った。自己理解、対象者理解、関係性の理解を深める方法を学ぶために、プロセスレコードを用いた自己一致に関する演習を行った。精神障がい者のための福祉サービス事業所でも実習を行うため、関連施設スタッフや家族会メンバーによる特別講義を行った。学生の提出物から判断して、学生の興味・関心・疑問などを高めることができたものと推察される。

４）　精神看護学実習

３年次後期前半

影山 隆之、杉本 圭以子、後藤 成人、佐藤 弥生、吉川 可奈子

前年同様、１週間は大分丘の上病院、もう１週間は４つの福祉サービス事業所に学生が分散して実習を行った。病院では、全日病棟で実習を行い、学生がそれぞれ一人の患者を受け持って、全人的な理解とアセスメントおよび患者に行われている看護の理解に向けて指導を受けた。また、プロセスレコードやカンファレンス等を通じて対人関係における自己の特徴について実際的に学んだ。福祉サービス事業所では、利用者に混じって各種のプログラムに参加し、精神障がい者が社会で生活できるための条件、そのために必要な援助、リハビリテーションのニーズを把握するためのアセスメントなどの実際を見て学んだ。さらに、実習最終日を帰学日とし、二つの場での学びを統合するための最終カンファレンスを行った。実習全体を通して、病棟実習の期間の短さのためか、実習に消極的な学生が目立った。また、最終カンファレンスでも異なる場で異なる体験をした学生同士の情報交換は活発であったが、それらを統合して言語化する作業が不十分な学生もいた。次年度は実習施設を増やし、病棟で実習を行う日数も増やす予定であるため、事前学習で準備性を高めることや、カンファレンスの持ち方、ファイナルレポートの課題設定も改善し、学生が自立して積極的に実習を行えるようねらい・目的・目標も再調整する。

４　卒業研究

・発達障がいをもつ児童生徒を支援するための養護教諭の役割に関する文献研究
・高校生のセクシャルマイノリティに対する意識調査
・緩和ケア病棟における看護師の精神的ケアの内容と看護師からみた評価
・精神障がい者家族が医療者から言われて良かったことと辛かったこと
　―家族会メンバーへのインタビューから―

３－７－15　保健管理学研究室

１　教育方針

学生が地域社会で生活する人々の健康を支える看護職者に必要な知識と技術を習得できるように教育を行った。また、学生が自律した学習態度を身につけるため、主体的に取り組める教育方法を積極的に取り入れた。保健管理学研究室の教育全般として、４年間の看護師教育に相応しい講義、演習、実習の内容を検討のうえ該当科目において学生が深く学べる教育を重視した。保健福祉の社会システムをはじめ、在宅におけるケアマネジメントや看護管理のマネジメント等、地域社会で生活する人々の多様な健康ニーズにあわせた看護を提供できるよう科目ごとに教育を行った。特に、地域包括

ケアシステムやケアマネジメントについては、在宅看護を強化するため、社会資源の活用や他職種との連携・共同など、幅広くマネジメント能力を育成する教育を進めた。

２　教育活動の現状と課題

講義では、最新の知識や情報を提供し、多様な人々の健康ニーズと社会の要請に対応できるよう教育内容や方法を検討してきた。３年次生の在宅護論では、１年次、２年次で学習した内容から、学生が在宅で療養する対象について具体的なイメージができるよう、実習で経験した事例をもとに計画を考えたり、演習を取り入れるなど学生が主体的に取り組める教育を行った。また、３年次生が４年次の実習を見据えて、地域の資源を活用したマネジメントができるよう、講義・演習内容を工夫した。学生がこれまで学んだ内容を応用し、自ら考えて看護を提供できるよう、さらなる学習方法の工夫が必要である。

３　科目の教育活動

１）　健康論

１年次前期

桜井 礼子、平野 亙

健康の概念と健康に対する考え方の歴史的変遷を理解し、健康の意味を考え、健康の維持・増進の重要性について学ぶことを目的とした。さらに人々の健康ニーズを把握し、健康増進活動における看護職の役割を認識するとともに、生活習慣と健康との関連を意識し、学生が自らの生活体験を通して健康を考え、また生活習慣を見直すきっかけとなるよう、健康日本 21 などの取り組みを交えながら講義を行った。

２）　保健福祉システム論

２年次後期

平野 亙

看護職にとって、社会資源に関する理解は不可欠であり、さらに社会保障が国民のいのち・健康と生活を守るための制度的保障であることを理解する必要がある。そのため、まず「生存権」について論じたのちに、社会保険、国家扶助および保健・医療・介護・福祉を内容とする社会保障制度の概要とその意義を論じた。高齢社会に求められている制度を中心に講義を整理し、できるだけ体系的に理解できるよう構成した。加えて、臨床におけるルールであるインフォームド・コンセント、個人情報保護、障がい論など、患者・障がい者の諸権利を保障するための基本事項について論

じ、専門職としての行動に必要な基礎知識を獲得できるようにした。

出席した学生の学習態度は良好であったが、出席率、とくに午前の授業の出席率が低く、講義出席への動機付けに課題を残した。

３）　健康支援論

３年次後期後半

福田 広美、平野 亙、佐藤 弥生、吉川 加奈子、佐藤 玉枝、赤星 琴美、緒方 文子、佐藤 愛

保健・医療・福祉の場において、看護職の視点から集団の健康問題に対して、保健活動のひとつである健康教育の展開方法とその実践力を養うことを目指した。健康教育が行われる場として、母子保健・学校保健・産業保健・高齢者などライフサイクルに応じた健康支援の場と対象者について、個人・集団・地域を対象として健康教育を考えることができるよう講義を行った。講義にあたっては、地域看護学研究室の教員と分担をして講義を行い、必要に応じて演習も盛り込んだ。後半には健康教育の演習を実施、地域、学校、産業などの保健活動の場での事例を用いて、それぞれの健康問題を明確にして健康教育をどのように行うか、グループワークによる作業を行った。発表は、各事例についてすべてのグループが教育場面のロールプレイを含むプレゼンテーションを行い、ディスカッションを通して考えることができる場とした。学生は、健康教育の対象となる個人および集団の特性を現実的にとらえアセスメントすることや、様々な条件を考慮して教育プログラムを考えるといった点について、グループワークの過程で学習できていた。また、発表会での討論ではポイントをおさえた質疑が出され、活発な意見交換ができ、学びを深めることができていたと考える。

４）　予防的家庭訪問実習

１年次

全学教員

１年次の実習目標に沿って、予防的家庭訪問の対象者とコミュニケーションをとり、他の学年とも協力しながら対象者の理解を深めた。６月から家庭訪問を行い 11 月から１月にかけて、地域交流会を行い、実習の学びを発表した。

４　卒業研究

・発達障がい者支援専門員の活動評価と保護者のニーズ
・地域在住高齢者の保健行動と健康感に関する研究
・訪問看護ステーションの服薬支援における災害時の備えの現状
・地域包括ケアシステムの構築に向けた病院の看護管理に関する調査

３－７－16　地域看護学研究室

１　教育方針

看護を展開する対象として個人・集団・地域へと視点を拡大し、地域全体を包括的に捉えた看護活動を行うために必要となる基本的な思考力を身に付け、支援方法を学ぶことを目的とし、地域看護学概論、家族看護学概論、地域看護学実習を展開している。特に地域看護学概論では、保健所や市町村で働く保健師の講義を取り入れ、地域看護活動の現状や課題について学習が深められるようにしている。担当科目および関連領域科目との講義と実習の連動性を考慮して、内容や展開方法に工夫を凝らしている。

２　教育活動の現状と課題

地域看護学概論の講義では、実践活動との連動性を重視し、保健所や市町村で働く保健師および多職種の連携の必要性が理解できるよう教授している。さらに、実習の場において個人・家族、集団、地域を対象とした具体的な看護展開ができるように、学内演習では実習場面を意識した事例を用いて、ロールプレイ等を行っている。地域の健康問題を踏まえた活動内容が理解できるよう、実際に学生が実習を行う市町村の既存の資料を基に、地域看護診断を行っている。また、個人・家族を対象とした支援では、新生児の事例を基に、保健師が行う家庭訪問における看護過程の技術を展開することで、地域での看護活動の視点や具体的な支援技術について理解できるよう工夫している。今後も社会の変化に対応し得る看護支援を目指して、常に教育内容を繰り返し検討していく必要がある。

３　科目の教育活動

１）　地域看護学概論

２年次後期

佐藤 玉枝、村嶋 幸代、赤星 琴美、緒方 文子、佐藤 愛、藤内 修二、二宮 ちえ、木村 真由美、武石 綾美

地域における個人・家族、集団への看護活動を行うために、地域住民の主体性を重視し地域看護学の基本的な内容について講義をした。公衆衛生の概要や地域看護学の概念、プライマリ・ヘルスケアとヘルスプロモーション、地域看護活動の場と特性、地域看護活動の対象と方法（個人・家族、集団、地域社会）など地域看護の必要性を理解するために時間を十分にかけた。また、地域看護の変遷や大分県の地域看護活動についても教授することができた。常に資料やパワーポイント、DVDなどを活用することで学生が地域で活動する看護職をイメージでき、かつ、地域看護についての理解が深められるよう教授した。

２）　家族看護学概論

２年次後期前半
赤星 琴美、佐藤 玉枝、緒方 文子、佐藤 愛
　家族が主体的にセルフケア能力を高め、健康的なライフスタイルを獲得していくために必要とされる家族看護の基本的な考え方と支援方法について講義と演習を行った。内容は、家族看護学の概念、家族の機能、家族を理解するための諸理論、看護職の役割、家族看護過程、家族看護過程の演習である。特に家族看護過程の演習では、家族を一つのユニットとして捉えて支援するカルガリー看護アセスメントを取り上げ、その意義や方法が理解できるようにグループワークを行い、より具体的に看護過程の展開が学習できるよう工夫した。

３）　地域看護学実習

４年次前期前半
佐藤 玉枝、赤星 琴美、緒方 文子、佐藤 愛、福田 広美、平野 亙、佐藤 弥生、吉川 加奈子、桑野 紀子
　大分県下全域の保健所(保健部支所含む)10 か所、市町村保健センター及び支所 16 か所、支所配置５か所合計 31 か所の施設に、それぞれ２～４名の学生を配置し２週間の実習を行った。実習指導体制は、それぞれの施設の保健師が実習の現場で直接指導を行い、担当教員は各施設を巡回することで学生と実習指導者双方の状況把握を行いながら、中間カンファレンスや終了カンファレンスでの指導、記録物の指導などを行った。実習では、地域で生活する人々を理解すること、多職種との連携の必要性について学んだ。実習終了後、まとめ会を開催し、実習成果を学生間で共有した。

４　卒業研究

・地域特有の食文化と高血圧症との関連
・地域在住高齢者の残存歯数と会話満足度の関連性の検討
・保護者の食意識や態度　－父親に焦点を当てて－
・母親の育児力に影響する要因　－乳幼児を育てる母親へのインタビューを通して－

３－７－17　国際看護学研究室

１　教育方針

This program is designed for students to obtain knowledge to provide sensitive, competent and responsible care to people in different and similar community and countries in the world as well as acquisition of skills and attitudes for international nurse who can provide culturally sensitive caring to promote health and well-being. This program is designed for students to enhance capability to apply international nursing concepts and knowledge, and principles of transcultural nursing to health care setting. In addition, this program is designed for students to develop global leadership potentials and strong basis of professional identity in the global era. Further, this program is created for students to learn autonomous attitude toward their study and to cultivate vision for international nursing.

２　教育活動の現状と課題

Class is conducted in English. Students are required to present their group work and to ask questions and comment in English.

We provided students with current knowledge of international nursing to expand their knowledge regarding culturally competent care which can meet the need of people living in different and similar community and countries through lecture. Students had opportunities to engage in indirect international nursing experiences through special lectures on real experience associated with Red Cross activities, JICA activities, and NGO activities as well as actual situation of foreign patient care in Japan. We arranged either group discussion or watching DVD relevant to the content of lecture following each session.

Students had chance to collaborate not only decision of their topic but also presentation through group work.

Course evaluation was conducted to assess whether objective of the course is achieved and to improve teaching by both students and faculties.

It is expected for every student to participate actively in this class. This course will provide students with opportunities to apply international nursing knowledge to people living in different and similar community and countries in the world.

３　科目の教育活動

１）　国際看護学概論

２年次後期後半

Myoung-Ae Choe, N. Kuwano

Objectives;

1. To develop an understanding of nature and characteristics of international nursing.
2. To enhance knowledge regarding implication and strategies for international nursing.
3. To promote an understanding of risks to health and life in the world.
4. To facilitate acquisition of knowledge related to international organization.

Contents;

1. Orientation and Introduction to the Nature of International Nursing, definition, characteristics, aims and history
2. Main Nursing Concepts and Trends of International Nursing and Health -globalization of nursing, transcultural nursing, health care problems -
3. A Global Movement dealing with Global Issues, Implications and Strategies for International Nursing
4. Risks to Health and Life in the World. Introduction, Risk factors; poverty and environment, Mortality Causes
5. International forum
6. Risks to Health and Life in the World; poverty and environment factors. - based on NGO activities in Malawi
7. Overview of International Organization
8. Culturally and Linguistically diverse Patients in Japan

- Course evaluation
- Examination

２）　国際看護比較論

３年次後期後半

Myoung-Ae Choe, N. Kuwano

Objectives:

1. To enhance knowledge regarding MDGs, and health problems of each population group.
2. To promote an understanding of culture and transcultural nursing.
3. To facilitate acquisition of knowledge associated with human resources for global health care.

4. To expand knowledge related to global strategies for health for all.
5. To gain insights into international relief activities and foreign patient care in Japan

Contents;
1. Orientation
   Brief summary of international nursing, MDGs, population groups and health problems
2. Culture and transcultural nursing
3. International relief organization; Red Cross
   Special lecture; Red Cross activities
4. Global strategies for health for all
5. Human resources for global health care: development and planning
6. Global reproductive health & rights
7. International relief organization; JICA
   Special lecture; JICA activities
8. Actual situation of foreign patient care
- Course evaluation
- Examination

３） 国際看護学演習

３年次後期後半
Myoung-Ae Choe, N. Kuwano
Objectives:
The purpose of this course is to develop perspectives on national, regional and global health issues and strategies, to identify the roles and responsibilities of nursing in developing the strategic planning on nursing/health, and to the develop global leadership potentials.

1. Activities:
1) Orientation to the course activities;
   Grouping, decision of theme and topic of each group, role assignment of each member in one group, group work such as search the content through textbook and internet and discussion on the topic, preparation for presentation, making Power Point slides, and presentation.
2) Guidance for group work such as decision of the theme and topic, progress of group work, making Power Point slides.
3) Feedback for progress note and contents of presentation.
4) Evaluation of presentation

2. Group-works / studies: students were divided into 11 groups.
Each group decided their theme and topic for group work.
The following are themes for group-works / studies;
I. Health issues and strategies of a Nation/population group
II. Impact and context of the aid of JICA: of a Nation
III. Human resources for health / nursing of a nation / group of Nations

４　卒業研究

・大分県の大学で学ぶ留学生の異文化ストレスとその関連要因
Acculturative stress and related factors of university foreign students at Oita in Japan
・病院に勤務する日本人看護師の外国人患者に対する態度、経験、および文化的感受性
Attitudes and experiences regarding foreign patients and intercultural sensitivity of Japanese hospital nurses
・看護専門職に対する認識と将来のキャリアについての看護学生の考え
－日本と韓国を比較して－
Comparison of recognition on nursing profession and future career between Japanese and Korean nursing students

３－７－18　共通科目

１）　自然科学の基礎

１年次前期

甲斐 倫明、小嶋 光明、岩崎 香子、定金 香里、石川 純也、野津 昭文、佐伯 圭一郎、吉田 成一

自然科学の基礎として習得しておくべき基本的事項を学ぶ。高校までに十分に習得できなかった 項目を学ぶための講義であると同時に、自然科学の考え方を学ぶための内容を盛り込んだ。講義内容は次の通りである。1）生物：細胞とは、2）生物：DNA 構造・複製、3）生物：細胞分裂の仕組み、4）生物：遺伝の仕組み、5）生物：遺伝子から表現型へ、6）生物：タンパク質の働き、7）生物：免疫～遺伝子と生体防御システム、8）生物：発生、9）生物：エネルギー・酵素・代謝、10）生物：化学エネ ルギーを獲得する経路、11）生物：分子生物学・ゲノム、12）物理：電気と磁気、13）物理：力とエネルギー、14）物理：圧力・温度・相変化、 15）化学：物質の構造、16）化学：物質の反応、 17）化学：モルと濃度計算、18）化学：有機化合物の構造、19）数学:数学の基礎１、20）数学:数学の基礎２

２）　大学ナビ講座

１年次前期前半

藤内 美保、村嶋 幸代　平野 亙、甲斐 倫明、市瀬 孝道、影山 隆之、吉村 匠平、関根 剛、野津 昭文、安部 眞佐子

平成 27 年度カリキュラムから導入された新規科目である。１年次早期に開講することで、大学で学ぶために、リテラシーと呼ばれる身につけておくべき基本的な事項および技術を習得することを目的とした。

内容は、「大学とはなにか学ぶこと考えること」「本を読む」：文学・評論、新聞・報道、科学論文、「伝える技術」：文を書く・レポートを書く、話す・プレゼンする、質問する・議論する「メモの取り方」「図書館の利用法」「資料整理法」などである。直ぐに役立つ内容は早い段階で知りたかったという学生の意見があり、来年度の改善点とする。

３）　健康科学実験

２年次後期

濱中 良志、岩崎 香子、安部 眞佐子、市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里、甲斐 倫明、小嶋 光明、石川 純也、稲垣 敦

本健康科学実験は２年次生に実施しており、基本的な実験演習や測定を通じて、人の身体、健康に関係した事項や人間をとりまく自然環境に関する基本的な現象を体得し理解を深めることを目的としている。実験テーマは 11 テーマからなる実験を行った。1）解剖実習（担当者：濱中 良志、岩崎 香子、安部 眞佐子）、2）組織学実習（担当者：濱中 良志）、3）血液検査（担当者: 定金 香里）、4）基礎微生物学実習（担当者：吉田 成一）、5）ラットの解剖（担当者：市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里）、6）測定誤差と変動（担当者：甲斐 倫明）、7）放射線（担当：小嶋 光明）、8）染色体異常（担当者：石川 純也）、9）呼吸循環器系持久力（担当者：稲垣 敦）、10）心電図（担当者：岩崎 香子）、11）食物栄養学実習（担当者：安部 眞佐子）

４）　総合人間学

４年次後期前半

藤内 美保

さまざまな分野で活躍され、かつ造詣の深い講師のものの視方や考え方を通して、人間として医療者として備えておくべき豊かな知識と感性を養うことをねらいとしている。なお、本科目は公開講義とし、県内に広く情報提供し参加を促している。今年度から講義中に学びをレポートし講義終了後に提出することとした。

本年度の開講日、テーマ、講師を以下に示す。

第１回　９月 11 日 大学生の食育
　　弁当の日から始まる自水力そのⅡ　　比良松 道一
第２回　９月 18 日 おんせん県大分の観光戦略　　渡辺 修武
第３回　９月 25 日 アニマルセラピー
　　「人はなぜ動物に癒されるのか」　　井上 昭二
第４回　10 月２日 うれしい絵本の読み聞かせ　　坂口 慶
第５回　10 月９日 介護サービスのイノベーション
　　介護しないおとなの学校の挑戦　　大浦 敬子
第６回　10 月 16 日 大学生のためのライフデザイン講座
　　知っておきたい「仕事」「結婚」「出産」のこと　　白川 桃子
第７回　10 月 23 日 心が通う言葉とコミュニケーション　　松井 督治
第８回　10 月 30 日 世界で闘う　　吉岡 紀子

３－７－19　統合科目

１）　看護管理学概論

４年次後期前半
福田 広美、伊東 朋子
　看護管理の概念を理解し、看護を提供するための「しくみ」について学び、看護職として看護実践のマネジメントについて考えることを主なねらいとした。看護の対象となる人々に有効で良質な看護を提供するための方策である看護管理システムの諸相を学び、管理の概念と看護管理の変遷を振り返りながら、看護領域独自の看護管理のあり方を学び、組織の一員としての関わり方を理解することを目標とした。昨年度から看護管理学入門を担当し、すでに学習した内容も含まれているが、系統的に看護管理について教授した。次年度は、４年次後期から前期の講義となり時間数も増えることから、看護を実践するにあたって必要なマネジメントについて、実践的な課題を考えられる機会となるよう、講義内容を検討していきたいと考えている。

２）　看護の倫理

２年次後期
平野 亙、小野 美喜
　看護職に必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的規範に基づく判断のための思考訓練を行うことを目的に講義を行った。講義は、「Bioethics・生命倫理の展開と課題」・「倫理的判

断の方法」・「Profession の責任と倫理」・「生殖と誕生にかかわる倫理」・「生と死のかたちに関わる倫理」・「医療従事者の事故対応と責任」・「人間の尊厳、個人の尊重と自立支援」の７回を平野、「看護職の価値観と文化、社会規範」を小野が担当した。講義の中で、「ケースブック医療倫理」（医学書院）をテキストに事例演習を行った。また講義時間中にミニレポートを課して講義内容の整理と出席管理を行い、ミニレポートの提出と個人課題レポートにより成績評価を行った。

今後の課題としては、学生に予習の習慣がなく、また講義時間数の制約もあって少人数での討論が形成できないために、事例演習が双方向的な討論の場になりにくいことがあげられる。

３）　看護と遺伝

３年次後期後半

市瀬 孝道、定金 香里、岩崎 香子、松田 貴雄、濱口 和之、井原 健二、川野 由紀枝

講義前半でメンデル遺伝の仕組み、遺伝子変異、遺伝疾患の発現や体質、多様性について講義し、単一遺伝子疾患の遺伝メカニズムを理解できるよう配慮した。講義後半では、臨床遺伝でよく遭遇する疾患について家系図を踏まえて次世代への遺伝病継承について考えた。

さらに出生前診断や遺伝子カウンセリングの実際を例を挙げながら概説し、将来、看護師として遺伝的問題を抱えた対象者へのかかわり方を想起させた。

４）　災害看護論

３年次前期後半、後期後半

石田 佳代子、福田 広美、佐藤 玉枝、佐藤 弥生、松 久美

地域や病院等における健康危機管理と災害時の対応について理解し、地域や病院等における災害看護のあり方、考え方とその実際を学ぶことが目的である。講義では、災害の定義、種類、法律、制度、災害サイクル各期における特徴と看護活動、病院における初動体制、災害時要援護者への支援、在宅療養患者に対する災害看護活動など、災害および災害看護に関する基礎的知識の習得に重点を置いた。演習では、日本 DMAT（看護師）による指導の下で、災害時に必要な技術であるトリアージ（START 法）の習得に重点を置いた。また、災害発生時を想定したシミュレーション・シナリオに基づいた机上訓練を行った。最終日に筆記試験を実施した。

５）　第１段階看護技術演習

２年次後期後半

石田 佳代子、赤星 琴美、足立 綾、石岡 洋子、江藤 由布子、河野 優子、後藤 成人、佐藤 弥生、秦 さと子、田中 佳子

第１段階看護技術演習の目的は、対象への日常生活援助を一人で実施できる能力を身につけることである。基本的な手順だけではなく、患者にとっての安全や安楽などについても学生同士で考えてロールプレイを行い、援助全体を評価する能力を養った。

例年通り、担当教員が３～４名の学生を指導し、最後に技術チェックを行う方法で実施した。

１）９月下旬　学生オリエンテーション

２）10～12 月上旬　事例に応じた援助技術の練習（生活援助を中心とした７症例）
　担当教員による個別・グループ指導

３）12 月中旬　援助技術の評価（担当教員による技術チェック）

６）　第２段階看護技術演習

３年次前期後半

石田 佳代子、赤星 琴美、足立 綾、石岡 洋子、江藤 由布子、河野 優子、後藤 成人、佐藤 弥生、秦 さと子、田中 佳子

第２段階看護技術演習の目的は、対象への安全・安楽に配慮し、専門領域別の基礎看護技術の実践応力を身につけることである。対象への日常生活援助を一人で実施できる能力を身につけることである。基本的な手順だけではなく、患者にとっての安全や安楽などについても学生同士で考えてロールプレイを行い、援助全体を評価する能力を養った。

例年通り、担当教員が３～４名の学生を指導し、最後に技術チェックを行う方法で実施した。

１）６月中旬　学生オリエンテーション

２）６月下旬～８月　援助技術の練習（専門領域別の援助技術、診療の補助技術を中心とした７症例）、担当教員による個別・グループ指導

３）９月上旬　援助技術の評価（担当教員による技術チェック）

７）　第３段階看護技術演習

３年次前期

石田 佳代子、赤星 琴美、足立 綾、石岡 洋子、江藤 由布子、河野 優子、後藤 成人、佐藤 弥生、秦 さと子、田中 佳子

第３段階看護技術演習の目的は、これまでに学んだ基礎看護技術を、E-ラーニングにより主体的かつ計画的に再学習することで、総合的に能力を高めることである。

例年通り、看護技術習得確認シートの卒業時到達目標 AA の看護援助技術 46 項目の強化を図った。

１）４月中旬　学生オリエンテーション

２）４下旬～９月　E-ラーニング（ナーシング・スキル 46 項目に対応した Web 上に提示されている

31 課題の「テスト」の実施）による知識確認、援助技術の練習
３）９月末　レポート提出
４）予防的家庭訪問での援助の実施、レポート提出

８）　在宅看護論

３年次前期、後期後半
福田 広美、平野 亙、佐藤 弥生、吉川 加奈子
疾病や障害をもちながら地域で生活する人々とその家族に対して、在宅看護を行うために必要とされる基本的な考え方や援助方法を理解することをねらいとした。３年生が、２年次の看護アセスメント学実習と老年看護実習の体験をもとに、できるだけ在宅でのイメージを持つことができるよう事例を示しながら教授した。また、４段階実習終了後の後期後半では、外部講師を招き、「在宅酸素療法」、「認知症者の看護」について現場の様子をイメージできるよう講義を行った。

９）　在宅看護論実習

４年次前期
福田 広美、平野 亙、佐藤 玉枝、赤星 琴美、桑野 紀子、佐藤 弥生、緒方 文子、佐藤 愛、田中佳子、吉川 加奈子、松吉 晃子、麻生 優恵
在宅看護論実習は、訪問看護ステーションでの実習を通して、在宅で療養する人々とその家族を対象に、継続した看護が提供されるよう、社会資源を活用したケースマネジメントを行い、訪問看護の必要性と援助方法の実際、様々な機関や他職種との連携・協働について理解することを目的とした。２週間の実習で事例を受け持ち、看護過程を展開し看護計画に基づいた実践と評価までを行った。また、訪問看護師に同行させていただき多くの家庭での訪問看護を体験させていただくことができた。これらの体験を通して、在宅看護における訪問看護師の役割や他の職種や機関との連携、また対象者本人と家族に対する個別的な看護の重要性について学ぶことができていた。今後は、地域包括ケアとケアマネジメント、在宅医療・介護の連携などにも焦点をあてた実習を組み立てていきたい。

10）　**総合看護学実習**

４年次前期
看護系教員全員
総合看護学実習の目的は、主体的に実習課題を設定し、看護基礎教育における学びを統合しながらチームの一員として看護を提供するための総合的な看護実践能力、看護の質を保証するマネジ

メント能力、および看護専門職としての自律性を養うことである。本実習の特徴は、計画から実施・評価までを学生が自律的に取り組む点にある。

１）３年次２月上旬　実習ガイダンス
２）３年次２月中旬　大分県内の 37 ヶ所の実習施設の中から希望施設を選択
　　実習施設の調整と決定
３）３年次２月下旬　実習オリエンテーション
４）３年次３月～４年次６月実習前　実習計画作成
５）６月 22 日～７月８日　実習施設における実習
６）７月９日、10 日　発表会準備および発表会（学内実習）
７）レポート提出、担当教員との面談など

今年度より、発表形式をグループ討議形式からポスター発表へ変更し、学生間での意見交換が活発に行えたと考える。来年度は、マネジメントについて学べる機会（複数対象者に看護を提供する、夜間帯実習、チームリーダーや看護管理者に同行するなど）をより増やしてマネジメント能力を養えるように、大学教員と施設指導者が連携して、学生の目標達成を意図的に支援できるように働きかけることが、運営上の課題である。

11）　看護スキルアップ演習

４年次生後期
伊東 朋子、佐藤 弥生、矢野 美紀、緒方 文子、山田 貴子、足立 綾、西部 由里奈
基礎看護教育の総仕上げとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を有機的に統合し、適切なアセスメント能力および看護技術を提供できる能力を養うことをねらいにして、学生の学びと教職員が円滑に指導展開できるように調整・準備した。
具体的には医療・保健現場において遭遇しやすい事例（成人老年看護学領域：呼吸器疾患、循環器疾患、運動器疾患、小児：気管支喘息、母性：切迫早産、在宅：ターミナル期）を通して、多角的な見方や論理的な考え方を深め、適切にアセスメントする能力を身につけさせた。検討した事例について、根拠に基づき、対象者のニーズや状況にあわせて判断し、安全安楽な看護技術を発表会でロールプレイし、発表後のディスカッションを通じて、さらに学習を深めさせた。発表会では教職員による患者役の演示や指導助言をいただいた。４年次生に年齢の近い卒後５年程度の卒業生など７名に実習病院である大分県立病院、別府医療センター、大分赤十字病院、厚生連鶴見病院、大分医療センターなどから講師として、アドバイザーになっていただき、演習効果も上がった。次年度に向けた課題として、発表会の実施日時の検討や事例課題に対するアセスメント力の強化等が上がった。

12） 看護科学研究

３年次後期後半

佐伯 圭一郎、村嶋 幸代、平野 亙、小野 美喜、小嶋 光明、宮内 信治、林 猪都子、野津 昭文、品川 佳満、稲垣 敦

卒業研究および将来の臨床における看護研究に必要とされる基本的な考え方、知識、技術を修得することを目標とし、研究テーマの設定から文献収集、研究計画書の作成といった過程のすすめ方, 研究デザインの決定やデータ解析技法の知識と実践といった一連の内容を教授した。講義内容と担当は次の通りである。

1)看護研究の意義（村嶋）、2)研究の倫理と安全（平野）、3)質的研究（小野）、4)実験研究（小嶋）、5)文献研究（宮内）、6)調査研究（林）、7)文献検索と読み取り（佐伯）、8)統計学の考え方（野津）、9)データ解析の方法（野津・品川）、10,11）文献検索＆抄読演習（佐伯）、12,13)データ解析演習（野津・品川）、14)研究計画の作成（佐伯）、15)論文の書き方，発表の仕方（稲垣）

13） 看護科学研究・卒業研究

４年次

教員全員

平成 27 年度は 78 名の学生が卒業研究に取り組んだ。１月８日に各研究室の代表者が、研究室の特色、研究室の研究テーマやこれまでの卒業研究などを紹介した。その後、学生の希望を考慮し 78 名が 17 研究室に配属され、それぞれ配属された研究室において教員の指導のもと、卒業研究のテーマを３月 31 日までに決定した。テーマ決定後は、研究計画に基づき研究に取り組んだ。必要時、研究倫理・安全委員会に計画書を提出するなど研究倫理についても学習過程を踏んだ。研究室の配属から約 10 ヶ月間、研究に取り組み、12 月 10 日・11 日の２日間、それぞれの卒論生は自分が行った卒業研究を講堂で口頭による研究発表（６分間の発表、４分間の質疑応答）を行った。

14） 保健ボランティア

２年次前期後半

藤内 美保

保健医療に関するボランティアを体験し、体験を通じて、保健医療現場におけるボランティアの意義について理解を深めることを目的としている。

学生自らが、保健医療に関わるボランティアを探し、参加手続きをとり、体験し、参加レポートを記載するなど、自主性や行動力の向上につながっている。

15）　看護探索セミナー

３年次後期

小野 美喜、大下 敏子、中釜 英里佳、河野 優子、西部 由里奈、川野 明子、田中 佳子、山田 貴子、巻野 雄介、石丸 智子、麻生 優恵

成人急性期看護実習、成人老年慢性期実習を履修した３年次生 77 名に対し、受け持ちケースに対する看護を振り返り、看護をより深く考えることを目的としたケーススタディのまとめを行った。各担当教員が学生４～７名を担当しケーススタディのテーマ決定、看護の考察に対する助言を行い、発表までの過程を指導した。

３－７－20　養護教諭科目

１）　教職概論

１年次後期

伊東 朋子、吉村 匠平、関根 剛、赤星 琴美、横山 秀樹、麻生 良太、堀本 フカエ、御手洗 功

養護教諭必修科目。教師としての心構えや教師としてのありようを身につけ、職業としての方向性を見いだせるよう、学校現場、教育行政の現場からも講師を招聘し授業を行った。講義前半では、学校教育制度を基礎づける法規についての理解を深めた。講義後半では、外部講師を招き、学校現場、教員養成制度、職業としての教師、養護教諭の実践について理解する機会を提供した。次年度以降は、外部講師と受講生が交流できる時間を確保する。

３－７－21　選択科目

１）　音楽とこころ

２年次前期

宮本 修

クラシック音楽からポピュラー音楽まで、それぞれの楽しみ方のポイントをひもとき、音楽とこころの関係について考察すること、さらに、音楽療法についての講義を行った。単位認定者数は４名であった。

２）　美術とこころ

２年次前期
澤田 佳孝
　人が生まれながらに持っている物を作る力・表現する心・工夫する能力などについて、描くことを体験するとともに、西洋美術史について学ぶ講義を行った。単位認定者数は１名であった。

３）　言語表現法

１年次前期
松田 美香
　人がお互いの意思を伝え合い、理解し合うために必要かつ不可欠な手段である『ことば』について理解を深めることを目的に講義を行った。単位認定者数は 82 名であった。

４）　韓国語

１年次前期
劉 美貞
　ハングル文字の発音と書き方を覚え、基礎的な分の構造を学び簡単な会話のやりとりができるよう講義を行った。単位認定者数は 75 名であった。

５）　哲学入門

１年次前期
西 英久
　医療従事者の立場から、「人間とは何か」という哲学の根本問題が考察できるよう講義を行った。単位認定者数は 57 名であった。

６）　社会学入門

１年次後期
大杉 至
　社会学者がどのように社会をとらえてきたか、概説し、社会を見る目が豊かになるよう講義を行った。単位認定者数は 25 名であった。

７）　法学入門（日本国憲法）

１年次後期
二宮 孝富
　市民生活に関わりの深いトピックを取り上げながら、日本国憲法の基本原理～国民主権・基本的人権の尊重・平和主義～について理解できるよう講義した。特に人権に関する諸問題について、具体的な事例を多く取り上げた。単位認定者数は 69 名であった。

８）　文化人類学入門

１年次後期
足立 恵理
　医療分野を含む現代的なテーマや事例の検討を行い、自他の複雑で多様な人間のあり方を見直す視点を獲得し、日常や医療の現場に応用する力をのばすことができるよう講義を行った。単位認定者数は 72 名であった。

３－８　大学院における教育活動

３－８－１　博士（前期）課程

１）　生体科学特論

１年次前期
濱中 良志、安部 眞佐子、岩崎 香子
　現状において、１年次生は、臨床経験を有しているため、生体科学（解剖・生理・生化学）の分野の基本的な理解はできていた。よって、各臓器における解剖学・生理学・生化学の復習をした後、関連する重要疾患の病態生理から各臓器の正常の機能を“対話形式”で授業を進めた。

２）　病理学特論

１年次前期後半・後期前半
市瀬 孝道

疾病の基本的事項を理解するために生体防御システムに関わる炎症、免疫やアレルギー、腫瘍、代謝障害の病気の基礎と更に系統別の個々の疾患についてプリントとパワーポインを用いて詳しく講義した。また、４症例について、病理解剖時の所見とともに死に至る迄の経過や病気の病態像をパワーポイントで説明し、病気の理解を深めた。

３）　病態生理学特論

１年次前期・後期前半

崔 明愛、巻野 雄介

This course is designed to provide students with knowledge on alterations in human physiological functions that result from disease processes. Students received lecture from faculties and also presented pathophysiology of two diseases. Students did case study and presented about it. Though the preparation for disease presentation, case study, and discussion with faculties and other students, students would study pathophysiology deeply. We provided students with knowledge on pathophysiology of diseases.

We guided students to study about pathophysiology of diseases and gave feedback regarding their presentation. We guided students to conduct case study using the knowledge of pathophysiology and gave feedback regarding their presentation. We directed students to explain rationale of the occurrence of clinical manifestations using pathogenesis. We led students to enhance an understanding of in-depth knowledge regarding the fundamentals (pathophysiology) of disease which it could be applied to clinical practice.

４）　人間関係学特論

１・２年次後期

関根 剛、吉村 匠平

シラバス構成を中心としながら、参加学生の意見を取り入れてテーマを確定させていった。レスポンド、オペラント条件付け、行動分析と応用、カウンセリングにおける深い共感、ＰＴＳＤ対策、グループ指導、リーダーシップ等について、解説を行った。その上で、現実生活や看護場面などにおける応用例、討議などを通じて理解を深めさせた。

５）　健康社会科学特論

１・２年次後期

平野 亙

人間の健康に関わる考察・研究においては、個々の人間行動の分析・探求と並んで、社会政策など社会システムに対する分析、社会学等の社会的アプローチが重要である。これら社会科学的な思考と方法論の基礎を習得することを目的として、講義と課題演習を行った。講義は、「社会システム論１　法と行政」、「社会システム論２　人権と社会保障」、「障がい論、自立と差別の考察」、「社会学の方法」、「医療経済学の方法」、「医療人類学：文化人類学の方法」の各講で、課題演習は、１）日本における医療・保健・介護の政策に関するレポート作成と解題、２）医療・保健領域における社会諸科学の方法論による文献の抄読を行った。

６）　保健情報学特論

１・２年次前期

佐伯 圭一郎、品川 佳満、野津 昭文

保健医療分野において必要とされる情報入手・情報処理・情報管理の基盤となる理論と技術について、演習も交えながら教授した。６回以降の生物統計学に関する内容については、事前学習と発表を組み込んだ形式で学習の充実をはかった。

各回の内容は以下の通り。

1～2.情報管理・処理のためのコンピュータ技術

3～4.医療・保健分野でのデータ処理

5.情報システムの構築と管理

6～7.統計データとは，データの要約

8～9.確率，確率分布

10.推測統計総論

11.推定

12.検定

13.統計ソフトウェア演習１

14.検定各論

15.統計ソフトウェア演習２

７）　看護科学研究特論・健康科学研究特論

１・２年次前期

小嶋 光明、村嶋 幸代、甲斐 倫明、藤内 美保、福田 広美、平野 亙、吉村 匠平、関根 剛、大田

えりか

EBN の基礎をなす看護科学研究と健康科学研究の理論および手法を概観し、研究活動を自ら展開するために必要な事項を論じた。さらに、実際の研究例の輪読と検討により、研究活動に関する実践的能力の育成をおこなった。

1. 看護研究の意義　村嶋
2. 研究テーマ・デザイン　村嶋
3. 研究の倫理と安全　平野

＜研究方法＞

4. 調査研究　吉村
5. 観察研究　甲斐
6. 介入研究　小嶋
7. 既存のデータ分析　関根
8. 質的研究　藤内
9. 系統レビュー　大田
10. 文献検索の方法　小嶋

＜原書講読＞

11. 調査研究　吉村
12. 調査研究２　福田
13. 観察研究　甲斐
14. 介入研究　小嶋
15. 文献研究　関根
16. 質的研究　藤内

８）　看護管理学特論

１・２年次後期

福田 広美、桜井 礼子、小野 千代子、甲斐 仁美

保健・医療・福祉に関する制度と組織、看護管理の基本となる組織論、人材育成、マネジメントに関する理論とその展開について教授し、管理プロセスに対する理解を深めるとともに、質の高い看護サービス提供のために看護組織が備えるべき機能や看護管理者に必要とされる能力について学生自身が考える機会となることを目指した。学生には、いくつかの課題を提示して、文献や自らの経験を踏まえたプレゼンテーションとディスカッションは実施した。学外講師からは、現任のトップマネジメントの立場から、看護職の業務管理のあり方、病院経営と看護管理について教授いただいた。

９）　看護理論特論

１・２年次後期

藤内 美保、高野 政子、秦 さと子、桑野 紀子、李 笑雨、伊東 朋子

博士課程（前期）の履修学生６名を担当した。

看護における理論を構築することの必要性と科学的解釈の本質を考究するための導入であることを主として、李教授に講義を依頼し、他の５人の担当教員が専門とする内容をチュートリアル形式で講義し、理論のパラダイムの視点から看護実践を考察させた。またグル―プでの議論も行えるようにグループワークの時間も設けた。

10）　看護教育特論

後期前半

高野 政子、宮崎 文子、梅野 貴恵、石田 佳代子

受講生は、研究者コース、リカレントコースの３名であった。看護基礎教育の内、専門分野の看護教育学、看護教育課程、看護教育方法、看護教育評価を含む内容を教授しているが、コマ数が少なく厳選した一部を講義している。看護学の教授、学習活動に関する理論等は、現行のカリキュラムの受講の仕方では保障していると考える。

後半のレポートは看護職（教員・教育委員、研究指導）として、臨床現場の問題意識は明確であった。しかし、問題意識の絞込みが弱い。問題領域の文献を読み、考察にも文献をとりこんで考察することが必要である。発表時の討論ではグループダイナミックスの課題もある。現状を分析するような討論ができれば、もっと深まるレポート課題と思われる。

11）　看護コンサルテーション論

１・２年次前期後半

杉本 圭以子、吉村 匠平、関根 剛、小畑 絹代、畑中 明子

看護におけるコンサルテーションの概念と方法、プロセスの概略を学んだ後、対象者理解のための心理的アセスメント、効果的な心理教育と心理的援助の方法について学んだ。県内の専門看護師によるコンサルテーションの実践についての講義によって、臨床現場に則した事例から、現実的なコンサルテーションの場面をイメージすることができた。最後に、それぞれが経験した事例を持ち寄り、ディスカッションすることでさらに理解を深め、看護コンサルテーションの課題についても検討した。

12） 看護倫理学特論

１・２年次前期前半

平野 亙、小野 美紀、関根 剛

倫理的思考は、すべての看護職に不可欠であることから、受講者が専攻する各領域で活かせるよう、必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的規範に基づく思考訓練を行うことを目的に講義を組み立てている。11 回の講義と３回の事例演習を行い、さらに最終回には受講生の事例報告による評価を行った。講義は、「Profession の責任と倫理」・「Bioethics・生命倫理の展開と課題」・「倫理的判断の方法」・「自己決定権と人間の尊厳」・「個人の尊重とプライバシー権」・「ケアとしての苦情解決」を平野、「倫理的行動とコミュニケーション」・「問題解決のためのコミュニケーション・スキル」を関根、「看護職の責任と倫理規程」・「看護職の価値観と倫理」、「看護場面の倫理的ジレンマとその解決ステップ」を小野が担当した。事例演習は、３名の教員各々が講義と関連付けて行い、受講生による事例報告は３名の教員全員が出席してコメントし、評価を行った。

13） 看護政策論

１年次後期後半

村嶋 幸代、小池 智子、立森 久照、小山 秀夫、佐藤 玉枝、影山 隆之

保健・医療・福祉を取り巻く制度や政策の決定プロセス、その背景となっている社会情勢、政策が看護現場に及ぼす影響、政策の評価方法などを考えるために、オムニバス形式で講義を行った。国政レベルでの保健医療政策、保険診療制度の仕組み、大分県における看護政策、政策や活動の評価方法、政策の根拠となる資料など、今日における看護政策課題などの講義から、学生自らが看護政策について思考するための視点を教授した。

14） 英語論文作成概論

１年次前期後半

甲斐 倫明、影山 隆之

修士論文で英文アブストラクトを書くための基礎的事項を教授した。講義内容は次の通りである。1)英語科学論文の特徴、2)構造化アブストラク、3)日本人が間違いやすい英語表現、4)調査研究データ特有のアブストラクトの事例の書き方、5)実験研究データ特 有のアブストラクトの事例の書き方

15） Intensive English Study

１年次前期

Gerald T. Shirley

Competence in English is important for graduate students. This course aimed at improving the basic English language ability of students through intensive practice in reading, listening and grammar. It was an eight-week course in which students practiced reading, listening and grammar problems to help them improve their basic language abilities in these important areas. The course used a Computer Assisted Language Learning (CALL) system. The CALL course is designed so that students can access and practice CALL at any time on their computers at home and in the Graduate Student Room. There were no classroom sessions in this course. Students practiced the CALL course problems during their own time. Their progress was monitored and evaluated by the instructor during the eight-week course. Individual assistance and instruction was available to each student through consultation with the instructor. The course consisted of an orientation session in the CALL classroom in which the CALL course was introduced and class guidelines were discussed. The TOEIC-IP test was administered before and after the CALL course, and it was mandatory that students take both tests.

16） 原書講読演習

１年次前期

宮内 信治

共通教材として、Nurse Practitioner の活動成果を取り扱った原著論文の要旨の翻訳解釈に取り組んだ。期間後半では、学生の専門分野に配慮した文献を選択し、分野ごとに解釈の指導を行った。発音記号の復習、語源学の知見を基にした医療看護英単語の増強・習得、英文法の基礎の確認と演習を取り入れ、原著論文の読解へとつなげた。

17） 看護アセスメント学特論

１年次前期後半

藤内 美保、高野 政子、伊東 朋子、石田 佳代子

クライアントマネージメントを遂行するために、看護職が問題解決過程を展開し、信頼性のある方法論に従った身体的、包括的な機能評価のための情報収集の基礎理論と技法について教授した。オムニバス形式とし、NANDA-I 看護診断が新しくなったことより、変更点による影響や実践者の視点から考察した。また小児のフィジカルアセスメント、看護過程の展開を行い、レポートさせ

た。在宅看護における神経難病の患者理解と看護判断についての演習をした。いずれも、基礎理論を踏まえた看護判断に関する具体的適用方法の課題学習を行い、レポートおよび出席状況により評価した。

18） 精神保健学特論

１年次後期
影山 隆之
　地域保健・職域保健・学校保健活動としての精神保健活動を軸に、精神健康のモデルと評価法、精神保健のシステムと活動、精神保健の法制と政策、最新の自殺対策等について、講義形式で開講した。

19） 基盤看護学演習

１年次後期
影山 隆之、藤内 美保、品川 佳満、伊東 朋子
　博士課程（前期）の１年次生の履修学生４名を担当した。
　基盤看護学における研究の方法について様々な視点からその手技方策を具体的に解説するために４名の担当教員によるチュートリアル形式で展開した。与えられたテーマに沿ってレポートを作成したり、プレゼンテーションなどで内容を深めさせた。
　担当教員とその分担は以下のようにした。影山 隆之「精神健康測定法」、藤内 美保「看護師の臨床判断と形成過程」、品川 佳満「自律神経機能とその測定方法」、伊東 朋子「看護研究における実験的研究」

20） 小児看護学特論

前期後半
高野 政子、草野 淳子、式田 由美子
　本年度の受講生は２名であった。講義内容は小児の各期における成長発達の特性と環境を理解し、小児と小児をとりまく環境との相互作用を理解するための小児領域で活用する理論と看護への活用方法を学んだ。
　講義は、小児看護で用いる理論、小児と家族を取り巻く環境と社会的資源、小児医療における生命倫理、小児の成長・発達の評価と家族支援、児童虐待、愛着形成の障害・虐待予防、発達障害、障害をもつ児と家族への支援を講義し、受講生の事例検討を討論した。
　本年度は、糖尿病療養指導士の式田 由美子先生を招聘し、子どもの糖尿病の理解を深めること

ができた。

21）　成人看護学特論

１年次前半

小野 美喜、大下 敏子、甲斐 博美

平成 27 年度は３名が履修した。成人看護学の急性期・慢性期・終末期に関する研究、教育の動向について３名の講師がオムニバス方式で教授した

22）　生殖看護学特論

１年次前期

林 猪都子、矢野 美紀

大学院前期課程研究者コースの選択学生１名を担当した。

「海外における母性看護活動」ではウズベキスタン国と米国の母性・助産師教育や活動について教授した。「国内における母性看護活動」では助産師外来・院内助産および産後ケア活動について教授した。「思春期女性の健康問題と看護」では選択学生の今までの活動とその活動から見える課題についてディスカッションした。「成熟期女性の健康問題と看護」では大分県における子宮がん、乳がん検診意識調査と先行文献から健康問題と課題についてディスカッションした。「更年期女性の健康問題と看護」では、文献から更年期の健康課題を明らかにし、クリティークした。「女性の健康問題と看護」では、思春期から老年期までの女性全般の健康問題からこれからの対策を考察した。「母性看護と倫理」では、母性看護に関する倫理的問題や配慮を抽出し、再認識した。また、修士論文を進めていく中での倫理的配慮にも言及し、倫理的概念を広めた。「望ましい周産期ケア」においてが、これまでの行った自身の研究データ、結果を報告し、現代の問題を抽出し、今後の周産期看護のあり方についてディスカッションした。また、学生自身の研究テーマのヒントになればということを意識し、ニーズに即した講義展開をこころがけた。

23）　発達看護学演習

２年次前期

小野 美喜

大学院生１名に対し老年期の看護における問題に焦点をあて文献を中心に学習とディスカッションを行った。最終的には学生の興味関心のある高齢者の肺炎予防に関する看護に関する文献の知見と考察をまとめ、学生がプレゼンテーションを展開し、今後の看護の課題を共有した。

24） 地域看護学特論

１年次通年

赤星 琴美、佐藤 玉枝

ヘルスプロモーションを基盤としたコミュニティエンパワメントの視点から、地域における個人、家族、集団へのアプローチの方法や地域看護診断の手法と理論を用いながら教授した。さらに行政システムの視点から、新たな健康ニーズへの対応や地域看護の機能についてもディスカッションを含めて講義を展開した。

25） NP Early Exposure 実習

１年次前期後半

小野 美喜、甲斐 博美、大下 敏子

NP コース１年次生４名が１週間の臨地実習を履修した。実習は修了生（NP）が活動する佐伯中央病院、別府医療センター、鶴見の太陽、訪問看護ステーションつるみの４ケ所で行った。臨地での NP の実践に同行したことや指導者との意見交換等を経験し学習効果が高かった。

26） 老年 NP 特論

１年次後期

小野 美喜、甲斐 博美、安部 眞佐子、佐藤 弥生、増井 玲子、廣瀬 福美、芦田 幸代

NP コース履修生４名が受講した。EBN に基づいたケアを提供できる実践能力を高めるために、加齢に伴い生じる身体的・精神的・社会的機能の変化と、老年期の発達課題を理解し、NP としての看護を実践する理論、方法を探究することを目的として講義を行った。NP の看護の対象者は、健康増進や疾病予防を必要とする高齢者や、慢性疾患をもち生活している高齢者であり、各健康レベルにおける看護を専門とする大学教員や臨床で活動する認定看護師などがオムニバス方式で教授した。今年度は学習を統合させる目的で、学生の身近な高齢者ケースをアセスメントしマネジメントプランを立案する課題を課しプレゼンテーションを行った。課題を当初からオリエンテーションしていたため、十分に時間をかけた取り組みができていた。また発表に対する意見交換によって各自の課題が明らかになり、今後の学生に継続する学びとなった。

27）　老年疾病特論

１年次後期

濱中 良志 糸永 一郎、工藤 欣邦、一万田 正彦、影山 隆之、財前 博文、竹下 泰、甲原 芳範、小寺 隆元、塩月 成則、三浦 芳子、平井 健一

NP（診療看護師）としてプライマリーケアを提供するために、老年期によくみられる慢性期の疾病および継続医療における臨床評価を１年次生に教授し、その診断・処方（薬・検査）・治療について知識を習得させた。

28）　老年臨床薬理学特論

１年次後期

吉田 成一、伊東 弘樹、佐藤 雄己

診断後、医薬品を処方するにあたり必要となる基礎的な薬理学総論および各種疾患の治療に用いる医薬品に関し、作用、副作用、相互作用等の面を重点的に身につけるための講義を行った。医薬品の商品名と一般名の双方を理解できるよう心がけ、講義を行った。最終日に筆記試験を行い、当該科目の理解度を確認した。

全ての学生は看護職のため、自身の勤務先で使用している医薬品に関しては商品名での理解は高いものの、一般名に触れる機会がないため、習得が難しい部分が散見された。しかし、講義後の自主学習を積極的に行っていることから全ての学生が相当の理解度に到達した。

29）　老年診察診断学特論

１年次前期後半・後期前半

濱中 良志、岩波 栄逸、山口 豊、永瀬 公明、工藤 欣邦、糸永 一朗、阿部 航、安藤 優

プライマリーケアから臨床医学の各専門領域にわたって専門医師による講義、実習を行った。

30）　老年アセスメント学演習

２年次前期前半

立川 洋一、永瀬 公明、久保 徳彦、小野 美喜、石田 佳代子、甲斐 博美

老年看護の対象（高齢者・家族・地域社会）に対して、包括的健康アセスメントおよび看護的治療マネジメントを行うことを目的に、専門的知識と技術を修得するうえで必要なシミュレーショントレーニングを行った。トレーニングには、臨床に即した代表的な事例として、初期診療を必要とする症例と、慢性期にあり継続的な診療を必要とする症例について演習を行った。

31）　老年薬理学演習

２年次前期前半
塩月 成則、小寺 高元、小野 剛志、原 正範、甲斐 博美
老年領域において必要とされる薬理学に関する実践能力高めるために、事例を通した薬剤の選択や症状マネジメントに関する演習を行った。予定された内容に、補強が必要とされた内容を追加して演習を進めることにより、本科目の達成度と他の履修科目の意欲の向上につながった。

32）　老年実践演習

２年次前期後半
佐藤 博、古川　雅英、山本 真、石川 純也、小野 美喜、前田 徹、竹内 山水
NP 履修生５名が履修した。老年期の対象者に看護的治療マネジメントを行うための専門的知識と技術を修得するために、シミュレーショントレーニングを行うことを目的に演習を展開した。NP に必要なデブリドメント、局所麻酔、抜糸、胃ろうカテーテル交換、気管挿管、X 線読影のスキルが向上する演習を展開した。学生には授業時間だけでなく課外の自主トレーニングも実施できる環境を整え全体的な到達度があがった。

33）　老年 NP 実習

２年次前期後半～後期前半
小野 美喜、甲斐 博美、太下 敏子、石田 佳代子、後藤 朋子、立川 洋一、小寺 隆元、財前 博文、増井 玲子、麻生 哲郎、川上 克彦、酒井 浩徳、長松 宜哉、
学生４名が履修した。プライマリ診療を行う場で実践力を身につけることを目的に NP 実習を展開した。昨年度同様に、病院施設８週間、老人保健施設２週間、診療所４週間の合計 12 週間で構成した。医師、大学教員ともマンツーマンでの指導形式をとった。さらに実習前後に施設長、主指導医、看護部長、大学側との実習施設合同会議を設け、実習目標と方法の共通理解と評価の共有を行うなど大学と各施設との連携をとった。医療事故なく実習を終了することができた。

34）　老年 NP 探求セミナー

２年次前期後半～後期前半
小野 美喜、太下 敏子、甲斐 博美、後藤 朋子、石田 佳代子
老年 NP 実習にて診療を担当したケースを振り返り、文献等を活用しながらケースレポートの

作成をした。ケース発表会では担当教員や他学生との意見交換をとおして知識強化し、全学生との共有を促進した。さらに次段階の実習準備として介護老人保健施設での研修を設けた。セミナーによって病院実習の学びの整理ができ、医療体制や保険制度の異なる実習施設で療養する高齢者の健康問題と NP 役割を考察につなげられた。

35） NP 論

１年次前期前半

藤内 美保、小野 美喜、田村 委子、村嶋 幸代、草間 朋子

米国から学ぶ NP の歴史的変遷、日本における NP の役割、大学院 NP 教育の考え方、NP の実践活動など教授した。本年度はさらに「特定行為に係る看護師の研修制度」が制度化したことに伴い、研修制度の内容を満たすために「手順書」に関する内容を修了生に 4 コマ追加して教授してもらった。また最後には本学の前学長である東京医療保健大学草間朋子副学長による「特定行為に係る看護師の研修制度と NP 教育」「NP 教育の現状と課題、NP が果たすべき役割と展望」と題して一般公開で講義を行った。

36） フィジカルアセスメント学特論

１年次前期後半

藤内 美保、石田 佳代子、濱中 良志

クライアントの包括的・全身的な身体的健康状態のアセスメント能力を高めることを目的に教授した。五感を駆使した問診、視診、触診、打診、聴診の基本技術を身につけるため、講義および演習形式で行った。全身、頭部、頸部、胸部（肺および心血管系）、腹部、四肢、神経系のフィジカルアセスメントを系統的に実施した。演習では異常な状態把握ができるようにフィジカルアセスメントシミュレーター、眼や耳のシミュレーターを使用し、より実践的で、確実な技術が身につくようにした。試験は中間試験と最終試験を実施し、それぞれ筆記試験および OSCE を行った。

37） 広域看護学概論

１年次

佐藤 玉枝、村嶋 幸代、赤星 琴美、緒方 文子、藤内 修二

地域社会におけるヘルスプロモーションおよびプライマリヘルスケアの概念やそのアプローチ方法、健康の保持・増進を支援するための理論と概念、活動方策を教授した。さらに、個人・家族・集団・地域社会の視点、家庭・職場・学校・国際社会の視点、全てのライフステージの視点という広域的に看護活動の意義、目的、機能、役割を探究した。

特に、地域保健領域での法改正や保健事業の見直しなど、常に新しい情報をすばやくキャッチし、新鮮な情報を学生へ提供しつつ、複雑化する行政機関における広域看護の役割・機能を具体的に理解できるように教授した。

38） 地域保健特論

１年次通年

佐藤 玉枝、赤星 琴美、緒方 文子、梅野 貴恵、大津 孝彦、渡辺 由美子

地域で生活する個人・家族、集団を対象とした保健師がおこなう支援の基本的な考え方を理解し、人びとが生活している地域における看護の役割と機能を理解できるよう講義した。また、個人を対象とした支援から地域社会全体を対象とした支援までの保健師活動方法を教授した。受講生の学習状況を把握しながら講義を行い、レポートおよび出席状況により評価した。

39） 産業保健特論

１年次後期

佐藤 玉枝、緒方 文子

労働環境および作業上の諸条件から発生しやすい疾病・障害を防止し、身体的・精神的・社会的健康と福祉を維持増進するための産業保健システム、活動、看護の位置付けと役割・具体的な活動方法をヘルスプロモーションや産業保健に関する理論やモデルを用いて教授した。

常に資料やパワーポイントなど活用することで、学生が産業保健分野で活動する看護職をイメージでき、理解が深められるよう教授した。

40） 健康危機管理論

１年次後期

赤星 琴美、佐藤 玉枝、緒方 文子、本山 秀樹、甲斐 倫明、神田 知子、末永 宏、玉井 文洋

健康障害のある個人、家族、集団を対象として保健師が行う支援の基本的な考え方が理解できるように講義した。さらに、地域社会における健康危機管理（災害時保健活動を含む）に関する考え方や保健師活動の展開方法および多職種連携について理解を深めるために時間を十分にかけた。

県健康危機管理室の参事、県食品課の担当者、保健所の保健師を講師として招くことで、地域での健康危機管理の実際や課題などについて活動方法や事例を使いながら講義を行った。

また、大分 DMAT で活躍している講師による講義を通して災害発生時の対応についても学ぶようにするなど、学習に深みを持たせられるよう配慮した。

41）　健康増進技術演習

１年次

関根 剛、安部 眞佐子、稲垣 敦

本講義では、健康レベルに応じた個人・集団の健康と生活を評価し、効果的な疾病予防・健康増進ができる知識と能力を養うことを目標に、運動指導、栄養指導、心理相談の３領域に講義を行った。

運動指導(合計６回）は、運動強度と運動量、身体活動量およびその測定評価、健康関連体力およびその測定評価（１）呼吸循環器系持久力、（２）筋力と柔軟性、運動機能およびその測定評価、健康運動のメニューと指導。栄養指導（合計７回）は、エネルギー代謝と栄養素、栄養素の消化吸収と利用効率、食事摂取基準、食事バランスガイド と食品表示、ライフステージ別栄養のトピックス、指導の実際（1)、指導の実際（2)。心理相談（合計８回）は、心理相談の技術（１）講義、（２）ロールプレイ 傾聴技法を中心に、（３）ロールプレイ 積極技法を中心に、グループダイナミクス（１）リーダーシップ、集団力学、（２）構成的グループエンカウンター、リラクゼーション法（自律訓練、行動療法)、PTSD の予防、社会資源の利用とリファーの仕方。

42）　広域看護アセスメント学演習

１年次前期

赤星 琴美、佐藤 玉枝、緒方 文子、村嶋 幸代

最も重要なスキルである地域看護診断を用いて地域社会の健康問題の抽出とその評価と、それに対する改善策について講義と演習を行った。既存資料の利用、地区視診を行うことで対象集団の理解やニーズを多面的にアセスメントし、地域の抱える健康問題、地域住民の健康課題を抽出し、支援方法を立案する演習を取り入れた。

内容としては、「地域マネジメント実習」を行う対象の市の二次データを用いながら、地域の健康問題の抽出を行った。

43）　健康教育特論

１年次前期

赤星 琴美、佐藤 玉枝、緒方 文子

個人と集団が、自らの健康および福祉の維持増進のための主体的な取り組みが行えるための支援方法について講義を行った。必要な知識・技術を対象者に効果的に伝達できる能力を習得できるよう心がけた。

健康教育に関連した理論を教授し、教育的働きかけのあり方と保健師の地区活動の展開方法の

具体的事例を挙げ、基礎知識・技術が習得できるような講義内容とした。

レポート課題を教員・学生で共有し、ディスカッションを繰り返しながら、健康教育のデモンストレーションを行い、さらに修正していくという過程を踏むことで学習を深めた。

44） 健康リスクアセスメント演習

１年次後期

赤星 琴美、佐藤 玉枝、緒方 文子、本山 秀樹、神田 知子

個人、家族、集団が抱える潜在的な健康問題（リスク）を的確に予測し、保健師としてのリスクマネジメント、支援のあり方を習得するために講義と演習を行った。さらに、対象者または対象集団がリスクを予測し、自らリスクマネジメントができる支援方策を習得するため、具体的な事例を使用して学習を深めた。

45） 疫学特論

１年次前期

佐伯 圭一郎

人間集団における健康事象の頻度分布とそれに影響を与える多様な因子を分析するために不可欠な疫学の理論と実践の手法を身につけることを目的としてテキストの講読とディスカッションを行った。さらに保健師としての活動で特に必要度の高い調査手法とその具体例について理解を深めた。

46） 保健統計学

１年次前期

佐伯 圭一郎、野津 昭文

人口統計や疾病統計、保健情報など、公衆衛生活動の基礎となる集団における健康情報の調査法とその概要、ならびに分析法について、その発生源から取り扱い、解釈に至るまで体系的に扱った。また、それら健康情報を適切に整理・分析するための生物統計学の手法を教授した。

内容は以下の通りである。なお、生物統計学部分については、保健情報学特論の生物統計学部分と同内容である。

1. 健康情報の基盤となる理論
2. 人口統計
3. 傷病に関する統計
4. その他の保健統計

5～14. 生物統計学
15. 地域保健医療データの統計解析

47） 疫学・保健統計学演習

１年次後期
佐伯 圭一郎、品川 佳満、野津 昭文
疫学および保健統計学の知識に基づいて、実践する能力を身につけることを目的として演習を行った。保健師業務に必須である ICT 技術を身につけ、情報収集・分析・発信に活用できる能力を養った。
内容は以下の通りである。
1. 情報処理・情報管理の基礎
2. 情報収集の技術
3. 疫学データの解析
4. 保健統計データの解析(1)
5. 保健統計データの解析(2)
6. グラフィカルな手法・マッピング
7. シミュレーション
8. 情報発信の技術

48） 社会保障システム特論

１年次前期
平野 亙
社会保障制度の理念と構造を理解するために、生存権の意味と法・行政など社会制度の位置づけ、社会資源としての諸制度に対する理解を深めることを目的に、講義を構築した。具体的には、法と行政の構造、財政の仕組み、社会保障理念の変遷、所得保障の諸制度、医療制度とマンパワー、医療の安全管理、公衆衛生施策の体系、高齢者の保健とケアの制度、児童福祉、障がい児・者福祉の諸制度である。受講生が４名であったため、ゼミのような一問一答の討論も可能であった。成績評価は、講義内容に関連して、中間と期末の２回のレポート提出により行った。

49）　保健医療福祉政策論

１年次後期前半

平野 亙、阿部 実

保健師に必要な、政策形成、企画立案の能力を涵養する目的で、保健・医療・福祉の政策理念と政策上の課題、社会保障財政の現状、保健活動と社会福祉の評価、障がい論、自立支援について講義し、さらに県の保健福祉行政に長年携わってこられた阿部講師（非常勤）から、地方保健福祉行財政の計画と実際について２回の講義をいただいた。成績評価は、大分県内の保健・医療・福祉に関する基本計画を検索、整理して課題分析を行うレポートにより行った。

50）　疾病予防学特論

１年次前期

佐藤 玉枝、藤内 修二、池邊 淑子、三浦 源太、増井 玲子

さまざまな健康レベルにある個人、個人を取り巻く家族、集団、社会の健康状態を的確に判断・評価する能力を身につけるために、解剖・生理学、疾病病態学、フィジカルアセスメント、臨床検査法等、診断治療学などの医学的な知識を教授した。また、疾病予防のためにエビデンスに基づいた保健師としての健康教育・健康相談の実践活動ができるようにするために、必要な知識、および実践能力を習得できるように教授した。

51）　実践薬理学特論

１年次前期前半

吉田 成一

生体内に投与された薬物の生体への影響（薬力学）と、生体内に入った薬物の生体処理法（薬物動態学）を理解し、薬害と有害作用、処方概要と投薬設計、治療効果と副作用についての基礎知識に関する講義を行った。特に生活習慣病を中心とした疾患（糖尿病、高脂血症、高血圧症など）に対する主な治療薬の作用機序、副作用、注意事項など、保健指導に活用できる実践薬理学の基礎知識が習得できるような講義内容とした。

本年度は受講者が４名であったため、受講者の学習状況を把握しながら講義が行えたため、高い学習効果であったと考える。

52） 薬剤マネジメント学特論

１年次

赤星 琴美、平川 英俊

ノンコンプライアンス者とその家族への処方内容・指示に関する指導、家庭での薬物管理（残薬管理等）と服用方法などについて教授した。さらに、健康危機状態にあるハイリスク対象者への薬物の取り扱い方法や内服方法、効能などについての薬剤指導法（DOTS、抗結核薬、抗うつ・抗不安薬、催眠・鎮静剤、副腎皮質ホルモン剤などの取扱と服用方法など）など保健師の保健指導に必要な知識などについて、具体的に理解が深められるよう、資料とパワーポイントを活用した。

53） 環境保健学特論

１年次前期

甲斐 倫明

環境と健康との関係を理解するために、社会的ニュースを事例にして、物理的要因、化学的要因、生物的要因および社会的要因と健康との関係についての基礎概念の整理を行い、最新の英語原著論文を紹介しながら問題意識を高める工夫をした。講義内容は次の通りである。1)環境保健とは何か、2）生存率とハザード関数などの指標の基礎概念、3)DALYs(障害調整生存年数)と健康寿命、4）疾病原因、5)IARC モノグラフ、6）喫煙の健康影響、7）ETS のリスク、8）放射線のリスク、9)携帯電話とがんリスク、10）化学物質の非遺伝毒性、11）化学物質のリス ク、12）感染症のリスク、13）食の安全、14）生活因子/社会因子/遺伝因子、15）リスクガバナ ンスとリスクの考え方

54） 地域生活支援実習

１年次

佐藤 玉枝、赤星 琴美、村嶋 幸代、緒方 文子

個別ケースを通して、対象者とその家族が地域で暮らしていけるように、ケアマネジメント、地域ケア資源の活用方法について考えることを目的として訪問看護ステーションの訪問看護師に同行し、実習を行った。６月から１月までの８か月間に合計 10 回の訪問を行い、成果報告会を２月 18 日に行った。実習前、実習中にはカンファレンスを行い、実習目標の検討、方法の共通理解と評価の共有を行うなどして連携をとった。事故なく実習を終了することができた。

55） 地域マネジメント実習

１年次

赤星 琴美、佐藤 玉枝、緒方 文子、村嶋 幸代

広域看護アセスメント学演習で作成した地域看護診断に基づいて、地域全体の健康課題の解決に向けた地域活動支援を実施し、評価ができる能力を養うことと、地区組織化活動や地区管理を通して、関係者・関係機関との連携・調整・交渉などができる能力を養うことを目的に実習を展開した。

市において、３週間の合計 15 日で構成した。３名の学生が履修し、実習指導保健師の指導を受けながら実習を行った。

10 月 15 日に実習施設の方々の参加を得て、実習成果報告会を開催し、実習成果を共有した。

56） 広域看護活動研究実習

１年次

佐藤 玉枝、赤星 琴美、村嶋 幸代、緒方 文子

開発すべき社会資源や健康政策・保健医療福祉システムについて考察・探求し、地域社会の健康づくりの組織者として、個人のみならず地域社会全体の QOL を向上させる活動を研究的視点を持ちながら実行できる能力を養うことを目的に実習を展開した。

保健所および市において、９週間の合計 45 日で構成した。３名の学生が履修し、実習指導保健師の指導を受けながら実習を行った。

１月７日に大学において、実習成果報告会を開催し、実習成果を共有した。

57） 学校保健特論

２年次前期

赤星 琴美

学校保健安全法に基づく学校保健のあり方と、学校保健を担当する専門職、特に養護教諭の役割と機能について教授した。また、学校保健の対象の特性を理解し、それぞれの発達段階を踏まえた保健指導、健康教育等の具体的手法について教授した。

公立小学校にて、学校保健活動や健康相談活動（ヘルスカウンセリング）の実際について見学させていただいた。さらに、文献を用いて、変化する子どもの健康問題に対応するための地域保健との連携や組織的な解決手法についてディスカッションを通して考えを深めた。

58）　助産学概論

１年次前期

梅野 貴恵

助産の基本概念および女性をとりまく社会的背景を認識し、助産師の責務と社会変化のなかで期待される役割と重要性について、さらに助産師活動に積極的に取り組む姿勢について系統的に教授した。授業方法は、資料を用いた講義形式を半分、課題に基づき、学生がプレゼンテーションし、その後ディスカッションを行った。「出産の満足度」をとりあげた研究論文を各自でクリティークし発表し、また『WHO 勧告にみる望ましい周産期ケアとその根拠』等を用いたディスカッションを通して、助産とは何か、社会に求められる助産師の役割について自己の考えを述べることができた。

59）　周産期特論

１年次前期

佐藤 昌司、飯田 浩一、豊福 一輝、軸丸 三枝子、後藤 清美、梅野 貴恵

すべての講義は周産期における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得を目指して産婦人科医師・新生児科医師を講師とした。妊娠・分娩・産褥・新生児の生理とその管理についての基礎知識、さらに周産期における異常を判断するために、主な疾患の病態・検査・治療や NICU における新生児管理、新生児救急蘇生法について教授された。評価は、筆記試験を実施した。

60）　母子成育支援特論

１年次前期

石岡 洋子、高野 政子、吉村 匠平、平野 亙、桑野 紀子、上野 桂子、井上 祥明、佐藤 敬子

母子関係をめぐる問題を中心に、家族の機能とその支援法を習得するために、女性のライフサイクルからみたメンタルヘルスとして若年妊娠・出産に伴う心理的問題や不妊症、出生前診断、流産・死産、産後うつ病、愛着喪失の病理や援助の方法について講義を行った。さらに、現代の家族支援の在り方について、日本および世界の子育て支援制度や取り組みを理解することを目的に講義及び各テーマにそった事例検討等を行った。

61）　リプロダクティブ・ヘルス特論

１年次前期

井上 貴史、中村 聡、嶺 真一郎、宇津宮 隆史、谷口 一郎、堀永 孚郎、梅野 貴恵

すべての講義は性と生殖における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得を目指して産婦人科医師を講師とした。性分化の機序をはじめ、生殖器に関する形態機能や主な疾患及び治療に対する基礎知識や最新の生殖補助医療の現状と課題、ワクチン接種等の予防も含めた子宮頸癌の動向についても教授された。評価は、筆記試験を実施した。

62）　ウイメンズヘルス特論

１年次前期

梅野 貴恵、甲斐 倫明、市瀬 孝道、影山 隆之、赤星 琴美、桑野 紀子、實崎 美奈

女性の生涯を通じた健康づくりを視野にリプロダクティブ・ヘルスを推進するために女性のライフサイクル全般における性と生殖に係わる健康問題を検討し、健康教育を実施するための知識や技術を教授した。主な内容は、講師の専門性を考慮したオムニバス形式で実施し、発表やレポート課題で各講師からの評価を得た。

63）　妊娠期診断技術特論

１年次前期

安部 真紀、梅野 貴恵、石岡 洋子、吉田 成一、安部 眞佐子、小嶋 光明、渡辺 しおり

妊娠期の経過及び生活状態に関する必要な情報を収集するためのフィジカルアセスメントや助産診断を行うための基礎的な知識及び助産技術について講義を行った。具体的には、臨床推論を用いた妊娠の生理と診断に必要な情報とアセスメント、助産師外来の実際、妊娠期のフィジカルアセスメント、妊産褥婦の栄養摂取と栄養指導、妊産褥婦と薬剤、妊婦の日常生活適応への支援と保健指導、母子に対する放射線の影響、出生前診断を受ける妊婦への支援、MFICU（母体胎児集中治療室）における妊婦管理、ハイリスク妊婦の支援である。成績評価は、筆記試験と出席状況により行った。

64）　分娩期診断技術特論

１年次前期後半

石岡 洋子、樋口 幸、渡邊 めぐみ、生野 末子

分娩期の経過及び生活状態に関する必要な情報を収集するためのフィジカルアセスメントや助

産診断を行うための基礎的な知識及び助産技術を習得することを目的に事例検討を中心に講義を行った。また、母児の生命の安全維持かつ、母親が主体的に分娩に臨み、満足感を得ることができるよう支援するための基本的な助産の実践能力を習得するための講義を行った。

65） 産褥・新生児期診断技術特論

１年次後期

樋口 幸、和田 美智代

産褥期にある女性と新生児、乳幼児の健康状態を包括的にアセスメントし、助産を実践するための内容を教授した。授業方法は講義と演習を組み合わせて行った。産褥の母乳育児支援は、実践で活躍する外部講師に２コマ依頼し、講義と演習を行った。また、授乳指導の演習を取り入れ、実際の指導場面を想定し体験した。産褥期の退院指導では、個人で指導案・パンフレットの作成を行い、ロールプレイで発表し意見交換や自己評価を行った。新生児の講義・演習では、NICU におけるケアを体験し、「周産期診断技術演習」や「NICU 課題探究セミナー」の導入とした。評価は、筆記試験、レポート、演習参加度から実施した。

66） 周産期診断技術演習

１年次後期

樋口 幸、安部 真紀、佐藤 昌司、河野 富美代

妊産褥婦と胎児・新生児の健康状態をエビデンスに基づいて診断する技術と、具体的な支援方法について教授した。胎児の健康状態の診断については、高機能シミュレーターを用いて胎児の計測や奇形の有無などから成長・発達、健康状態の診断、異常の早期発見に関する知識と技術を習得し、OSCE で到達度チェックを行った。さらに、CTG 波形の判読についても実際のモニター波形から学び、総合的に胎児の健康状態を診断できる能力を養った。また、新生児蘇生法については、学内演習で新生児蘇生のアルゴリズムに則り、新生児モデルで出生直後から気管内挿管、薬剤の投与に至るまで、様々な事例に合わせて必要な援助技術の習得を行った。その後日本周産期・新生児医学会の新生児蘇生法「一次」コースを受験し、全員合格した。さらに、マタニティーヨーガやマタニティービクス、産褥体操など分娩や育児期の身体づくりやマイナートラブル緩和のための方法について、解剖生理も含め理論を教授したうえで、実際に体験した。

また、新生児の栄養について、桶谷式乳房ケアを行う臨床助産師を講師に招き、乳房トラブルの予防やマッサージの方法など、実際に乳房モデルや模型を使用して演習を行った。なお、様々な新生児の健康状態に合わせて対応できるよう、人工栄養の基礎知識についても教授した。学生はすべての講義・演習に積極的に参加した。

67）　助産保健指導演習

１年次前期後半
石岡 洋子、梅野 貴恵、樋口 幸、安部 真紀
　女性のライフサイクルにおける性と生殖に関する健康問題を理解するための講義と妊産褥婦に必要な保健指導について保健指導案及び指導用パンフレットの作成を行い学内で発表会を行った。また、学生は集団指導として、小学校で４年生を対象に性教育を実施した。

68）　分娩期実践演習

２年次前期
石岡 洋子、梅野 貴恵、樋口 幸、安部 真紀
　助産実践に必要な基本的な分娩介助技術を習得するための講義と演習を行った。
　女性の意志を尊重し、安全で安楽な分娩について考え、助産師として必要な役割や責任についても理解を深めた。

69）　助産過程展開演習

１年次後期
梅野 貴恵、石岡 洋子
　助産を実践するための基本的な助産過程の展開についてペーパーペイシェントを用いて習得し、実践へ応用する能力を身につけさせるために教授した。助産診断の概念・助産診断のプロセスを教授したのち、正常から逸脱した妊婦１事例、正常経過をたどる分娩期の事例１例、正常から逸脱する可能性の高い分娩期の事例１例の計３事例を用いて助産過程の展開を実施させた。事例の展開方法は各自で自己学習したのち、ディスカッションやグループワークを行った。自己学習やメンバー間での意見交換が活かされ、理解を深めることができていた。評価は、提出されたレポート、発表内容等から行った。

70）　助産マネジメント論

１年次後期
梅野 貴恵、宮﨑 文子、生野 末子、戸髙 佐枝子、越田 津矢美、安部 真紀
　助産師の職務、業務範囲および法的責任を理解し、助産業務を遂行するために必要な助産管理を教授した。主な内容は、管理の基本概念、助産管理の概念と助産業務管理、助産に関連する法規、助産所の経営管理と働く場の違いによる助産業務管理の特性、周産期管理システム、周産期におけ

る医療事故とリスクマネジメント、母子への災害看護等をとりあげ、オムニバス形式で実施した。評価は、筆記試験を実施した。

71） 地域母子保健学特論

２年次後期

梅野 貴恵、赤星 琴美、佐藤 貴子、吉冨 豊子

日本及び大分県の地域母子保健の現状について理解を深め、社会に求められる助産師の役割を明確にするための内容を教授した。母子保健の変遷、母子保健施策、母子保健の水準、育児を取り巻く社会環境についてオムニバス形式で実施した。

72） 助産マネジメント演習

２年次後期

梅野 貴恵、安部 真紀、生野 末子、菊池 聖子

助産業務の行われる病院・助産所において、母子保健医療チームの一員としての助産師の役割と責任を認識し、助産の対象者の健康管理や助産マネジメントを実践する能力を習得するための演習科目とした。地域周産期医療センターの母体搬送事例をもとに、施設助産師として求められる役割と助産ケアについてディスカッションし、シミュレーション学習をした。また、災害時の避難場所における母子への支援を想定してシミュレーション学習を行った。さらに、助産院の院長について日常的な助産管理全般を経験し学びを深め、将来の目標と自己の課題を明確にし、助産師としてのアイデンティティを培うことにつながった。

73） 分娩介助実習

２年次前期

梅野 貴恵、石岡 洋子、樋口 幸、安部 真紀

人間尊重の基本理念に基づき、新しい命の誕生に携わらせていただくことへの感謝と責任をもって、妊娠期から産褥・育児期まで継続して母子とその家族を受持ち、個別性に即した助産ケア実践能力を養うことを目的に８週間の実習を行った。実習施設は、診療所２施設と地域周産期医療センターである。分娩介助目標例数を 13 例以上として取り組み、12 例の実施となった。夜間・休日の実習や待機もあるため、実習４週目に帰学週をもうけ、身体を休め体調管理を優先させた。その後の実習も欠席することなく終了した。また、分娩介助例数すべての記録は過大な負担となることから記録物の見直しを行い、思考しながら実践ができるための記録内容に厳選したことで、１例１例を振り返り助産過程を展開することができていた。継続事例３例を妊娠期から産後１か月ま

で受け持ち助産実践を行うことで、継続支援の重要性と助産師としての役割を自覚することができた。

74） ハイリスク妊産婦ケア実習

２年次前期

梅野 貴恵、石岡 洋子

周産期におこる異常やリスクに対して的確な判断力と高い予見性、緊急事態に対応する能力を養うことを目的に３週間の実習を行った。実習施設は、総合周産期母子医療センターである。受持ち対象者のリスク状況を判断し、母児の安全に配慮し助産過程を展開することができた。総合周産期母子医療センターにおける助産師としての役割やチーム医療、他職種との連携等について学びを深めることができた。

75） 妊娠期課題探究セミナー

１年次後期

梅野 貴恵、石岡 洋子、樋口 幸、安部 真紀

妊娠期の助産診断技術を活用し、妊婦と胎児の健康水準を助産師が自律的に判断し、科学的根拠に基づいた助産診断を行い、さらに妊婦のニーズに寄り添い、安全で快適な出産を迎えるための保健指導ができる能力を身につけるための実習としている。前半の９週間で大分県立総合周産期母子医療センター産科外来、わたなべ助産院、生野助産院で実習し、12 月からは、堀永産婦人科、別府医療センターに分かれ実習した。２月第３週からは６～７月に出産する予定の妊婦を継続事例として受持ち、健診日に実習した。臨地での産科医師や助産師の指導を受けながら、超音波を用いた妊婦健康診査 20 例と個別に応じた保健指導の実際 12 例以上の目標は、到達することができた。

76） NICU 課題探究セミナー

１年次後期

梅野 貴恵、樋口 幸

ハイリスク新生児の生理的特徴を理解し子宮外生活適応の過程をアセスメントし、基本的ニーズに応じた看護を展開し、母子分離された母親とその家族への親子関係成立のための支援を実施するために、大分県立総合周産期母子医療センターNICU で、２週間実習を行った。学生はハイリスク新生児１名を受け持ち、受持ち児と保護者のニーズに応じた看護過程の展開を実施し、保護者への退院指導の一部を実施した。また、NICU に入院中の超低出生体重児の看護の実際や他部門

との連携を見学することで、母子分離された両親への愛着形成促進のケア、家族とのつながりを考えた育児環境の調整や助産師として妊娠期から果たすべき役割について学んだ。

77） 地域母子保健演習

２年次後期

梅野 貴恵、甲斐 慶子、渡邉 しおり

助産師として地域における母子保健ニーズに対応し、質の高い母子保健活動を展開する能力を養うための演習科目とした。別府市の母子保健事業の概要と母子保健の水準等を自己学習したのち、別府市の担当保健師とディスカッションを行い、母子保健環境の特性を理解した。４か月児健康診査、１歳６か月児健康診査に参加し、母親が抱える子育ての問題を理解し、解決へ向けた保健師の対応や地域における取組、他機関との連携を理解した。特に、４か月児健康診査では、継続事例または分娩介助実習での受け持ち母子の健診に付き添うことで、家族や地域の人に支えられ成長していく母子への助産師としての役割を認識することができた。大分市の４か月児健康診査は個別健診のため、堀永産婦人科の３か月児健診にも参加した。

78） 身体機能適応科学特論

１年次

稲垣 敦

身体運動に関連した論文を取り寄せて精読し、また、研究方法一般について学んだ。

79） 健康生理学特論Ⅰ

１年次前期

濱中 良志、安部 眞佐子、岩崎 香子

各臓器における正常の生理機能とその破綻した状態である疾患の病態生理を“対話形式”で授業を進めた。

80） 健康統計学特論Ⅰ

１年次後期

佐伯 圭一郎、野津 昭文

１名の受講者に対して、生物統計学のテキストに従って統計手法を解説した。また、統計ソフト

ウェア R のインストールから、実際の解析作業をテキスト練習問題について演習した。

81） 健康増進科学特論

１年次前期
安部 眞佐子、稲垣 敦
加齢と体力、エネルギー代謝、運動強度、身体活動量、呼吸循環器系持久力、筋力トレーニング、ストレッチ、運動処方、運動療法等について講義し、測定実習等を行った。

82） 健康運動科学特論 I

１年次後期
稲垣 敦
科学の特性について、具体例を上げて解説し、運動に関する基本的な事柄をとりあげ講義した。また、修士論文の計画作成や指導の中で、科学、健康、運動等について議論した。

83） 放射線生物物理演習

２年次前期
甲斐 倫明、小嶋 光明
CT 診断に伴う小児線量を WAZA-ARI を用いて計算し、施設による被ばく線量の分析を行った。施設差は、九州内の病院を調査して得た CTDI および DLP を参考に、線量計算との比較分析を行った。

84） 放射線保健学特論

２年次後期
甲斐 倫明、小嶋 光明
医療で利用される放射線・放射性物質と被ばくに伴う健康影響に関する基礎知識について教授した。さらに、医療および原子力災害における看護職の役割について教授した。放射線の健康影響については、高線量における臓器（胎児を含む）ごとの放射線傷害、低線量の放射線による健康リスクの推定問題を最新の科学レポートをもとに教授した。

85）　放射線健康科学演習

２年次後期

甲斐 倫明、小嶋 光明

最新の医療被ばくに関する原著論文をレビューし、論文の抄読と解説で演習を行った。取り上げた論文は次の通りである。

1) Huang W. BJR,2014; 2) Walsh L. JRP 2015; 3) Abe Y. Sci Rep, 2015 4) Journy N. Radiat Environ Biophys,2014; 5) Meulepas J. European J Epidemiol, 2014; 6) Journy N. JRP,2016; 7) Gonzalez AB BJC,2016.

86）　身体機能適応科学演習

２年次

稲垣 敦

歩行および加速度に関する論文を読み、関連する課題を設定し、この課題に取り組んだ。

87）　健康運動科学演習

２年次

稲垣 敦

身体活動や運動に関連するデータの収集・活用方法を学び、実際に調査や実験などデータを収集するところから実習した。

88）　特別研究（看護学専攻）

通年

指導教員：村嶋 幸代

副指導教員：福田 広美

学生ごとに担当教員が研究指導を行った。今年度は上記教員の指導により以下の論文が提出された。

・河野 優子：介護老人保健施設における診療看護師(NP)の導入効果
－感染による発熱のマネジメントに着目して－

89）　課題研究（助産学）

通年
指導教員：梅野 貴恵
副指導教員：石岡 洋子、樋口 幸
　学生ごとに担当教員が研究指導を行った。今年度は上記教員の指導により以下の論文が提出された。

・松尾 妃奈：９～11 か月児を養育する母親の子育て支援事業の認知と活用度の実態
・矢野 杏子：褥婦に対するマッサージ部位別の乳房表面温度変化と疲労の自覚についての比較

90）　課題研究（広域）

通年
指導教員：村嶋 幸代
副指導教員：佐伯 圭一郎
　学生ごとに担当教員が研究指導を行った。今年度は上記教員の指導により以下の論文が提出された。

・峰松 恵理：地域母子保健を通した効果的な糖尿病ハイリスク者の抽出方法
　　－妊娠糖尿病既往女性が産後３～15 年に糖代謝異常を発症するリスク分析

91）　課題研究（NP）

通年
指導教員：藤内 美保、福田 広美
副指導教員：小野 美喜、藤内 美保、福田 広美
　学生ごとに担当教員が研究指導を行った。今年度は上記教員の指導により以下の論文が提出された。

・大仲 将美：へき地診療所における NP 教育修了生の活動及び役割
・幸田 裕哉：老人保健施設における診療看護師（NP）チームによる高血圧症の入所者に対する血圧管理の効果
・髙瀬 絵美：在宅看護に従事する診療看護師（NP）の臨床推論と初期対応判断の思考過程
　　－発熱時の場合－

92）　課題研究（リカレント）

通年
指導教員：影山 隆之、村嶋 幸代、藤内 美保、小野 美喜、石田 佳代子
副指導教員：赤星 琴美、佐伯 圭一郎、佐藤 弥生、杉本 圭以子、小野 美喜、定金 香里
　学生ごとに担当教員が研究指導を行った。今年度は上記教員の指導により以下の論文が提出された。

・江藤 聖美：自殺予防に関連した事業の評価－今後市町村で取り組む方向性についての検討
・大島 敦子：保健指導特に特定検診後の医療受診勧奨に対する基準値の決まり方とそのアウトプットに関する検討
・武野 真澄：病院と地域の看護職のネットワーク構築における保健所保健師の役割
　－看護の地域ネットワーク推進事業を通して
・玉山 清美：整形外科疾患を持つ高齢者の身体抑制の予防的対応
　－看護師の身体抑制に対する判断基準の分析から
・津崎 眞由美：看護師間のいじめ・パワーハラスメント経験とコーピングアサーション及び離職意向との関連
・野口 直子：虚弱（フレイル）における概念分析

93）　特別研究（健康科学専攻）

通年
指導教員：甲斐 倫明、稲垣 敦
副指導教員：小嶋 光明、品川 佳満
　修士論文の指導は、指導教員による個別指導と、研究計画報告会、研究中間報告会および論文レビュー報告会での全教員が関わる討論によって行われた。
　下記の論文は論文審査会を経て学位審査に合格し、修士(健康科学)が授与された研究である。

・吉武 貴康：複数回 CT 検査を受けている小児の検査回数とその理由の分析
・大戸 元気：３軸加速度計を用いた歩行の個性の評価と歩行年齢の設定

３－８－２　博士（後期）課程

１）　看護基礎科学演習

後期

甲斐 倫明、市瀬 孝道、安部 眞佐子、稲垣 敦、佐伯 圭一郎、影山 隆之、吉村 匠平

チュートリアル方式で、各分野の教員が課題あるいは論文を与え、レポートあるいは課題に対するプレゼンを行い討論を行うスタイルで担当教員ごとに実施した。

２）　生命病態学特論

１年次前期

濱中 良志、安部 眞佐子、岩崎 香子

各臓器における解剖学・生理学・生化学の復習をした後、関連する重要疾患の病態生理を“質疑応答形式”で授業を進めた。

３）　環境健康科学特別演習

後期

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

大気汚染物質や風送ダスト、室内汚染物質（アレルゲンや NO2 等）や重金属による健康問題に関係する論文、大気汚染物質の雄性生殖機能に及ぼす影響やその次世代影響、ナノマテリアルの脳神経系への影響に関係する論文を購読し、これらを通して、その背景や原因物質、発症メカニズムを学び、現在重要な環境因子による健康問題を理解させた。

４）　特別研究（看護学専攻）

通年
主指導教員：影山 隆之、藤内 美保、村嶋 幸代
副指導教員：高野 政子、石田 佳代子、安部 眞佐子、福田 広美、Lee So Woo、小嶋 光明
　博士論文の指導は、指導教員による個別指導と、研究計画報告会および研究中間報告会での全教員が関わる討論によって、研究方法、結果の分析およぶ考察などの各指導が進められた。このうち下記の論文は上記教員が指導したもので、論文審査会を経て学位審査に合格し、博士（看護学）が授与された研究である。

・桑野 紀子：多様な文化・言語背景を持つ患者の看護における日本の看護職への自立性への影響要因
・秦 さと子：健常高齢者に対する嚥下反射機能低下予防方法に関する研究
・石丸 智子：救急外来部門における看護師のマネジメント能力測定尺度の開発

５）　特別研究（健康科学専攻）

通年
主指導教員：甲斐倫明
副指導教員：小野 美喜、小嶋 光明
　博士論文の指導は、指導教員による個別指導と、研究計画報告会および研究中間報告会での全教員が関わる討論によって、研究方法、結果の分析およぶ考察などの各指導が進められた。このうち下記の論文は上記教員が指導したもので、論文審査会を経て学位審査に合格し、博士（看護学）が授与された研究である。

・松本 真之介：小児陽子線治療に伴う二次中性子からの臓器線量の低減に関する研究

３－９　ボランティア活動

１）　富士見が丘団地「夏祭り」

宮内 信治

１年次生：明石 さやか、安達 有香、池永 莉那、岡崎 真里、兒玉 快、後藤 壮登、小松 献慈、関 栞奈、高倉 千裕、田崎 凌平、長野 希恵、野田 裕美、羽田野 朱音、帆足 菜々香、松岡 賢人、奥野 晴香、下川 裕子、馬場園 綾、樋口 美希、福原 真実、堀 絵美、桝田 志帆、宮崎 絵美、山本 翔平、吉木 彩佳

トキハインダストリー富士見が丘店周辺で開催された富士見が丘団地「夏祭り」（７月 18 日-19 日）で、会場設営、盆踊り、屋台、各種イベント参加を行った。参加学生は以下の通り。

２）　富士見が丘団地連合自治会「文化祭」

宮内 信治

１年次生：青木 弥織、後藤 洋史、繁田 采佳、塚原 竜太、中村 智子、羽田野 樹里、原田 こなみ、福原 真実、三浦 有貴、宮本 希歩、山本 翔平、吉住 渚、綾木 萌衣、加藤 瑠華、下城 芽生、下手 愛千音、戸倉 千歌、西岡 綾乃、野田 裕美、藤沢 彩花、堀江 真生、三代 愛恵

富士見が丘団地連合自治会主催の「文化祭」（11 月 14 日-15 日）で、自宅開放町中ギャラリーの各会場受付などの手伝いを行った。

３）　横瀬小学校夏休み算数教室採点ボランティア

宮内 信治

２年次生：西野 あやめ、米原 聖佳、仲道 智子、野中 美南、山口 奏恵、高濱 唯、富久保 美咲、松本 未稀、田邉 千尋、﨑平 藍、天野 佑香、成安 莉歩、宮子 朱音、後藤 麻乃、溝口 なつき、松延 朋実、坂元 彩乃、山本 美咲、大畑 杏奈、福元 弥佳、木村 朱里、野田 優奈、橋立 紗亜弥、波多野 ひかり

横瀬小学校で開講される夏休み算数教室（７月 21 日～27 日）において、ボランティアにて小学４年生から６年生の算数課題の採点を行った。

４）　第 39 回収穫祭

伊東 朋子

１年次生：麻生 祐華、井崎 紫帆、石松 菜摘、井上 七海、内田 汐里、内野 碧、大嶋 花奈、甲斐 百佳、加藤 瑛可、川久保 潮音、下川 裕子、中村 智子、西村 咲希、松永 知亜紀、吉田 有里

第 39 回収穫祭(11 月３日　福祉農場コロニー久住)にボランティア活動の要請があり 15 名の学生とともに参加した。入所者への支援や会場準備、入所者とともに行う物品販売等のボランティア活動を行った。

５）　第 21 回日本 ALS 協会大分県支部総会

伊東 朋子

１年次生：雄山 勇気、甲斐 好恵、児玉 快、小松 献慈、園木 裕子、帆足 菜々香、桝田 志帆

２年次生：中川 穂南、東 真由

４年次生：金子 陽菜、國武 美希

第 21 回日本 ALS 協会大分県支部総会が５月 31 日に大分県立病院で行われ、患者・家族のつどいに参加した。会場準備、受付、患者の移動介助、司会補助等を行った。

６）　夏休み子どもサイエンス 2015

定金 香里

４年次生：安倍 桜子、岩本 綾香、若竹 理沙、小畑 春香、川野 桃

大分大学で行われた「夏休み子どもサイエンス 2015」（８月２日、共催：大分大学、本学、大分県理科・科学教育懇談会 他）に指導員として参加した。本学は、「色が変わる不思議な花」という実験テーマで、４回に分けて、小学４年生～６年生とその父兄、計 76 組に対し実験を行った。

４ 学内セミナー

４－１　CALL 英語学習システム講座

CALL システムについて、授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうため、7 月 19 日（日）のオープンキャンパスにて、模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際に CALL システムを体験してもらい、授業への理解を深めてもらった。

５ 学内プロジェクト研究

５－１　プライマリケア領域の特定看護師のアウトカム指標開発のための基礎的研究

研究者　藤内 美保、石田 佳代子、小野 美喜、甲斐 倫明、草野 淳子、佐伯 圭一郎、高野 政子、福田 広美、松本 初美、宮内 信治、村嶋 幸代

本研究では、1）日本独自の制度の中で、特定看護師がどのような役割をもち、どのような効果を導いているのか、研究を蓄積する。2）特定看護師の活動の場による役割や効果を導き、共通性や特徴を明らかにする。3）プライマリケア領域の特定看護師の効果指標開発のための基礎的指標を示すとともに、今後の効果を示す研究の示唆を得ることを目的にした。

医学中央雑誌および PubMed データベースで、「特定看護師/診療看護師/NP/事業対象看護師と効果」、「Nurse practitioner and outcome」のキーワードでヒットした文献を入手し、熟読して、プライマリケア領域の効果を示している論文 22 件を対象とした。

特定看護師の活動の特徴や役割を示したコード : 65 件、「効果」を示したコード : 115 件であった。「効果」の対象別では、患者・利用者・家族 : 25 件、看護職 51 件、医師 13 件、医療チーム・介護職 22 件、施設・地域 4 件であった。「効果」のカテゴリは 6 つ抽出され、「安心・信頼の提供」「安全強化」「生活基盤の安定化、QOL 向上」「症状マネジメント」「効率的な医療サービス」「質向上に貢献」に分類された。

特定看護師の効果は、医学的知識・技術を有しかつ看護の視点があるという活動の特徴や医療チームを繋ぐ役割から「安心感の提供」「安全強化」「生活基盤の安定化、QOL 向上症状マネジメント「効率的な医療サービス」「質向上に貢献」の効果に繋がっていた。 また、特定看護師が及ぼす効果は、患者・家族、医師、看護師、医療福祉従事者、施設や地域にまで及んでいた。また、本研究プロジェクトにより、6 件の研究を公表し、今後公表予定の研究は 4 件あり、今後もさらに活動の成果を公表する重要性を感じている。

５－２　健康増進プロジェクト

研究者　稲垣 敦、佐藤 玉枝、赤星 琴美、緒方 文子、佐藤 愛、秦 さと子、巻野 雄介、田中 佳子、河野 優子、安部 真紀

1．3 軸加速度計を用いた歩行の個性の評価と歩行年齢の設定

本研究では歩行時の加速度から（1）歩行の個性を評価する、（2）年齢の単位で歩行を評価する、すなわち歩行年齢を設定することの 2 つを目的とした。被験者は 18 歳以上の健常成人女性 102 名であり、年齢、下肢整形外科疾患の有無、運動歴を聴取し、形態（身長、体重、大腿長）、筋力（握力、中殿筋、大腿四頭筋）、バランス（閉眼片脚立ち、2 ステップテスト）、10m歩行（タイム、歩数、歩幅、ケイデンス、加速度）の測定を行った。3 軸加速度計は第 3 腰椎棘突起を目安に専用のマジックテープ（Micro Stone 社）で固定した。22 種類の加速度指標に主成分分析を適用した結果、歩行の動揺性を示す 3 軸の RMS（Root Mean Square）と歩行の規則性を反映する ACAP-ss（前後方向における 1 歩の自己相関係数）が選ばれ、これら 4 指標により歩行の個性を評価が可能であった。また、第一主成分と最も高い相関係数を有する RATA（3 軸合成加速度のピーク値）の一次式で歩行年

齢を設定した。

2. 温泉入浴におけるストレス低減要因

本研究は、温泉によるリラクゼーションやストレス低減に有効である特性を「温泉によるストレス低減要因」と命名し、どの特性が重要であるかを唾液アミラーゼ活性から明らかにすることを目的とした。被験者は健康な男性 16 名、女性 15 名の計 31 名（19-56 歳）であった。ストレスの定量化のために、唾液アミラーゼモニター（NIPRO 社）を使用した。調査当日、研究者が温泉施設に同行し、唾液アミラーゼ測定後、温泉入浴を実施した。出浴後直ちに、唾液アミラーゼ測定を実施し、チェックリストに記入した。分析の結果、入浴による唾液アミラーゼの変化傾向には性差が認められた。また、ストレス低減に関係する特性にも性差があり、男性では浴室の温度と周辺環境、女性では浴室の広さと脱衣所の広さであった。ストレスには主観的側面があり、性差や個人差があるため一般的な結論は得にくいが、個人の特性を考慮することで温泉のストレス低減効果をよりいっそう活用することができると考えられる。

3. 登山による心理的効果

本研究では登山を健康運動の視点から捉え、登山前後の心理的状態を質問紙調査票で測定し、登山の心理的効果を明らかにすることを目的とした。調査 1 では、登山で生じた心理的な変化や態度・行動の変化を自由記述法で無記名で回答する調査票を久住山（1787m）山頂付近で登山者 66 名に実施した。回収後、回答内容を項目化し、12 項目の心理的特性に当てはまる程度を 7 段階評価する調査票を作成した。調査 1 で得られた登山の心理的効果を実証するため、調査 2 では、登山経験および運動習慣をあまり有さない大学生 9 名と大学院生 2 名の計 11 名（男性 7 名、女性 4 名）と由布岳（1584m）に登り、登山口と山頂でこの調査を実施した。調査 1 では、90%の対象者が達成感を上げた。回答内容を項目化した結果、①達成感、②向上心、③喜び、④開放感、⑤充実感、⑥ストレス、⑦他人とのつながり、⑧自分自身に対する自信、⑨やる気、⑩疲労感、⑪忍耐力、⑫不安の 12 項目が得られた。調査 2 では、登山前と山頂を比較すると、⑥ストレス、⑫不安の得点は低下し、それ以外の項目では増加した。調査時点（登山口と山頂）の効果が有意であったのは、①達成感、②向上心、③喜び、④開放感、⑤充実感、⑦他人とのつながり、⑧自分自身に対する自信、⑩疲労感、⑪忍耐力であり、⑥ストレス、⑨やる気、⑫不安では有意差が認められなかった。また、⑦他人とのつながりでは、性別との間に有意な交互作用が認められ、男性と比較して女性の増加はわずかであった。以上の結果及び過去の研究から、登山は身体的効果のみならず、精神的健康を維持増進するための優れた健康運動であると考えられる。

５－３　健康増進プロジェクト

研究者　佐藤 玉枝、影山 隆之、藤内 美保、甲斐 倫明、市瀬 孝道、小野 美喜、福田 広美、岩崎 りほ、堤 健一、橋本 満男、岩崎 瑞穂、江田 真砂実、神崎 純子、巻野 希和、板井 里枝、村嶋 幸代

文部科学省地（知）の拠点整備事業として平成25年度から採択された「看護学生による予防的家庭訪問実習を通した地域のまちづくり事業」は三年目を迎え、全学の必修科目として実習を本格スタートさせる年度となった。同事業は基本的には全学教職員で取り組むものであるが、ＣＯＣプロジェクトはその中心となって事業実施計画と事業評価計画を検討し、実学外の関係協力機関・団体と事業推進会議の場を設け、実務部門、教育部門、事業評価部門に相当する教職員スタッフと連携して、本事業推進の責任を担った。

１）事業推進会議

学外の協力機関・団体の担当者を招き、６月９日、10月13日、２月９日の３回開催した（出席者はそれぞれ37、34、34人）。事業の進捗状況を報告し、基本方針について協議して関係機関・団体の協力を仰ぐとともに、地域の人々から見た学生と事業の様子について報告と意見を求めた。

２）地域連絡会議

富士見が丘地区と野津原地区のそれぞれで５月 26 日、10 月２日に２回ずつ開催し、自治会関係者と実務的な協議を行った。

３）学内プロジェクト会議

事業全体の基本計画を協議するために、５月22日、９月24日、１月26日の３回開催した。

４）実務部門

学生グループの編成と担当教員の割り当てを担当した。

５）教育部門

看護研究交流センター教職員が中心となって実習要綱を作成し、全学オリエンテーション（４月14日、６月18日）を開催し、事業報告会（地域交流会）を14回開催し、学生レポート提出システムを整備し、レポートの確認と単位認定の作業を行った。

６）事業評価部門

実習協力者と対照群の調査、および学生への教育効果の評価について、方法を検討して着手した。コロラド大学 Magilvy 名誉教授を招聘し、事業と事業評価についてコンサルテーションを求めた。

７）広報事業

看護研究交流センターが中心となって、日本文理大学との共同記者会見（４月 28 日）、日本文理大学と合同の成果発表会＆シンポジウム（２月 11 日）を開催し、オープンキャンパス等で事業について PR を行い、マスコミ取材に対応した。

６ 先端研究

６－１　医療的ケアを必要とする在宅療養児の母親の看護力の形成を図るプログラムの開発

研究者　草野 淳子、高野 政子、足立 綾

研究１として、医療的ケアが必要な子どもの母親が子どもの身体状況を理解し、ケアを判断し、実施していくプロセスを明確にし、概念の構成を明らかにした。対象者はＡ県とＢ県の訪問看護サービスを受けている、在宅で生活する医療的ケアが必要な子どもの母親 15 人であった。調査期間平成 25 年９月から平成 26 年６月であった。方法は半構成的面接法で行った。データの分析方法は修正版グランデッド・セオリー・アプローチ（以下 M-GTA）を用いた。『ケアの根拠の気づき』『分析的思考の取得』『察知可能になる』の３つのカテゴリーを生成した。段階に応じた看護師の支援が必要であった。最終段階では、母親はわが子に対して、専門家より熟練したケア提供者となり、看護師は実際的サポートや緊急時の判断を求められていた。研究２として、全国の在宅療養児への訪問看護師の介入に対する母親の認識を明らかにした。対象者は全国の訪問看護を利用する在宅療養児の母親とした。平成 26 年９月～12 月に無記名の自記式質問紙を配布し実施した。質問紙 1740 部を配布し、207 部の回答が得られ、205 部を分析した（有効回答率 11.8%）。訪問看護を利用している在宅療養児は５歳以下の乳幼児が多く、医療依存度が高かった。先行研究では呼吸器系疾患は１割弱であったが、本研究では３割強に増加していた。訪問看護師は、在宅療養児に頻回な訪問を行い母親のケア負担の軽減ができていた。研究１と研究２より母親の看護力形成を図る看護プログラムを提案することを継続課題とする。

６－２　教育課程別保健師教育における技術項目と卒業時到達度に関する調査研究 －保看統合大学と保健師選択大学の縦断的調査－

研究者　赤星 琴美、佐藤 玉枝、緒方 文子、佐藤 愛、岩﨑 りほ、村嶋 幸代

平成 21 年度に保健師助産師看護師法が改正され、保健師の教育年限が６か月から１年間に延長、指定規則も改定され、保健師教育も変化の時期に来ている。学士課程保健師養成を学部の保看統合カリキュラムを実施している大学（保看統合コース）と学部の保健師教育に選択制を導入し一部の学生にのみ実施している大学（保健師選択コース）がある。教育課程別に４年次終了時での学生の到達度を明らかにすることを目的とした。保看統合コース５大学 357 名(以下、保看統合)、保健師選択コース６大学 204 名(以下、保健師選択)の計 561 名を対象に 2015 年 11 月～12 月に、郵送による無記名自記式質問紙調査を実施した。保看統合 242 名、保健師選択 124 名の回答（有効回答率 67.8%、60.8%）を分析対象とした。大項目（個人/家族）のうち、「Ⅰ：地域の健康課題を明らかにし、解決・改善策を計画・立案する」では、保看統合は 4.16±0.62 点、保健師選択は 4.19±0.58 点であった。「Ⅱ：地域の人々と協働して、健康課題を解決・改善し、健康増進能力を高める」では、保看統合は 3.98±0.66 点、保健師選択は 3.99±0.63 点であった。「Ⅲ：地域の健康危機管理を行う」では、保看統合は 3.21±0.92 点、保健師選択は 2.91±0.78 点であった。($p<.000$)「Ⅳ：地域の人々の健康を保障するために、生活と健康に関する社会資源の公平な利用と分配を促進する」では、保看統合は 3.25±0.92 点、保健師選択は 3.04±0.76 点であった。($p<.001$)「Ⅴ：保健・医療・福祉及び社会に関す

る最新の知識・技術を主体的に学び、実践の質を向上させる」では、保看統合は 3.50±1.00 点、保健師選択は 3.23±0.85 点であった。(p<.000)

６－３　カロリー制限が放射線照射したマウス造血幹細胞の細胞動態に与える影響

研究者　小嶋 光明

カロリー制限が放射線誘発急性骨髄性白血病（rAML）の発症率を抑制することが報告されている。これまでの研究で、rAML を発症した C3H マウスの約 90 %は２番染色体上の Sfpi1/PU.1 遺伝子の欠失と、対立する２番染色体上の Sfpi1/PU.1 遺伝子に点突然変異が生じているがわかっている。これらの異常のうち前者は放射線照射後 24 時間で生じることが明らかにされているが、後者の生成メカニズムはわかっていない。本研究では放射線による造血幹細胞（ HSC）の細胞動態の変化が Sfpi1/PU.1 遺伝子に点突然変異を引き起こす原因になると考えた。そこで、カロリー制限が放射線照射後の HSC の細胞動態にどのような影響を与えるのか明らかにすることを目的として、7 週齢の C3H マウス（雄）を 95 kcal/週（非カロリー制限群）または 65 kcal/週（カロリー制限群）になるように餌の量を調整して飼育した。飼育を開始してから 1 週間後に両群に 3 Gy の X 線を全身に照射し、7 日目、30 日目、140 日目、365 日目に大腿骨から HSC を単離し、細胞数を指標として細胞動態の変化を調べた。その結果、カロリー制限群では放射線照射後の HSC 数の回復が比較的早い段階で生じていることがわかった。これに対して、非カロリー制限群では放射線照射後長期にわたり HSC 数の増加が生じている傾向が観察された。今後、365 日目まで観察するとともに、rAML に必須な Sfpi1/PU.1 遺伝子の発現割合も解析し、カロリー制限が rAML の発症を抑制するメカニズムを検討する。

６－４　慢性腎臓病骨ミネラル代謝（CKD-MBD)における骨細胞機能の役割

研究者　岩崎 香子、丸山 徹、高垣 裕子

慢性腎臓病（CKD)では骨ミネラル代謝異常（MBD）が生じ予後が不良となる。MBD の主な病態として血中リン濃度亢進と骨折リスクの上昇が挙げられる。リン濃度の調節には FGF23 が、骨折リスクの増大には sclerostin 濃度が関与するが、CKD 患者ではこれらの血中濃度が異常に高い。しかしながらその理由は不明である。本研究では FGF23、sclerostin 産生細胞である骨細胞に着目して検討した。骨細胞に CKD 特異的な尿毒症物質を添加したところ、FGF23 ならびに sclerostin 産生が亢進することが確認された。また酸化ストレス亢進によるアポトーシスが誘導され、骨細胞の生存が低下した。これらの結果から尿毒症物質によって生じる骨細胞機能の変化が MBD を増悪させる可能性が考えられた。今後、機序に関する詳細な検討が必要である。

7 奨励研究

7－1　複数評価者が共通の対象者を評価する場合の回帰分析

研究者　野津 昭文、石川 勝彦

例えばフィギュアスケートの採点では、複数の審査員が同じ選手を採点する。このとき選手の得点は、選手の特性と審査員の特性に影響されると考えられる。得点に対するこれらの特性の影響を評価するために、回帰分析が用いられる。採点者が１人の場合は、既に適用可能な統計モデルが開発されている。しかし、審査員が複数の場合、このようなデータを表現する統計モデルはいまだ提案されていない。本研究ではこのような場合にも適用できる新たな統計モデルを提案する。

7－2　胎脂過酸化脂質が皮膚に与える影響～正常ヒト新生児表皮角化細胞 NHEK（NB)を用いた in vitro 実験～

研究者　樋口 幸

近年、早期新生児期の皮膚を覆っている胎脂を温存するドライテクニックが導入されている。胎脂には保湿や抗酸化など新生児の皮膚に有効な成分が含まれていることが明らかにされているが、実際に胎脂を温存することが新生児の皮膚にどのような影響を及ぼすのか、詳細に検討したものはない。平成 26 年度の予備実験により、新生児の皮膚細胞で過酸化水素が炎症因子（IL-1α）の増加や細胞生存率の低下を確認し評価系を確立させた。そこで本研究では、新生児より採取した胎脂を用いて、胎脂過酸化脂質がヒト新生児皮膚角化細胞に与える影響を明らかにすることを目的とした。

新生児から採取した胎脂を濃度調整し、新生児由来ヒト新生児表皮角化細胞 NHEK（NB）に所定時間（60 分）添加した後、４時間後の細胞生存率への影響と、ELISA 法を用いて培養液中の炎症性サイトカイン（IL-1α,IL-8,TNF-α）の発現を解析した。

その結果、NHEK(NB)に胎脂を添加すると、0.003%から濃度依存的に生細胞数が低下する傾向がみられた。炎症性サイトカインについては、生細胞数の低下のない濃度でも IL-1α の増加がみられ、細胞生存率が最も低い濃度（0.03%）で最も低値を示し、IL-8 は生細胞数が半数の濃度以上になると発現が増加する傾向であることが確認できた。TNF-α はいずれの濃度においても検出されなかった。IL-1α は細胞ダメージを早期に評価している可能性があり、また IL-8 は好中球の遊走を誘導するため、好中球性の炎症を引き起こすリスクが考えられる。現段階の結果とケラチノサイトの免疫反応における役割から、出生後の母体外環境下において胎脂は、ケラチノサイトを刺激し、細胞ダメージや好中球性の炎症を誘引する可能性が示唆された。

今後は、対象数を増やして NHEK(NB)における胎脂の酸化ストレスの影響を、抗酸化剤を用いて炎症性サイトカインの発現を抑制効果も含めて評価を行うとともに、mRNA による遺伝子発現など詳細に検討を行っていく必要がある。

７－３　外国人患者ケアに関する看護職者向け研修プログラムの効果

研究者　桑野 紀子、崔 明愛、安部 永理香

在留・訪日外国人の増加に伴い、医療の現場でも看護職が外国人患者をケアする機会が増加しているが、日本の看護師は外国人患者をケアする際、文化・言語背景の違い等により様々な葛藤や困難に直面していると報告されている。そこで本研究では、外国人患者へのケアにおける困難感を軽減すると共に、ケアの質向上をめざした臨床看護師向け研修プログラムを策定・実施し、その効果を検証することを目的とした。

本研究では、まず日本人看護師の外国人患者に対する態度、経験、および文化的感受性について現状調査を行った上で、研修プログラムの実施と効果検証を行うこととし、本年度は第一段階として看護師 108 名を対象とした質問紙調査を行った。

その結果、外国人患者に関する知識の情報源は臨床の場に限定されており、外国人患者のケアに関する経験については、十分ケアできたという満足を得られず、コミュニケーションにも満足しなかった対象者が多かった。また、外国人と関わることに自信がない傾向が明らかになった。今後外国人患者の増加は必至である。日本の看護師が日本人と異なる文化・言語背景をもつ外国人患者にも安心・安全な看護を提供できるよう、研修等で準備性を高めていく必要があると考える。

７－４　助産師学生への超音波診断装置を用いた教育に関する調査研究

研究者　安部 真紀、梅野 貴恵、樋口 幸、石岡 洋子

近年、周産期医療の現場では産婦人科医師不足や分娩取扱い施設の減少などから、助産師が産科医師と連携・協力してその専門性をさらに活用することが求められている。厚生労働省は今後強化されるべき助産師の役割と機能に「超音波診断装置を用いた妊婦健康診査」を掲げているが、助産師教育における実施経験不足が指摘されている。しかし、超音波診断装置の実施時間数の不足が経験不足と判断されるのか、実施経験の到達度（ミニマムエッセンシャルズ）が曖昧な為、経験不足と判断されるのか判断の基準がわかっていない。そこで本研究は、全国の助産師教育における超音波診断装置を用いた教育の現状と課題を明らかにすることを目的とし、全国の助産師養成学校 174 校の助産師教育養成責任者を対象に質問紙調査を行った。調査内容は、超音波診断装置を用いた教育内容（教育時間、講義・演習内容、使用教材、講義・演習・実習の到達度設定、指導者）であり、現在調査分析中である。

７－５　放射線照射マウスの骨髄細胞における酸化ストレスの長期的フォローアップによる急性骨髄性白血病との関連分析

研究者　石川 純也

放射線によりヒトに引き起こされる代表的ながんとして、急性骨髄性白血病（rAML）が挙げられる。これまでに rAML の実験用動物としてよく知られている C3H/HeNJcl マウスを用いた研究で、rAML の発症には、放射線照射後約 1-2 年の潜伏期間と、２番染色体の欠失およびその対立する２番染色体上の sfpi1 遺伝子の点突然変異が必須であることが明らかにされている。しかし、どのようなメカニズムで sfpi1 遺伝子の点突然変異が生じるのかは分かっていない。そこで、本研究では 8 週齢の雄の C3H/HeNJcl マウスにγ線を照射し、造血幹／前駆細胞を単離して、生存率、活性酸素量、8-OHdG 発生頻度（点突然変異の指標）の経時的変化を解析した。生存率は 0 Gy 群の細胞数を 1 としたときに、3 Gy 群では照射後 1 日目に 0.27±0.05 まで減少した。その後は増加傾向を示し、照射後 30 日目には 0.87±0.12 まで回復した。1 Gy 群では照射後 7 日目に 0.73±0.35 まで減少し、30 日目には 0.77±0.32 まで増加した。さらに 200 日目までに増加を示したものの、照射後 400 日目では、いずれの群も減少していた。

活性酸素種量は 3 Gy 群では照射後 1 日目および 7 日目において 0 Gy 群より高い値を示し、30 日目には 0 Gy 群と同等レベルとなった。照射後 1 日目は生存率が劇的に減少し、7 日目は生存率の増加傾向を示した時期である。活性酸素種は細胞分裂に伴って精製される。よって 3 Gy 群に見られた活性酸素種量の経時的変化は、減少した細胞数を補うための細胞分裂を反映しているのではないかと考えられた。それとは対照的に、生存率が低下していた照射後 400 日目でも活性酸素種量が増加していた。この生存率の低下と活性酸素種量の増加は、もしかしたら放射線により誘発された細胞分裂の結果もたらされた長期的な骨髄抑制の一部なのかもしれない。

点突然変異発生頻度は 1 Gy 群および 3 Gy 群ともに照射後 30 日目にかけて増加傾向を示したが、その後は非照射群と同程度もしくは減少していた。8-OHdG は活性酸素種によって生成されるが、今後の更なる分析が期待される。

７－６　市町村保健師の職業的アイデンティティの構造

研究者　岩崎 りほ、蔭山 正子、永田 智子

市町村保健師の職業的アイデンティティの構造を明らかにすることを目的に、首都圏の保健師 25 名に半構造化インタビューを実施した。グラウンデッド・セオリー・アプローチによる質的分析を実施した結果、三つのアイデンティティ、≪直接的な対人支援を通して保健師であることを実感する≫、≪行政組織の中で働くことで保健師であることを実感する≫、≪よりよい地域づくりのために働くことで保健師であることを実感する≫が抽出された。

市町村保健師はこれらのアイデンティティの安定、揺らぎを経験し、かつ、アイデンティティ同士で共存・対立・葛藤があった。コアカテゴリーとして、[対人支援をする自分と行政組織で働く自分が共存・対立・葛藤しながら、よりよい地域づくりのために働くことで保健師であることを実感する]が示された。

７－７　地域で活動するゲートキーパーが自殺念慮者へ行えた対応の実際

研究者　後藤 成人

自殺対策におけるゲートキーパー（以下 GK）は、地域の自殺念慮者を支援する人々である。実際に地域では、多くの GK が活躍しているが、自殺念慮者に実際に行えた対応を評価した報告は少ない。実践の中で GK が自殺念慮者へ行えた対応を評価することは、今後の GK 教育を検討する際に有意義である。そこで、過去に教育を受け、地域で活動している GK が実際に自殺念慮者へ行った対応を明らかにすることを目的に、郵送法による無記名自記式質問紙調査を行った。その結果、地域で活動する GK は、自殺念慮者と出会ったときに、「定期的に訪問して声をかけた」、「ゆっくりと話を聞いた」、「電話相談を勧めた」、「保健師へ報告、相談をした」などの対応を行っていることが分かった。今後の GK 教育の内容に、声かけや傾聴のスキルアップを図るものや、自殺念慮者を専門家に繋ぐための具体的な方法が伝わるようなものを含むと、GK の活動をさらに促進する可能性がある。

８ インターネットジャーナル「看護科学研究」

「看護科学研究」13 巻２号（平成 27 年７月）、14 巻１号（平成 28 年３月）を発行した。

第 13 巻２号　目次

研究報告

「看護基礎教育における静脈注射に必要な解剖・生理学の教授内容に関する実態調査」

山田 直己、篠崎 惠美子、栗田 愛、西 由紀、藤井 徹也

‘The sensory nerves that innervate the area near the K-point’

Rie Shimotakahara, Kazuharu Mine, Shigemitsu Ogata

資料

「小児救急外来を受診した保護者のインターネット利用実態と受診判断」

草野 淳子、高野 政子、藤田 裕子

＜企画＞「大分県立看護科学大学 第 15 回看護国際フォーラム」

‘Strategies for promoting and evaluating community care’

Insook Lee, Soong-nang Jang

第 14 巻１号目次

資料

「在宅における終末期患者の死亡確認の現状と特定看護師の役割

－訪問看護師のインタビューから－」

長谷川 健美、高野 政子、市瀬 孝道

＜企画＞

「大分県立看護科学大学 第 16 回看護国際フォーラム」

「日本における NP 教育開発のプロセスと現在」

藤内 美保

「大学院修士課程における NP 課程修了生の活動と成果」

小野 美喜

「大分県立看護科学大学大学院修士課程における NP 教育の展望と課題

－『特定行為に係る看護師の研修制度』創設を踏まえて－」

村嶋 幸代

９ 業績

著書

赤星 琴美、村嶋 幸代

公衆衛生領域における連携と協働～理念から実現に向けて～, 第２章　地域保健と学校保健との連携・協働, ２．看護関係職種に求められる連携と協働, 43-49, 一般社団法人 日本公衆衛生協会, 東京都, 2015

光根 美保、石田 佳代子、財前 博文

ナースが症状をマネジメントする！症状別アセスメント 第Ⅱ章 症状別アセスメント　9 高血圧症, メヂカルフレンド社, 東京都, 2016

小野 美喜

症状別アセスメント,メジカルフレンド社, 東京都, 2016

影山 隆之

電話相談とコミュニティの関係（吉川武彦、高塚雄介編：電話相談の活用のすすめ 心の危機と向き合う pp.84-96）, 遠見書房, 東京都, 2015

藤内 美保

ナースが症状をマネジメントする！症状別アセスメント 第Ⅰ章 症状アセスメントのための基礎知識, メジカルフレンド社, 東京, 2016

村嶋 幸代、藤内 美保、小野 美喜

平成 27 年版 看護白書 第３章 事例：大分県立看護科学大学の取り組み 「特定行為に係る看護師の研修制度」について, 日本看護協会出版会, 東京, 2015

武藤 孝司、磯 博康、村嶋 幸代（編集）

公衆衛生領域における連携と協働～理念から実現に向けて～, 一般社団法人 日本公衆衛生協会, 2015

福田 広美

ナースが症状をマネジメントする！症状別アセスメント, メヂカルフレンド社, 東京都, 2015

翻訳

Myoung Ae Choe

Gould’s Pathophysiology for the Health Professionals, 5th edition by Karin VanMeter and Robert Hubert,Gaechuk Publishing Co.,Seoul, Korea,2015

研究論文

赤星 琴美、村嶋 幸代 : 保健師の基礎的教育・アドバンス教育－地方創生に不可欠な人材として力を発揮するためにー, 保健の科学, 58(2), 115-120, 2016

Ishikawa J., Hayashi N., Yamaguchi M., Monzen S., and Kashiwakura I.：Characteristic of human hematopoietic stem/progenitor cells exposed to ionizing radiation in cytokine- free conditions.,Journal of Radiation Research,Epub, in press

Murakami S., Yoshino H., Ishikawa J., Yamaguchi M., Tsujiguchi T., Nishiyama A., Yokoyama K., and Kashiwakura I.：Effects of ionizing radiation on differentiation of murine bone marrow cells into mast cells,Journal of Radiation Research,56 (6), 865-871, 2015

Hirouchi T., Ito K., Nakano M., Monzen S., Yoshino H., Chiba M., Hazawa M., Nakano A., Ishikawa J., Yamaguchi M., Tanaka K., and Kashiwakura I.：Mitigative effects of a combination of multiple pharmaceutical drugs on the survival of mice exposed to lethal ionizing radiation,Current Pharmaceutical Biotechnology, 17, 190-199, 2015

石丸 智子：実践の語りから考察する救急外来における看護師のマネジメント能力‐A 全次型救命救急センター救急看護師の語りから‐, 日本救急看護学会雑誌, 18(1), 37-44, 2016

He M., Ichinose T., Ren Y., Song Y., Yoshida Y., Arashidani K., Yoshida S., Nishikawa M., Takano H., and Sun G.：PM2.5-rich dust collected from the air in Fukuoka, Kyushu, Japan, can exacerbate murine lung eosinophilia,Inhal Toxicol, 28, 1-13, 2015

He M., Ichinose T., Song Y., Yoshida Y., Kobayashi F., Maki T., Yoshida S., Takano H., Shibamoto T., and Sun G.：The Role of Toll-Like Receptors and Myeloid Differentiation Factor 88 in Bjerkandera adusta-Induced Lung Inflammation. ,Int Arch Allergy Immunol, 168(2), 96-106, 2015

He M., Ichinose T., Song Y., Yoshida Y., Bekki K., Arashidani K., Yoshida S., Nishikawa M., Takano H., Shibamoto T., and Sun G. : Desert dust induces TLRs signaling to trigger Th2-dominant lung allergic inflammation via a MyD88-dependent signaling pathway, Toxicol. Appl. Pharmacol, 297, 41-55, 2016

He M., Ichinose T., Kobayashi M., Arashidani K., Yoshida S., Nishikawa M., Takano H., Sun G., and Shibamoto T. : Differences in allergic inflammatory responses between urban PM2.5 and fine particle derived from desert-dust in murine lungs. ,Toxicol. Appl. Pharmacol, 296, 61-72, 2016

Yanagisawa R., Koike E., Win-Shwe T.T., Ichinose T., and Takano H. : Low-dose benzo[a]pyrene aggravates allergic airway inflammation in mice, J Appl Toxicol, doi: 10.1002/jat.3308, 2016

Michikawa T., Ueda K., Takeuchi A., Kinoshita M., Hayashi H., Ichinose T., and Nitta H. : Impact of short-term exposure to fine particulate matter on emergency ambulance dispatches in Japan, J Epidemiol Community Health, 69(1), 86-9, 2015

Michikawa T., Ueda K., Takeuchi A., Tamura K., Kinoshita M., Ichinose T., and Nitta H. : Coarse particulate matter and emergency ambulance dispatches in Fukuoka, Japan: a time-stratified case-crossover study, Environ Health Prev Med, 20(2), 130-6, 2015

Iwasaki Y., Kazama J.J, Yamato H., Matsugaki A., Nakano T., and Fukagawa M. : Altered matrial properties are responsible for bone fragility in rats with chronic renal injury, Bone, 81, 247-254, 2015

Kazama J.J., Matsuo K., Iwasaki Y., and Fuakgawa M. : Chronic kidney disease and bone metabolism, J Bone Miner Metab, 33, 245-252, 2015

Sato T., Iwasaki Y., Kikkawa Y., and Fukagawa M. : An efficacy of intensive vitamin D delivery to neointimal hyperplasia in recurrent vascular access stenosis, J Vasc Access, 17, 72-77, 2016

有本 梓、岩﨑 りほ、村嶋 幸代、田高悦子：１歳６か月児の母親における保健センターへの相談の希望と経験に関連する要因の検討, 横浜看護学雑誌, 8(1), 1-8, 2015

穴井 華菜子、梅野 貴恵、石岡 洋子、樋口 幸、安部 真紀、小野 美喜：聴覚障害のある女性の出産における助産ケアに関するパイロットスタディ, 助産雑誌, 69 (5), 426-431, 2015

小嶋 光明、廣内 篤久：発がんにおける driver 変異と放射線痕跡：急性骨髄性白血病につながる造血細胞および造血組織の放射線応答, 放射線生物研究, 51, 34-56, 2016

Ono M., Miyauchi S., Edzuki Y., Saiki K., Fukuda H., Tonai M., Magilvy J.K. and Murashima S.：Japanese nurse practitioner practice and outcomes in a nursing home. International Nursing Review, 62, 275-279, 2015

Konishi E., Yahiro M., Nakajima N. and Ono M.：The Japanese Value of Harmony and Nursing Ethics. In: Megan-Jane Johnstone ed, ,Nursing Ethics, Three-Volume Set, 3(3), 191-203, 2015

廣瀬 福美、小野 美喜、小寺 隆：介護老人保健施設における診療看護師（NP）の活動成果, 看護研究, 48(5), 456-459, 2015

十時 友紀、小野 美喜、福田 広美、宮内 信治、河野 優子、藤内 美保、村嶋 幸代：介護老人保健施設の事業対象看護師の導入により期待されるチームへの効果　導入施設と非導入施設の困った体験の比較より, コミュニティケア, 17(4), 67-71, 2015

Shimada K., and Kai M.：Caculating disability-adjusted life years (DALY) as a measure of excess cancer risk following radiation exposure, J Radiol Prot, 35, 763-775, 2015

Takahashi F., Sato K., Endo A., Ono K., Ban N., Hasegawa T., Katsunuma Y., Yoshitake T., and Kai M.：Numerical Analysis of Organ Doses Delivered During Computed Tomography Examinations Using Japanese Adult Phantoms with the WAZA-ARI Dosimetry System, Health Phys,109, 104-112, 2015

Matsumoto S., Koba Y., Kohno R., Lee C., Bolch W.E., and Kai M.：Secondary neutron doses to pediatric patients during intracranial proton therapy: Monte Carlo simulation of the neutron energy spectrum and its organ doses, Health Phys, 110, 380-6, 2016

Kageyama T., Yano T., Kuwano S., Sueoka S., and Tachibana H.：Exposure-response relationship of wind turbine noise with self-reported symptoms of sleep and health problems: A nationwide socioacoustic survey in Japan,Nose & Health, 18, 53-61, 2016

影山 隆之、三浦 理沙：末期がん患者にとっての独立施設型ホスピスのサウンドスケープ――他の療養環境との比較, 騒音制御, 39(4), 97-100, 2015

影山 隆之、後藤 成人、仲村 千秋、甲斐 弘美：地域自殺予防介入を行った農村部における自殺率の低下および住民のソーシャルサポートと意識の変化, 自殺予防と危機介入, 36(1), 32-44, 2015

草野 淳子、高野 政子、下迫 絵梨、足立 綾：大分県内における在宅療養児の訪問看護の実態と課題, 看護科学研究, 13(1), 1-8, 2015

草野 淳子、高野 政子、藤田 裕子：小児救急外来を受診した保護者のインターネット利用実態と受診判断, 看護科学研究, 13(2), 35-42, 2015

品川 佳満、橋本 勇人：患者の個人情報取扱い事故に関する公表遅れの要因分析, 日本医療マネジメント学会雑誌, 15(4), 233-241, 2015

橋本 勇人、品川 佳満：医療・福祉・教育系大学における個人情報保護教育の授業展開と改善 ： 法教育と専門科目・卒後教育との連続性を見すえた実践, 法と教育, 5, 19-29, 2015

品川 佳満、橋本 勇人：患者の個人情報取扱い事故のパターンと違反したルールに関する分析, 川崎医療福祉学会誌, 24(2), 221-227, 2015

Shin S., Shutoh N., Tonai M., and Ogata N. : The Effect of Capsaicin-Containing Food on the Swallowing Response, Dysphagia, 31, 146-153, 2016

後藤 愛、高野 政子、佐藤 圭右：重症心身障がい児（者）施設における診療看護師（NP)の成果, 看護研究, 48(5), 459-462, 2015

塩月 成則、藤内 美保、藤本 響子、甲斐 かつ子、宮内 信治、小野 剛志、小寺 隆元：プライマリケア領域における周手術期アウトカム、患者満足度、看護師からの評価、診療看護師（NP）を導入して 5 年目の事例, 看護研究, 48(5), 420-425, 2015

藤内 美保、山西 文子：大学院修士課程における診療看護師(NP)養成教育と法制化, 看護研究, 48(5), 410-419, 2015

戸高 愛、藤内 美保、立川 洋一、永瀬 公明、古川 雅英、藤谷 悦子、吉住 房美、宮内 信治、福田 広美、小野 美喜、村嶋 幸代：特定行為に係る看護師の大学院修了後の On the Job Training の実態とニーズ及び 1 年後の到達度, 病院, 74(7), 502-508, 2015

光根 美保、守永 里美、藤内 美保、宮内 信治、阿南 みと子、財前 博文：訪問看護ステーションにおける診療看護師(NP)導入前後の実態調査　訪問看護関連報酬に焦点を当てて, 看護研究, 48(5), 452-455, 2015

Notsu A., and Eguchi A. : Robust Clustering Method in the Presence of Scattered Observations, Neural Computation, 28, 1-22, 2016

乾 つぶら、島田 三恵子、林 猪都子、猪俣 理恵：分娩の主観的評価に影響を与える要因, 母性衛生, 56(2), 399-406, 2015

Kanada M., Ota E., Fukuda H., Miyauchi S., Gilmour S., Kono Y., Nakagama E., Murashima S., and Shibuya K. : Effectiveness of community-based health services by nurse practitioners: Protocol for a systematic review and meta-analysis. BMJ Open, 5, e006670, 2015

村嶋 幸代、藤内 美保、小野 美喜：事例　大分県立看護科学大学の取組み「特定行為に係る看護師の研修制度」について,日本看護協会出版会　平成 27 年度版看護白書, 157-165, 2015

田口 敦子、永田 智子、成瀬 昴、桒原 雄樹、山口 拓洋、村嶋 幸代 : 訪問看護必要性アセスメントシートの一般化可能性および活用可能性の検討, 日本医療・病院管理学会誌, 52(2), 5-15, 2015

岩本 里織、岡本 玲子、小出 恵子、西田 真寿美、生田 由加利、鈴木 るり子、野村 美千江、酒井 陽子、岸 恵美子、城島哲子、草野 恵美子、齋藤 美紀、寺本 千恵、村嶋 幸代：東日本大震災により被災した自治体職員の被災半年後の語りに見られた身体的精神的健康に影響する苦悩を生じた状況, 日本公衆衛生看護学会誌, 4(1), 21-31, 2015

宮内 信治：物語朗読における心情吐露の談話音調とその解釈, 日本英語音声学会　学術論文集　「英語音声学」, 20, 77-84, 2015

その他の論文

Kai M.：Lessons learnt from Fukushima accident - What is a key issue on radiation risk and its management？日本リスク研究学会誌, 24, 169-173, 2014

Kai M.：Experience and current issues with recovery management from the Fukushima accident,Annals of the ICRP, 44, 153-161, 2015

甲斐 倫明：放射線の安全・防護の考え方, 日本リスク研究学会誌, 25, 83-89, 2015

Kai M.：Update of ICRP Publications 109 and 111, Health Phys, 110, 213-216, 2016

甲斐 倫明：放射線リスクのアプローチ－歴史的経緯から今日の課題まで, 学術の動向, 21, 44-49, 2016

影山 隆之：改正労働安全衛生法における「心理的な負担の程度を把握するための検査」は自殺対策の役に立つか？ 自殺予防と危機介入, 36(1), 26-31, 2015

影山 隆之：新しい労働安全衛生法の「ストレスチェック」は何の役に立つか？－職場環境改善および労働者のストレスマネジメント研修とリンクを, 心と社会, 46(4), 84-89, 2015

Sato Y., and Tonai M.：Creation of pilot protocol for sudden changes in home care patient conditions Judgment and Support by Visiting Nurses －In association with the symptoms of Dyspnea and cooperation between visiting nurses and physicians－ Journal of Medical Safety 2015, 82-6, 2015

定金 香里：合成樹脂材料が母乳を介して及ぼす子孫への影響, アレルギー・免疫, 22(7), 955-962, 2015

杉本 圭以子：精神障害者のリカバリー促進を支援するツール　疾病管理とリカバリー（Illness Management and Recovery:IMR), こころの健康, 30(2), 7-11, 2015

村嶋 幸代：「保健師に係る研修のあり方等に関する検討会　中間とりまとめ」について, Nursing BUSINESS, 9(6), 46-47, 2015

村嶋 幸代：「特定行為に係る看護師の研修制度」創設がもたらす成果と課題, 月刊新医療 2015 年 5 月号, 15, 巻頭言, 2015

草間 朋子、村嶋 幸代、真田 弘美、深井 照美：座談会　診療看護師(NP)の新たな発展をめざして　活動の成果とこれからのビジョン, 看護研究, 48(5), 468-477, 2015

村嶋 幸代、萱間 真美、川村 佐和子、山田 雅子 : 座談会　在宅看護学の誕生に向けて　実践を体系化し、新たな実践を育む「学」の役割, 訪問医療と介護, 20(11), 925-934, 2015

村嶋 幸代:大分県立看護科学大学におけるナースプラクティショナー（NP）の教育, 女性タイムズ, 4(3), 2016

学術講演等

Kai M：New insights into radiological protection with recovery management from the Fukushima accident,15th International Congress of Radiation Research, Kyoto, 2015.5

Kai M：Update of ICRP Publication 109 and 111, PREPARE Dissemination workshop, Bratislava, 2016.1

甲斐 倫明 : CT 診断に伴う被ばくの健康リスクとその防護,第 71 回日本放射線技術学会総会学術大会シンポジウム, 神奈川県, 2015.4

甲斐 倫明 : 事故の影響を受けた地域の人々の防護　- ICRP の考え方 -, 福島県立医科大学第 3 回 ICRP 講演会, 福島県, 2015.6

甲斐 倫明：復興に向けた放射線防護のあり方, 福島大学うつくしまふくしま未来支援農・環境復興支援部門シンポジウム, 福島県, 2015.10

甲斐 倫明：保健物理・放射線防護の現状から将来を語る, 弘前大学被ばく医療総合研究研究所創立５周年記念シンポジウム, 青森県, 2015.11

甲斐 倫明：放射線の安全・防護の考え方, 日本リスク研究学会シンポジウム, 東京都, 2015.6

市瀬 孝道：PM2.5 と黄砂の喘息、鼻アレルギー増悪作用, 京耳会平成 27 年春季研修, 京都府, 2015.4

市瀬 孝道：黄砂と PM2.5 の炎症誘導とアレルギー増悪作用, 第 70 回大分喘息懇話会, 大分市, 2016.1

市瀬 孝道：黄砂と PM2.5 の炎症誘導とアレルギー増悪作用, 綴喜・相楽医師会学術講習会, 京都府, 2016.2

市瀬 孝道:黄砂と PM2.5 の炎症誘導とアレルギー増悪作用について, アレルギー性鼻炎治療戦略 2015, 福岡県, 2016.1

市瀬 孝道 : 黄砂と PM2.5 の炎症誘導とアレルギー増悪作用について, 第 42 回東海花粉症研究会, 愛知県, 2015.12

藤内 美保 : 特定行為に係る看護師の教育・研修制度を考える さらなる役割拡大に向けて, 日本看護学会学術集会 -看護教育-, 奈良県, 2015.8

吉村 匠平 : 子どもの自主性・主体性を伸ばす勇気づけのコミュニケーション, 第 76 回九州心理学会, 大分市, 2015.11

学会発表

Ayako Ogata：Comparison of daily fatigue attributable to chronic fatigue,19th East Asian Forum of Nursing Scholars, Chiba, 2016.3

Ayako Ogata：Comparison of Daytime and Nighttime Fatigue among Shift Workers,18th East Asian Forum of Nursing Scholars, Taipei (Taiwan), 2015.2

H. Utsunomiya, MA. Choe, N. Kuwano, S. Wardaningsih：Comparison of perception on menstruation and coping strategies with the menstrual symptoms between Japanese and Indonesian Women,The 19th EAFONS Conference, Chiba, Japan, 2016.3

Mitsuaki OJIMA, Mizuho Himeshima, Yuri Nishiyama, Sakurako Ueda and Michiaki KAI：A comparison of the cellular kinetics of bone marrow and spleen HSCs in γ-irradiated C3H mice,15th International Congress of Radiation Research, Kyoto, 2015.5

N. Kuwano, MA. Choe, Y. Watanabe：Health problems, causes of stresses and health seeking behaviors of foreign workers in Oita prefecture of Japan, 10th International Nursing Conference, Seoul, Korea, 2015.10

N. Kuwano, MA. Choe, Y. Watanabe：災害特性の異なる国で生活する看護学生の災害看護に関する学習意欲の相違 (Comparison of motivation for disaster nursing between Japanese and Korean nursing students), 第 18 回国際看護研究会 (Japanese Society for International Nursing), 神奈川県, 2015.9

S. Higuchi：Evidence for the Gap Between the Actual Skin Conditions of One-Month Infants and the Recognition of Their Mothers., ICM Asia Pacific Regional Conference, Kanagawa, Japan, 2015.7

Sagara M, Umeno Y：Does lunar cycle and tide influence delivery? The ICM Asia Pacific Regional Conference 2015, Yokohama, 2015.7

Tane E, Umeno Y. Ishioka Y：Comparison of recognition for childbirth between medical students and nursing students, The ICM Asia Pacific Regional Conference 2015, Yokohama, 2015.7

Umeno Y：Association between lactation experience in women aged 40 to 50 and bone metabolic marker: Comparison by presence of lactation experience, The ICM Asia Pacific Regional Conference 2015, Yokohama, 2015.7

Y. Iwasaki, R. Kawamata, Y. Mikuni-Takagaki, M. Fukagawa, J.J Kazama. : Nanomechanical propterties of cortical bone in dialysis patients.,American Society of Bone and Mineral Research Annual Meeting, Seattle, USA, 2015.10

Y. Sato, M. Tonai：Practical evaluation of a protocol sheet to improve and standardize home nursing care and enhance cooperation with physicians in the care of symptoms dyspnea, IARMM 4rd World Congress of Clinical Safety, Vienna, Austria, 2015.9

Yamaguchi M, Hirouchi T, Chiba M, Monzen S, Yoshino H, Ishikawa J, Tsujiguchi T, Nishiyama A, Murakami S, Komura J, Kashiwakura I：Thrombopoietin-mimetic romiplostim confers the complete survival rate to mice exposed to lethal ionizing radiation, 57th American Society of Hematology Annual Meeting and Exposition, Orlando, FL, USA, 2015.12

安藤 敬子、影山 隆之：交代勤務者の夜勤中の眠気に関する実態調査, 第 22 回日本産業精神保健学会, 東京, 2015.6

安部 真紀：Effects of personal network to Housework and childcare in early parenthood of mothers and fathers in Japan, ICM Asia Pacific Regional Conference, Kanagawa, Japan, 2015.7

安部 眞佐子：The effect of folic acid supplementation before conception on the onset of food allergies in infants, European academy of allergy and clinical immunology 2015, Barcelona, Spain, 2015.6

伊東 朋子：筋萎縮性側索硬化症患者への後頸部温罨法の睡眠支援－催眠レベル測定値（BIS)を用いて－, 第 38 回大分県看護研究学会, 大分市, 2016.2

伊東 朋子：日本 ALS 協会会員を対象とした ALS 患者の夜間睡眠の現状と課題, 第 6 回大分難病研究会, 別府市, 2015.7

影山 隆之、後藤 成人：包括的自殺対策を推進した農村地域における自殺の現象および住民意識の変化, 第 39 回日本自殺予防学会総会, 青森県, 2015.9

影山 隆之：風車騒音の屋外レベルと睡眠等の自覚症状との両－反応関係：全国実態調査から, 第 74 回日本公衆衛生学会総会, 長崎県, 2015.11

関根 剛：看護論文における被害者に関する研究の動向, 九州心理学会第 76 回大会, 大分市, 2015.11

岩崎 りほ、有本 梓、蔭山 正子、永田 智子：児童虐待予防における市区町村保健師の専門的な役割―保健師と関係者へのインタビューによる分析, 第 74 回日本公衆衛生学会総会, 長崎県, 2015.11

岩崎 香子、風間 順一郎、深川 雅史：易骨折性を伴った慢性腎臓病骨病変に対する副甲状腺ホルモン投与の効果，第 33 回日本骨代謝学会学術集会，東京都, 2015.7

岩崎 香子、風間 順一郎、成田 一衛、中野 貴由、高垣 裕子、深川 雅史：5/6 腎摘ラットは今までに知られていなかった機序で骨がしなやかさを失う，第 58 回日本腎臓学会学術集会，愛知県, 2015.6

吉村 匠平：青年期の愛着スタイルとファン対象に関する行動について，第 76 回九州心理学会，大分市, 2015.11

宮内 信治：心情吐露における談話音調の文体論的解釈：物語朗読の上昇調に焦点を当てて，日本英語音声学会創立 20 周年記念全国大会，広島県, 2015.11

桑野 紀子、崔 明愛、川田 有希：災害特性の異なる国で生活する看護学生の災害看護に関する学習意欲の相違（Comparison of motivation for disaster nursing between Japanese and Korean nursing students），第 18 回国際看護研究会，神奈川県, 2015.9

高野 政子、草野 淳子：混合病棟において小児看護に携わる看護師のストレス認知とストレスコーピング，日本看護研究学会第 41 回学術集会，広島県, 2015.8

高野 政子、足立 綾、草野 淳子：高機能シミュレータを用いたフィジカルアセスメント演習の効果，日本小児看護学会第 25 回学術集会，千葉県, 2015.7

佐藤 翠、小野 美喜：介護老人保健施設利用者の健康関連 QOL-診療看護師を含むチームアプローチに着目して-，平成 27 年度大分県看護学会，大分市, 2016.2

市瀬 孝道、He Miao、吉田 成一、定金 香里、高野 裕久：中国瀋陽市における PM2.5 と PM10 のマウスアレルギー性気道炎症への影響，第 56 回日本大気環境学会，東京都, 2015.9

市瀬 孝道、吉田 成一：PM2.5 と黄砂のアレルギー喘息増悪作用における LPS と活性酸素の役割，第 136 回日本薬学会，神奈川県, 2016.3

市瀬 孝道、吉田 成一、戸次 加奈江、吉田 安宏、He Miao、He Cuiying：PM2.5 による肺の炎症とアレルギー炎症増悪作用における酸化的ストレスの関係，フォーラム 2015：衛生薬学・環境トキシコロジー，兵庫県, 2015.9

市瀬 孝道、賀 淼、吉田 安宏、高野 博久：由来の異なる PM2.5 のアレルギー性気道炎症増悪作用の比較，第 64 回日本アレルギー学会，東京都, 2015.5

市瀬 孝道、高野 博久：黄砂と PM2.5 による肺の炎症とアレルギーの増悪,第 22 回日本免疫毒性学会, シンポジウム“毒性”影響から“かく乱”影響, 京都府, 2015.6

市瀬 孝道 : PM2.5、粗大粒子と黄砂による肺の炎症とアレルギーの増悪, 第 42 回日本毒性学会・ シンポジウム 環境毒性学の新たな潮流, 石川県, 2015.6

緒方 文子 : 連続勤務による夜勤と日勤の勤務帯と勤務日における疲労の比較, 第 35 回日本看護科学学会学術集会, 広島県, 2015.12

小嶋 光明、西山 侑里、甲斐 倫明：放射線のくり返し照射が造血系細胞の動態に与える影響～放射線誘発 AML の発症の視点から～, 第 48 回日本保健物理学会, 東京都, 2015.7

水野 優子、伊東 朋子：経営理念及び看護部理念の浸透プロセス, 第 19 回日本看護管理学会, 福島県, 2015.8

杉本 圭以子：自殺未遂者アセスメントツールが救急看護師の未遂者ケアの認識と実施に与える影響－未遂者ケアに先進的に取り組む救急医療機関での面接調査より, 日本精神保健看護学会第 25 回学術集会, 茨城県, 2015.6

石川 純也、森崎 太郎、小嶋 光明、甲斐倫明 : 放射線照射後のマウス造血幹/前駆細胞における酸化 DNA 損傷と活性酸素種量の経時的変化の分析, 第 48 回日本保健物理学会, 東京都, 2015.7

石田 佳代子：災害時における黒タグ者への対応フロー－黒タグ者へ対応した看護師・医師に対する面接調査より－, 日本看護研究学会第 41 回学術集会, 広島県, 2015.8

石田 佳代子 : 災害時における黒タグ者対応のためのシミュレーションの作成, 第 21 回日本集団災害医学会総会・学術集会, 山形県, 2016.2

赤星 琴美、佐伯 圭一郎：服薬中の特定健診受診者の検査値および生活習慣の変化に関する調査研究-高血圧症に着目して-, 第 80 回日本民族衛生学会総会, 青森県, 2015.11

赤星 琴美、佐伯 和子、平野 美千代、高橋 香子、永田 智子、蔭山 正子、二宮 一枝、佐藤 玉枝、村嶋 幸代：修士課程の保健師教育を先駆的に開始した大学からの報告-教育カリキュラム-, 日本地域看護学会第 18 回学術集会, 神奈川県, 2015.8

草野 淳子、高野 政子 : 医療的ケアが必要な子どもの母親の技術習得に関する研究, 日本小児看護学会, 千葉県, 2015. 7

足立 綾、高野 政子、草野 淳子：ワクチン同時接種に対する乳幼児の保護者の意識調査, 第 62 回日本小児保健協会学術集会, 長崎県, 2015.6

村嶋 幸代、赤星 琴美、佐伯 和子、平野 美千代、高橋 香子、永田 智子、二宮 一枝、佐藤 玉枝：Investigation of achievement degree of skill at the time of graduation in public health nurse education in Japan, The 6TH International Conference on Community Health Nursing Research, ソウル, 2015.8

村嶋 幸代、赤星 琴美、佐伯 和子、平野 美千代、高橋 香子、永田 智子、二宮 一枝、佐藤 玉枝：保健師教育における技術項目と卒業時到達度調査（第 1 報）-保看統合大学と保健師選択制大学の違い-, 日本地域看護学会第 18 回学術集会, 神奈川県, 2015.8

定金 香里、市瀬 孝道、吉田 安宏：微生物由来成分ペプチドグリカンと黄砂によるアレルギー性気道炎症増悪作用について, 第 56 回大気環境学会年会, 東京都, 2015.9

定金 香里、市瀬 孝道：消毒薬有効成分がアトピー性皮膚炎モデルマウスに及ぼす影響, 第 46 回日本職業・環境アレルギー学会総会・学術大会, 東京都, 2015.7

樋口 幸、峰松 健夫：早期新生児期における額部の皮膚バリア機能と炎症性サイトカイン発現との関連, 第 3 回看護理工学会, 京都府, 2015.10

樋口 幸：生後 1 か月児の皮膚状態と母親の認識との比較研究, 第 30 回日本助産学会, 京都府, 2016.3

品川 佳満、橋本 勇人：看護師が関係した患者情報の取扱い事故の特徴に関する分析, 第 16 回日本医療情報学会看護学術大会, 島根県, 2015.7

峰松 恵里、赤星 琴美、佐藤 玉枝、佐藤 愛、村嶋 幸代：Strategy to prevent diabetes through community assessment in a rural area in Oita, Japan, The 6TH International Conference on Community Health Nursing Research, ソウル, 2015.8

野津 昭文、江口 真透：クラスタリングのためのロバストな K-平均法について,統計関連学会連合大会, 岡山県, 2015.9

林 猪都子：The attitude of Japanese female nursing university students regarding contraception, The 22th WAS World Congress for Sexual Health, Singapore, 2015.7

10 地域貢献

講演等

安部 真紀

スポーツ救命救急講習　1 次救急 BLS、AED の取扱い, 一般社団法人　大分県スポーツ学会認定スポーツ救護講習会　第 6 期, 大分市, 2015.4

石田 佳代子

フィジカルアセスメント （心音・呼吸音・全身皮膚）, 平成 27 年度看護力再開発講習会 （研修Ⅱ）～看護技術研修～, 大分市, 2015.5

フィジカルアセスメント （心音・呼吸音・全身皮膚）, 平成 27 年度看護力再開発講習会 （研修Ⅱ）～看護技術研修～, 大分市, 2015.10

フィジカルアセスメント　循環器系, 消化器系, 平成 27 年度大分中村病院看護師研修会, 大分市, 2015.7

看護過程, 平成 27 年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会, 大分市, 2015.8

看護記録シリーズ 2　ここがポイント！わかる・できる・看護記録～PONR を中心に～, 平成 27 年度大分県看護協会研修会, 大分市, 2015.11

観察〔各種資器材による観察〕, 消防職員専科教育救急科（第 17 期）講義・演習, 大分市, 2016.3

第 1 分科会「歯・口の健康づくり」指導・助言者, 平成 27 年度大分県養護教諭研究協議大会, 大分市, 2015.12

臨床に役立つフィジカルアセスメント実践編, 平成 27 年度大分県看護協会研修会, 大分市, 2015.5

梅野 貴恵

助産師教育課程, 平成 27 年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会, 大分市, 2015.6

小野 美喜

「最近の感染症対策」, 大分県立看護科学大学　公開講座, 大分市, 2015.9

「実習指導計画・指導案作成の実際」, 平成 27 年度　大分県看護協会　実習指導者講習会, 大分市, 2015.9

「特定行為に係る看護師の研修制度の開始について」, 平成 27 年度　看護の地域ネットワークサミット, 大分市, 2016.1

「臨地実習における学生の学習効果をあげるための教員と実習指導者の役割」, 平成 27 年度　専任教員継続研修会　公開講座, 大分市, 2015.12

看護倫理, 中津ファビオラ看護専門学校講義, 中津市, 2015.9

看護倫理, 平成 27 年度　大分県看護協会研修, 大分市, 2015.11

離島看護学, 鹿児島大学医学部保健学科講義, 鹿児島,県 2015.6

影山 隆之

メンタルタフネスのためのストレス対処特性,新日鐵住金大分地区メンタルヘルス研修会, 大分市, 2015.10

メンタルヘルス　労働者のセルフケアを中心に,大分市職員メンタルヘルス研修, 大分市, 2016.1

看護の視点でモノをつくるー大分県立看護科学大学における産学連携の取り組み, 平成 27 年度第 4 回大分市産学交流サロン, 大分市, 2016.2

最近の自殺の予防の動向について, 平成 27 年度佐伯市自殺対策連絡協議会講演, 佐伯市, 2016.2

自殺対策と職場のメンタルヘルス, 大分産業衛生総合推進センター平成 27 年度第 16 回衛生管理者等研修, 大分市, 2016.2

周産期のメンタルヘルス, 大分県助産師会平成 27 年度第 2 回研修会, 大分市, 2015.7

職員の心の健康管理, 大分市社会福祉協議会メンタルヘルス研修, 大分市, 2015.11

心の健康管理 : 自己と部下のストレスマネジメント, 大分県消防学校消防職員幹部教育初級科研修, 由布市, 2015.10

睡眠が健康をつくるー交代勤務でも日勤でも, 新日鐵住金テクスエンジ管理職 安全研修会, 大分市, 2015.10

法定化された職員のストレスチェックについて, 国立西別府病院衛生委員会研修会, 別府市, 2015.11

草野 淳子

平成 27 年度大分県医療的ケア教員研修会, 大分県教育委員会, 大分市, 2015.8

平成 27 年度第 1 回医療的ケア看護師研修, 大分県教育委員会, 大分市, 2015.4

定金 香里

色が変わる不思議な花, 夏休み子どもサイエンス 2015, 大分市, 2015.8

佐藤 弥生

「訪問看護 OJT マニュアル」を使った新任訪問看護師育成フォローアップ研修, 大分県看護協会訪問看護専門分野講習会, 大分市, 2016.3

これだけは知っておきたい訪問看護の第 1 歩, 大分県看護協会　訪問看護専門分野講習会, 大分市, 2015.4

看護記録と看護・介護の関係法規, 大分県看護協会　訪問看護専門分野講習会, 大分市, 2015.12

新任訪問看護師を「訪問看護 OJT マニュアル」を使って系統的に育てよう, 大分県看護協会　訪問看護専門分野講習会, 大分市, 2015.4

第 8 回事例発表会　テーマ「2025 年を目指した訪問看護」　総評, 大分県訪問看護ステーション連絡協議会　第 8 回事例発表会, 大分市, 2016.1

品川 佳満

ヘルスケアサービス管理論, 看護協会　認定看護管理者（セカンドレベル）教育課程, 大分市, 2015.12

看護研究 step2, 大分県看護協会　教育研修, 大分市, 2015.7

看護研究の基礎及びデータ解析入門, 鹿児島大学　医学部保健学科　公開講座, 鹿児島県, 2015.7

秦 さと子

精神科での看護記録の技法・特徴を学ぶ, 日本精神科看護協会　第２回大分県支部研修会, 大分市, 2015.8

杉本 圭以子

やってみよう看護研究　ステップ１, 大分県看護協会　教育研修, 大分市, 2015.5

やってみよう看護研究　ステップ１, 大分県看護協会　教育研修, 大分市,2015.6

関根 剛

カウンセリングの原理と実際,大分県看護協会「保健師．助産師．看護師実習指導者講習会」（２日間）, 大分市, 2015.8

カウンセリングの理論と実際（１）, 大分いのちの電話「電話相談員養成講座」, 大分市, 2015.5

カウンセリングの理論と実際（３）, 大分いのちの電話「電話相談員養成講座」, 大分市,2015.11

グループ討議, 全国被害者支援ネットワーク「平成 27 年度支援活動会議」, 東京都, 2015.7

こころの健康とゲートキーパーの役割, 豊後高田市自殺予防講演会, 豊後高田市, 2016.2

ストレス・マネージメント, 佐伯市保健所「新人ナースサポート研修」, 佐伯市, 2015.8

ネットワークと支援者の育成, 公益社団法人大分被害者支援センター「初級研修」, 大分市, 2015.8

メンタルヘルス, 大分県自治人材育成センター「新任班総括研修」, 大分市, 2015.6

メンタルヘルス, 大分県自治人材育成センター「新任係長級研修」, 大分市, 2015.7

メンタルヘルス, 大分県自治人材育成センター「新任係長級研修」, 大分市, 2015.10

ロールプレイ・聴くということ, チャイルドライン大分「電話受け手ボランティア 5 期生養成講座」, 大分市,2015.9

学校における事件事故への対応～CRT の経験から, 大分県被害少年サポートネットワーク会議, 大分市, 2016.1

患者さんと向き合う？そんな時あったら役立つスキルって…, 大分市保健所　難病支援従事者 患者さんの心理的サポート, 大分市, 2015.7

観護教官に期待される地域援助業務について, 大分少年鑑別所, 大分市, 2016.3

関係機関との連携Ⅱ心理支援, 全国被害者支援ネットワーク「平成 27 年度秋期全国研修会」, 東京都, 2015.10

危機時のこころのケア総論, 大分県こころとからだの相談支援センター「平成 27 年度ＣＲＴ隊員養成研修」, 大分市, 2015.7

惨事ストレス対策, 大分県消防学校, 大分市, 2015.11

惨事ストレス対策，大分県消防学校，大分市, 2016.3
支援センターにおけるコーディネィターの役割・業務／研修の企画，全国被害者支援ネットワーク平成 27 年度春期全国研修会，東京都, 2016.1
児童生徒が事件・事故にまきこまれた時の学校対応～その時、養護教諭の果たす役割とは～，大分県教育庁「健康教育研修会」，大分市, 2015.11
児童生徒や保護者との信頼関係を築くコミュニケーション，大分県教育委員会「コミュニケーション能力向上研修」，大分市, 2015.6
自殺予防のために地域だから出来ること，宇佐市自殺予防対策専門研修会，宇佐市, 2016.3
自殺予防のために地域だから出来ること，国東市地域自殺対策講演会，国東市, 2016.3
自殺予防のために地域だから出来ること，大分いのちの電話　平成 27 年度大分県自殺対策講演会，大分市, 2016.1
自分を表現するためのコミュニケーション，豊後大野市三重町百地こころをつなぐ仲間づくりフォーラム，豊後大野市, 2015.11
職場のメンタルヘルス，大分県自治人材育成センター「新任監督者研修」，大分市, 2015.6
対応の基本，大分県警察「警察安全相談実務専科研修」，大分市, 2015.6
電話相談における危機介入，和歌山いのちの電話協会「月例研修会」，和歌山市, 2015.6
犯罪被害者の心理と被害者支援，大分県警察学校，大分市, 2015.11
犯罪被害者支援とは何か，紀国被害者支援センター「平成 27 年度被害者支援活動員養成講座」，大分市, 2015.6
被害者の心理と相談対応，山口県警察学校，山口県, 2015.11
被害者支援の倫理と情報管理，大分被害者支援センター「初級研修」，大分市, 2015.11
評価することの意味とポイント，大分県立病院「院内研修会」，大分市, 2015.12
面接技法，大分県看護協会「訪問看護 e ラーニングを活用した訪問看護師養成講習会」，大分市, 2015.7
面接技法，大分県立病院「院内教育研修」，大分市, 2015.9

高野 政子

医療的ケアーたんの吸引の基礎，大分県立大分支援学校校内医療的ケア研修会，大分市, 2015.7
経管栄養の基礎，平成 27 年度第 2 回医療的ケア看護師研修会，大分市, 2015.12
健康状態の把握と誤嚥、経管栄養の基礎，平成 27 年度第３回医療的ケア研修会，大分市, 2015.8
呼吸と緊急時の対応、たんの吸引の基礎，平成 27 年度第２回医療的ケア研修会，大分市, 2015.8
子どもの権利と小児看護，大分県立臼杵高等学校出前講義，臼杵市, 2015.6
小児のフィジカルアセスメント，大分県看護協会教育研修　フィジカルアセスメント３，大分市, 2015.9
小児看護学，大分県看護協会保健師助産師看護師実習指導者講習会，大分市, 2015.9
保育所等における看護と健康管理，大分県認可私立保育園協議会健康研修会，大分市, 2015.9

田中 佳子

フィジカルアセスメント(運動器系), 大分中村病院フィジカルアセスメント研修, 大分市, 2015.8

フィジカルアセスメントⅠ　確実に身につくフィジカルアセスメント(呼吸・循環編), 平成 27 年度大分県看護協会研修会, 大分市, 2015.5

各種器材による観察, 消防職員専科教育救急科(第 18 期), 大分市, 2016.3

中城 紗也子、照井 遥、松井 咲樹、水町 裕理、梅野 貴恵、樋口 幸、安部 真紀

第二次性徴と妊娠, 大分市立三佐小学校「いのちの教育」, 大分市, 2015.10

藤内 美保

フィジカルアセスメント　-基本技術と呼吸器系-, 中村病院　看護師研修, 大分市, 2015.5

フィジカルアセスメント　神経系, 中村病院　看護師研修, 大分市, 2015.8

実習指導案・指導計画, 大分県看護協会, 大分市, 2015.8

フィジカルアセスメント高めようアセスメントの能力　～事例を中心に～, 大分県看護協会, 大分市, 2015.9

フィジカルアセスメント, 大分赤十字病院　新人看護師研修会, 大分市, 2015.8

フィジカルアセスメント（呼吸・循環）, 別府医師会看護職研修会, 別府市, 2015.9

チーム医療,認定看護管理者制度ファーストレベル教育課程, 広島県, 2015.10

看護診断から成果・介入をどう導くかⅠ, 別府医療センター看護師研修会, 別府市, 2015.10

看護診断から成果・介入をどう導くかⅡ, 別府医療センター看護師研修会, 別府市, 2015.11

臨床実践に役立つフィジカルアセスメント, 福岡県医師会看護職研修会, 福岡県, 2015.12

フィジカルアセスメント力, 宮崎県病院局　看護研修会, 宮崎県, 2016.1

藤内 美保、石田 佳代子、田中 佳子、松吉 晃子

臨床に役立つフィジカルアセスメント, 大分県看護協会研修会, 大分市, 2015.5

平野 亙

ASD 児の未来のために　～専門職に寄せる親の願い～, 大分県平成 27 年度発達障がい者支援専門員養成研修（初級）, 大分市, 2015.6

支援者が理解しておいてほしいこと　～障害者権利条約以後～, 大分県発達障がい者支援専門員継続研究会, 大分市, 2015.9

特別支援教育に望むこと　－障がい児の生きる力を育てるためにー, 大分県教育センター平成 27 年度特別支援学校新任教員研修, 大分市, 2015.4

発達障がいの特性理解と意思決定の支援, 平成 27 年度九州地区知的障害者福祉協会障害者支援施設部会研修会大分大会, 大分市, 2015.12

福祉における権利擁護　－権利としての自立とその支援, 大分県社会福祉介護研修センター　県・市町村福祉担当新任職員研修会, 大分市, 2015.5

村嶋 幸代

第 62 回日本栄養改善学会学術集会，「在宅医療における連携と展開」，福岡県, 2015.9

公益財団法人東京都医学総合研究所，公衆衛生看護活動の専門性と保健師への期待，東京都, 2015.6

ICCHNR, The State of the Art: Evidence-based Nursing Initiatives and Health Promotion in Japan, Seoul, 2015.8

全国保健師教育機関協議会九州ブロック，保健師に係る研修のあり方等に関する検討会－中間とりまとめ概要についてー，沖縄県, 2015.8

全国保健師教育機関協議会夏期教員研修会，「わが国の公衆衛生看護教育の方向性と全国保健師教育機関協議会の貢献」，愛知県, 2015.8

保健師長会九州ブロック，「これからの保健活動のための人材育成とリーダーの役割」，宮崎県, 2015.9

天使大学，大分県立看護科学大学の地域貢献活動について，北海道, 2015.10

文部科学省 未来医療研究人材養成拠点形成事業 リサーチマインドを持った総合診察医の養成，「都市部の在宅医療を考える シンポジウム」，東京都, 2015.11

全国保健師長会代議員総会，「保健師活動の見える化を目指そう」～保健師活動のコアをとおして～，熊本県, 2015.11

岡山県保健所保健課長会，「何のために見える化が必要か、保健師は何のために居るのか」リーダーの役割と重要性を共有する，岡山県, 2016.3

大分県庁　広報広聴課，「女性の活躍が、組織の使命達成を推進する」，大分市, 2015.9

中津地域看護連携強化フォーラム，「地域包括ケアにおける看護職の役割」，中津市, 2015.10

医療介護連携フォーラム，医療・介護連携－今こそ手をつなごう！看護と介護－，別府市, 2016.2

吉村 匠平

コミュニケーション論 1，大分医師会立アルメイダ病院初任者研修，大分市, 2015.6

コミュニケーション論Ⅱ，大分医師会立アルメイダ病院初任者研修，大分市, 2015.11

自己決定理論に基づくモチベーションマネジメント，大分医師会立アルメイダ病院プリセプター研修，大分市, 2015.7

自分に可能なリーダーシップスタイルの理解，別府医療センターリーダーシップ研修，別府市, 2015.7

研究指導

大分赤十字病院	桑野 紀子、定金 香里
国立病院機構大分医療センター	佐藤 弥生、岩崎 香子
国立病院機構西別府病院	高野 政子、吉田 成一
大分県立病院	石田 佳代子、森田 慶子
大分市医師会アルメイダ病院	巻野 雄介、吉村 匠平
中津市民病院	赤星 琴美、安部 眞佐子
大分中村病院	平野 亙、石岡 洋子
独立行政法人国立長寿医療研究センター	福田 広美
衛藤病院	後藤 成人、小嶋 光明
大分県厚生連鶴見病院	杉本 圭似子、野津 昭文

学会その他の役員等

赤星 琴美

大分市建築審査会委員
大分市風俗関連営業建築物審議会委員
大分県国民健康保険団体連合会情報公開および個人情報保護審査会委員
日本看護系大学協議会　看護教育質向上委員会　委員
文部科学省委託研究事業プロジェクト委員会　委員
日本地域看護学会　教育委員会　委員
佐賀大学大学院：非常勤講師
平成 27 年度特定保健指導標準化ステップアップ事業における地域事例検討会　講師
特定保健指導標準化スッテプアップ研修会　講師
九重町食生活改善推進協議会中央研修会　講師

石田 佳代子

中津ファビオラ看護学校　非常勤講師
大分県看護協会教育委員会　副委員長
日本 NP 学会第 1 回学術集会実行委員
実習指導者・大学教員交流会企画委員

伊東 朋子

日本ＡＬＳ協会大分県支部運営委員

岩崎 香子

日本骨粗鬆症学会評議員

ROD21 研究会幹事

梅野 貴恵

大分県母性衛生学会理事（副会長兼事務局長）

第 12 回大分県母性衛生学会学術集会実行委員会委員長

大分県ナースセンター事業運営委員

小嶋 光明

大分大学医学部臨床研究審査委員

日本放射線影響学会評議委員

小野 美喜

日本看護倫理学会評議員

鹿児島大学非常勤講師

中津ファビオラ看護学校非常勤講師

甲斐 倫明

国際放射線防護委員会(ICRP) Task Group 93, chair

弘前大学大学院保健学研究科高度実践被ばく医療専門家委員会委員

大分県防災会議委員

公益財団法人放射線影響研究所科学諮問委員

日本放射線影響学会理事・評議員

社団法人日本保健物理学会会長

人事院安全専門委員会委員

国際放射線防護委員会(ICRP）第 4 専門委員会委員

日本学術会議連携会員

国立研究開発法人審議会委員

久留米大学非常勤講師（認定看護師教育センター）

福岡県防災会議原子力部門専門委員

鳥取県原子力安全顧問

影山 隆之

大分県環境影響評価技術審査会委員

大分県地域福祉権利擁護事業契約締結審査会委員

大分県自殺対策連絡協議会副会長

豊後大野市自殺対策連絡協議会助言者

日本精神衛生学会副理事長・編集委員長
日本自殺予防学会常務理事・編集委員長
日本学校メンタルヘルス学会評議員・編集委員
日本産業ストレス学会評議員
日本社会精神医学会評議員
日本産業衛生学会編集委員

草野 淳子

一般社団法人日本小児看護学会第 25 回学術集会企画委員
一般社団法人日本小児看護学会第 26 回学術集会企画委員・実行委員長
日本 NP 学会第 1 回学術集会実行委員

佐伯　圭一郎

日本民族衛生学会評議員
大分県情報公開・個人情報保護審査会委員
日本看護科学学会和文誌編集委員

佐藤 愛

一般社団法人日本地域看護学会第 20 回学術集会準備委員
大分県公衆衛生協会評議員

佐藤 弥生

大分県看護協会看護師職能Ⅱ委員
大分県訪問看護推進協議会委員
大分県委託事業　アドバイザー派遣事業推進会議実務者委員
大分県委託事業アドバイザー派遣事業　アドバイザイー

定金 香里

日本生理学会評議員・エデュケーター
平松学園大分リハビリテーション専門学校非常勤講師
大分県環境影響評価技術審査会委員
大分県リサイクル認定製品審査会委員
大気環境学会健康影響分科会幹事
大分県理科・化学教育懇談会幹事

品川 佳満

別府医療センター附属大分中央看護学校　非常勤講師

秦 さと子

大分県脳卒中懇話会 世話人

関根 剛

公益社団法人　大分被害者支援センター　理事

全国被害者支援ネットワーク　理事

消防庁緊急時メンタルサポートチーム　メンバー

大分県こころの緊急支援チーム　委員・メンバー

大分いのちの電話　スーパーバイザー

高野 政子

大分県医療的ケア連絡協議会　委員

大分県特別支援学校第三者評価委員会 委員

日本小児看護学会　評議員

日本小児看護学会災害対策委員会 委員

日本看護研究学会九州沖縄地方会 幹事

九州沖縄小児看護教育研究会　幹事

大分県小児保健協会 理事

大分県看護協会学会委員会 委員長

第 38 回大分県看護研究学会 会長

日本小児看護学会第 26 回学術集会 会長

日本小児がん看護学会査読委員

日本 NP 学会第 1 回学術集会実行委員会 委員

藤内 美保

日本看護系大学協議会高度実践看護師専門委員会委員

厚生労働省指導者研修手引き作成のための有識者会議委員

大分県医療計画策定協議会委員

大分県医療費適正化推進協議会委員

東九州メディカルバレー構想推進会議委員

大分県専任教員養成講習会検討委員会

日本 NP 学会理事

私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「日本型地域ケア実践開発研究事業」事業評価委員会委員

自治医科大学特定行為研修管理委員会委員

大分県立看護科学大学特定行為研修管理委員会委員

広島大学客員教授

名桜大学非常勤講師

中津ファビオラ看護学校非常勤講師

林 猪都子

大分県母性衛生学会　理事
大分県助産師会　理事
大学コンソーシアムおおいた　運営委員
おおいた都心まちづくり委員

樋口 幸

大分県看護協会　実習指導者講習会運営委員　委員長
大分市産学交流サロン事業検討委員
大分県母性衛生学会　幹事

福田 広美

大分地方労働審議会委員
大分市営温水プール指定管理予定者選定等委員会委員
大分県社会福祉審議会委員
日本看護協会認定看護管理者教育運営委員
日本ＮＰ教育大学院協議会 NP 資格認定試験委員
大分県立看護科学大学特定行為研修管理委員会委員

平野 亙

福岡大学法科大学院非常勤講師
九州大学大学院医学系学府非常勤講師
医療事故防止・患者安全推進学会　　理事
大分県発達障がい研究会　理事
大分県医療コンフリクトマネジメント研究会　世話人
大分県人権尊重社会づくり推進審議会　副会長
大分県地域・職域連携推進部会　委員
大分県特別支援連携協議会　委員
大分県立特別支援学校第三者評価委員会　委員
大分県発達障がい者支援センター連絡協議会　委員
別府市親亡き後等の問題解決策検討委員会　委員
大分県発達障がい者支援体制検討会議　アドバイザー
大分県障がい者の差別解消を図るための条例検討協議会　委員

宮内 信治

大分市立横瀬小学校学校評議員
大分県高等学校教育研究会英語部門　顧問
大分県立芸術文化短期大学　非常勤講師
日本英語音声学会常任理事

村嶋 幸代

保健師に係る研修のあり方等に関する検討会 座長
日本学術会議看護学分科会 委員:連携会員
一般社団法人 日本看護系大学協議会 理事
一般社団法人 日本看護系学会協議会 理事
監事
一般社団法人 全国保健師教育機関協議会 会長
一般社団法人 日本 NP 教育大学院協議会 副会長
日本保健師連絡協議会 代表幹事
幹事
一般社団法人 日本地域看護学会 理事長
評議員
日本学術会議対策委員会委員長
地域看護学学術委員会 副委員長
「看保連」対策委員会 副委員長
日本公衆衛生学会 理事（職能別）
評議員（職能別）
一般社団法人 日本看護研究学会 理事
一般社団法人 日本看護研究学会 査読委員
日本在宅ケア学会 監事および評議員
日本老年看護学会 評議員
日本公衆衛生看護学会 評議員
代議員
一般社団法人 日本看護管理学会 評議員
日本看護科学学会 理事
会計
社員（代議員）
国立保健医療科学院 評価委員
東京大学医学部在宅医療学拠点　外部評価委員会 委員
学校法人産業医科大学 評議員
一般財団法人日本公衆衛生協会 理事
公益財団法人医療科学研究所 評議員

社会福祉法人三井記念病院 評議員
訪問看護・介護連携検討会 会長
大分県医療審議会 委員(学識経験者)
生涯健康県おおいた 21 推進協議会 委員
大分県国民保護協議会 委員
大分県公私立学校教育協議会 委員
おおいたホームタウン推進協議会 会員
ホルトホール大分指定管理予定者選定等委員会 委員
大分市総合計画検討委員会 委員

吉田 成一

日本薬学会 代議員
日本アンドロロジー学会 評議員
環境・衛生部会　フォーラム委員会委員
光化学オキシダント等大気汚染物質　文献レビュー検討会　委員

吉村 匠平

大分県学校心理士会　会長
平成 27 年度小・中学校等特別支援教育充実事業に係わる専門家チーム委員
放送大学非常勤講師（心理学実験Ⅰ）

11 助成研究

麻生 優恵

高齢者施設用木製椅子の座り心地に関する研究

株式会社中津家具

安部 真紀

育児期男女のパーソナルネットワークの構造特性と育児サポート体制への課題

日本学術振興会　科学研究費　若手研究(B)

石田 佳代子

災害時における黒タグ者に対する活動モデルの開発

日本学術振興会　科学研究費　基盤研究(C)

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

大陸に由来するアジアンスモッグ（煙霧）の疫学調査と実験研究による生体影響解明

日本学術振興会　科学研究費　基盤研究(A)

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

黄砂と PM2.5 による複合大気汚染の肺炎、アレルギー疾患増悪作用とメカニズム解明

環境省　環境研究総合推進費

市瀬 孝道

黄砂試料に含まれる大気微生物のゲノム情報の解析及び風送拡散状態の理解

日本学術振興会　科学研究費　基盤研究(B)　（分担）

伊東 朋子、品川 佳満、秦 さと子

筋萎縮性側索硬化症患者における睡眠レベル測定値を用いた睡眠評価法の開発

日本学術振興会　科学研究費　基盤研究(C)

岩崎 香子

CKD‐MBD 発症における骨細胞機能異常

ーアンジオテンシンⅡ受容体を介した細胞機能変化に着目して

公益財団法人日本臓器財団

梅野 貴恵

母乳育児経験のある更年期女性の糖・脂質代謝に対するエクオールサプリメントの効果

日本学術振興会　科学研究費　基盤研究(C)

緒方 文子

連続夜勤による疲労・ストレス・眠気の発現と変動

日本学術振興会　科学研究費　若手研究(B)

緒方 文子

５日間連続夜勤による疲労とストレスの変動

日本学術振興会　科学研究費　若手研究(B)

小野 美喜

特定行為に係る看護師が経験する倫理的解決の方略に関する研究

日本学術振興会　科学研究費　基盤研究(C)

甲斐 倫明

小児 CT 診断の検査理由分析による白血病・脳腫瘍罹患率の放射線リスクの逆因果分析

日本学術振興会　科学研究費　基盤研究(C)

甲斐 倫明

学部及び大学院教育における放射線看護教育カリキュラムの開発研究

日本学術振興会　科学研究費　基盤研究(B)　（分担）

甲斐 倫明

検出器８０列以上の多列化 CT 診断時臓器線量計算法の開発と WAZA－ARI の拡張

日本学術振興会　科学研究費　基盤研究(C)　（分担）

甲斐 倫明

低線量率放射線長期連続照射によるマウス急性骨髄性白血病の起因となる PU.1 遺伝子変異の線量率依存性の解析～放射線発がんの線量率効果の仕組みを考える～

公益財団法人原子力安全研究協会

影山 隆之

交代勤務者の業務上エラーのリスク要因に関する研究：職種・労働時間・睡眠との関連

日本学術振興会　科学研究費　基盤研究(C)

影山 隆之

学校現場の日常的活動の中で実施できる児童生徒の自殺予防プログラムの開発と応用

日本学術振興会　科学研究費　基盤研究(C)　（分担）

影山 隆之

男性労働者のソーシャル・キャピタルに注目した職域から地域に繋がる健康支援の研究

日本学術振興会　科学研究費　基盤研究(C)　　（分担）

草野 淳子、高野 政子、足立 綾

在宅療養児を支える訪問看護師に対する小児特定看護師の介入教育プログラムの検討

日本学術振興会　科学研究費　基盤研究(C)

河野 優子

在宅高齢者の肺炎に対する高度実践看護師（NP)の活動成果と役割モデルの構築

日本学術振興会　科学研究費　若手研究(B)

佐伯 圭一郎

看護系大学共用試験 CBT システムソフトウェアの汎用化改修と教育場面への導入

日本学術振興会　科学研究費　基盤研究(C)

秦 さと子

加齢による嚥下機能低下予防のための運動方法の検討

日本学術振興会　科学研究費　基盤研究(C)

秦 さと子

加齢性の嚥下機能低下に対するケール搾汁粉末溶液の改善効果の研究

ヤクルトヘルスフーズ株式会社

高野 政子

タブレット端末使用により ICT 環境を整備し院内学級と原籍校を結ぶ学童の復学支援

日本学術振興会　科学研究費　挑戦的萌芽研究

藤内 美保、佐藤 弥生

フィジカルアセスメントに基づく日常生活行動・薬剤投与量調節の判断のツール開発

日本学術振興会　科学研究費　基盤研究(C)

濱中 良志

骨形成を制御する新規分泌調整機構の解明

日本学術振興会　科学研究費　基盤研究(C)

濱中 良志

骨組織におけるコラーゲン線維形成コア分子の発現機構の解明と再生医療への応用

日本学術振興会　科学研究費　基盤研究(C)　（分担）

樋口 幸

早期新生児期における胎脂の過酸化脂質の経時的変化と皮膚バリア機能に与える影響

日本学術振興会　科学研究費　若手研究(B)

福田 広美

乳がん患者の再発予防に向けた効果的な悲運動性身体活動プログラムの開発

日本学術振興会　科学研究費　挑戦的萌芽研究

巻野 雄介

日本の看護場面で実践可能な超音波ガイド下末梢静脈穿刺法の開発と有用性の検証

日本学術振興会　科学研究費　若手研究(B)

村嶋 幸代

高齢者プライマリ・ケア領域の高度実践看護師（NP)の養成効果と教育モデルの開発

日本学術振興会　科学研究費　基盤研究(B)

村嶋 幸代

修士課程における保健師教育の開発と評価－日本からの発信

日本学術振興会　科学研究費　挑戦的萌芽研究

吉田 成一

胎仔期の越境微小粒子曝露と出生仔の雄性生殖機能低下と気管支喘息増悪への次世代影響

日本学術振興会　科学研究費　基盤研究(B)

12 各種研究・研修派遣

江藤 由布子

派遣先　武蔵野大学附属産後ケアセンター桜新町、みやした助産院
研修期間
　８月７日～８月 14 日

　産後ケアの中核的存在である 2 施設において、産後ケア施設の実態を知ることを目的として研修を行った。武蔵野大学附属産後ケアセンター桜新町では、主に施設見学を行った。みやした助産院では、妊産褥婦を対象としたケアに同行し一部実践させていただいた。両施設での研修を通し、ハード・ソフト両面における産後ケアの提供体制や、利用者の状況、ケア内容を理解するとともに、施設開設・事業開始に至る経緯や行政との連携等を学ぶことができた。また乳房マッサージ等のケアを一部実践し指導していただくことで、助産技術向上の機会となった。本研修で得られた知見や助産技術は、講義及び実習指導、研究活動に活かす予定である。

甲斐 博美

派遣先　米国ハワイ州ホノルル市の Queen's Medical Center　他クリニック・病院４件
　　Hawaii Pacific University
研修期間
　３月 19 日～３月 25 日

　米国での NP の活動と教育の実際を知り、本学の NP 教育につなげる教育内容・実行可能な演習プログラムを考える目的で研修を行った。ハワイの医療機関で活躍する NP や大学で教育に携わる NP の方々から活動の実際や医療制度、教育の講義を受け、ディスカッションをした。またシミュレーション施設でスキル向上の学習環境を見学した。現在 NP の修士課程で学ぶ日本人の方からは、大学院での学び方を教えて頂いた。NP の実習においては、臨床推論の力をつけるための内容を強化しており、繰り返し医師からの指導を受けていることがわかった。
　この研修で学んだことを活かし、今年度から開始するシミュレーション演習や実習での学び方などを調整していく予定である。

濱中 良志

派遣先　米国ハワイ州ホノルル市の Queen's Medical Center　他クリニック・病院４件
Hawaii Pacific University

研修期間

３月 19 日～３月 25 日

日本での NP（診療看護師）の今後の発展にあたり、米国の NP の現状を視察するためにハワイ州ホノルル市の Queen's Medical Center　などの６か所の病院を訪問した。米国で勤務している様々な NP との講義や討論を通して、日本での NP の現状や米国の医療制度との相違点などを学んできた。

13 学部研究者の受入

本学教員　　稲垣 敦
受入者　　保科 早苗
　本学共同研究員として受入れ、睡眠時無呼吸症候群患者における口腔装具の効果についての研究に従事した。

本学教員　　市瀬 孝道
受入者　　賀 淼
　科学研究費補助金基盤研究（A）及び環境省環境研究総合推進費による共同研究（PM2.5 と黄砂の生体影響解明）を行った。

14　役員及び審議会委員名簿

1　役員

理事長（学長）		村嶋 幸代
理事	学部長	藤内 美保
理事	研究科長	影山 隆之
理事	事務局長	堤 健一
理事（非常勤）	大分大学医学部附属病院長	津村 弘
理事（非常勤）	佐伯中央病院長	小寺 隆
理事（非常勤）	大分経済同友会恒久監事	高橋 靖周
監事（非常勤）	大分県看護協会専務理事	神品 實子
監事（非常勤）	公認会計士	岩尾 隆志

2　経営審議会

学内委員	理事長	村嶋 幸代
学内委員	理事	藤内 美保
学内委員	理事	影山 隆之
学内委員	理事	堤 健一
学内委員	理事（非常勤）	津村 弘
学内委員	理事（非常勤）	小寺 隆
学内委員	理事（非常勤）	高橋 靖周
学外委員	弁護士	千野 博之
学外委員	立命館アジア太平洋大学副学長	上子 秋生
学外委員	大分合同新聞社論説編集委員室長	松尾 和行
学外委員	大分県看護協会長	松原 啓子

3　教育研究審議会

学内委員	学長	村嶋 幸代
学内委員	学部長	藤内 美保
学内委員	研究科長	影山 隆之
学内委員	事務局長	堤 健一
学内委員	生体科学教授	濱中 良志
学内委員	生体反応学教授	市瀬 孝道
学内委員	健康運動学教授	稲垣 敦
学内委員	人間関係学准教授	吉村 匠平
学内委員	環境保全学	甲斐 倫明
学内委員	健康情報科学教授	佐伯 圭一郎
学内委員	言語学教授	G. T. Shirley
学内委員	基礎看護学准教授	伊東 朋子
学内委員	成人・老年看護学教授	小野 美喜
学内委員	小児看護学教授	高野 政子
学内委員	母性看護学教授	林 猪都子
学内委員	助産学教授	梅野 貴恵
学内委員	保健管理学教授	福田 広美
学内委員	地域看護学特任教授	佐藤 玉枝
学内委員	国際看護学特任教授	崔 明愛
学外委員	大分大学名誉教授	葉玉 哲生

15　教職員名簿

1　専任教員

生体科学	教授	濱中 良志	H27.4.1 採用
	准教授	安部 眞佐子	
	助教	岩﨑 香子	
生体反応学	教授	市瀬 孝道	
	准教授	吉田 成一	
	助教	定金 香里	
健康運動学	教授	稲垣 敦	
人間関係学	准教授	吉村 匠平	
	准教授	関根 剛	
	非常勤助手	森田 慶子	
環境保健学	教授	甲斐 倫明	
	准教授	小嶋 光明	
	助教	石川 純也	H28.3.31 退職
健康情報科学	教授	佐伯 圭一郎	
	准教授	品川 佳満	
	助教	野津 昭文	
言語学	教授	G. T. Shirley	
	准教授	宮内 信治	
	非常勤助手	馬場 奈穂	
基礎看護学	准教授	伊東 朋子	
	講師	秦 さと子	
	助教	巻野 雄介	
	助教	石丸 智子	
	臨時助手	麻生 優恵	H27.4.1 採用
看護アセスメント学	教授	藤内 美保	
	准教授	石田 佳代子	
	助教	山田 貴子	H27.9.1 採用
	助手	田中 佳子	
	臨時助手	松吉 晃子	H27.4.1 採用 H27.8.31 退職
成人・老年看護学	教授	小野 美喜	
	助教	甲斐 博美	H27.4.1 採用
	助教	中釜 英里佳	
	特任講師	松本 初美	H27.7.1 異動 H28.3.31 退職
	助手	河野 優子	
	助手	西部 由里奈	
	臨時助手	川野 明子	H28.3.31 退職
小児看護学	教授	高野 政子	
	講師	草野 淳子	
	助手	足立 綾	
母性看護学	教授	林 猪都子	
	准教授	矢野 美紀	H27.4.1 採用 H28.3.31 退職
	助手	江藤 由布子	H27.4.1 採用
助産学	教授	梅野 貴恵	
	助教	樋口 幸	
	助教	石岡 洋子	H28.3.31 退職
	助教	安部 真紀	
精神看護学	教授	影山 隆之	
	講師	杉本 圭以子	
	助教	後藤 成人	
保健管理学	教授	福田 広美	
	准教授	平野 亙	
	助教	佐藤 弥生	
	助手	吉川 加奈子	H27.4.1 採用

地域看護学	講師	赤星 琴美	
	助教	緒方 文子	H27.4.1 採用
	助手	佐藤 愛	
国際看護学	講師	桑野 紀子	
看護研究交流センター	助教	岩﨑 りほ	H27.4.1 採用
	特任講師	松本 初美	H27.4.1 採用 H27.6.30 異動
	臨時助手	板井 里枝	
２　特任教授	特任教授	佐藤 玉枝	H28.3.31 退職
	特任教授	大下 敏子	H27.4.1 採用 H28.3.31 退職
	特任教授	崔 明愛	
３　就職相談員	就職相談員	小川 三代子	
４－１　非常勤講師（学部）	澤田 佳孝	美術とこころ	
	西 英久	哲学入門	
	西園 晃	微生物免疫論	
	松田 美香	言語表現法	
	大杉 至	社会学入門	
	二宮 孝富	法学入門（日本国憲法）	
	足立 恵理	文化人類学入門	
	劉 美貞	韓国語	
	宮本 修	音楽とこころ	
	松田 貴雄	看護と遺伝	
	濱口 和之	看護と遺伝	
	川野 由紀枝	看護と遺伝	
	井原 健二	看護と遺伝	
	麻生 良太	教職概論	
	桜井 礼子	健康論	
４－２　非常勤講師（大学院）	岩波 栄逸	老年診察・診断学特論	
	山口 豊	老年診察・診断学特論	
	永瀬 公明	老年診察・診断学特論 老年アセスメント学演習	
	阿部 航	老年診察・診断学特論	
	安東 優	老年診察・診断学特論	
	吉岩 あおい	老年診察・診断学特論	
	工藤 欣邦	老年診察・診断学特論 老年疾病特論	
	糸永 一朗	老年診察・診断学特論 老年疾病特論	
	古川 雅英	老年実践演習	
	佐藤 博	老年実践演習	
	山本 真	老年実践演習	
	財前 博文	老年疾病特論	
	小寺 隆元	老年疾病特論 老年薬理学演習	
	竹下 泰	老年疾病特論	
	三浦 芳子	老年疾病特論	
	廣瀬 福美	老年NP持論	
	増井 玲子	疾病予防学特論	
	玉井 文洋	健康危機管理論	
	三浦 源太	疾病予防学特論	
	平川 英敏	薬剤マネジメント特論	
	藤内 修二	広域看護学概論 健康危機管理論 疾病予防学特論	
	池邉 淑子	疾病予防学特論	

佐藤 貴子	地域母子保健学特論
宮﨑 文子	看護教育特論
	助産マネジメント論
佐藤 昌司	周産期特論
	周産期診断技術演習
飯田 浩一	周産期特論
豊福 一輝	周産期特論
軸丸 三枝子	周産期特論
後藤 清美	周産期特論
中村 聡	リプロダクティブ・ヘルス特論
嶺 真一郎	リプロダクティブ・ヘルス特論
菊池 聖子	助産マネジメント演習
戸高 佐枝子	助産マネジメント論
生野 末子	分娩期診断技術特論
	助産マネジメント論
	助産マネジメント演習
宇津宮 隆史	リプロダクティブ・ヘルス特論
上野 桂子	母子成育支援特論
堀永 孚郎	リプロダクティブ・ヘルス特論
井上 祥明	母子成育支援特論
谷口 一郎	リプロダクティブ・ヘルス特論
松田 貴雄	リプロダクティブ・ヘルス特論
井上 貴史	リプロダクティブ・ヘルス特論
吉冨 豊子	地域母子保健学特論
實崎 美奈	ウイメンズヘルス特論
佐藤 敬子	母子成育支援特論
立川 洋一	老年アセスメント学演習
久保 徳彦	老年アセスメント演習
原 正範	老年薬理学演習
塩月 成則	老年薬理学特論
	老年疾病特論
大田 えりか	看護科学研究
塚本 容子	老年NP探究セミナー
小野 千代子	看護管理学特論
桜井 礼子	看護管理学特論
小野 剛志	老年薬理学演習
甲斐 博美	看護管理学特論
小山 秀夫	看護政策論
前田 徹	老年実践演習
竹内 山水	老年実践演習
伊東 弘樹	老年臨床薬理学特論
佐藤 雄己	老年臨床薬理学特論
渡邊 めぐみ	分娩期診断技術特論
阿部 実	保健医療福祉政策論
田村 委子	NP論
草間 朋子	NP論
式田 由美子	小児看護学特論

５　事務職員

	事務局長	堤 健一	H28.3.31 退職
・総務グループ	課長補佐	朝倉 泰三	H27.4.30 転出
	課長補佐	橋本 満男	H27.5.1 転入 H28.3.31 転出
	主幹	岩﨑 瑞穂	
	副主幹	安森 竜次	H27.4.30 転出
	主査	渋谷 真由美	H28.3.31 転出
	主査	橋本 正和	H27.5.1 転入
	主任	中野 麻梨子	
	主事	久保 紘子	H27.4.1 採用
	主事	石川 華子	
	事務職員	黒木 亜紀	H27.9.30 退職
	事務職員	片山 知美	H27.4.1 採用
	事務職員	奈須 真由美	H27.12.1 採用
・教務学生グループ	主幹	浜松 弘一	H27.5.1 転入
	副主幹	工藤 哲生	H27.4.30 転出
	副主幹	江田 真砂実	H28.3.31 転出
	主査	染矢 哲朗	
	主任	神﨑 正太	
	事務員	三浦 由香	H28.3.31 退職
	保健師	工藤 優	
	事務職員	神﨑 純子	
	事務職員	岩田 祐未	H27.12.1 採用
・図書館管理グループ	非常勤職員	白川 裕子	
	非常勤職員	姫野 由美	H28.3.31 退職
	非常勤職員	挾間 由布子	